【愛知大学卒業生アンケート調査報告特集（3）
「愛知大学 1960 年代前半期（1960～1966）における法経学部（豊橋校舎、名古屋校舎）、
文学部の卒業生と大学院修了生の在学状況とその後の軌跡」】

1. はじめに

愛知大学名誉教授（地理学）、愛知大学東亜同文書院大学記念センター元センター長　**藤田　佳久**

本稿は、当センターが行っている愛知大学卒業生に対するアンケート調査のうち、前々号、前号に続く第 3 報として、1960 年から全国の大学を風靡した大学紛争期の直前にあたる 1966 年にかけての、ほぼ 1960 年代前半期にあたる卒業生たちの在学時の状況と卒業後の軌跡について問うた内容についての回答分である。

対象卒業生は、学部学科は法経学部の経済学科と法学科の各豊橋校舎と名古屋校舎の卒業生、そして文学部（豊橋校舎）の卒業生、それに大学院修了生である。なお、この時期に存在していた各夜間短大と各夜間学部の卒業生については、すでに前号で紹介したので、それをご参照いただければ幸いである。今回のアンケートの実施時期は 2021 年 3 月に発送した。回答時の年齢は 70 歳代末期から 80 歳代前半とご高齢であり、亡くなられた方も多く、またご高齢ゆえに体調を崩されてご回答を頂けなかった方々も多い。そのため、アンケートの送付数に対するご回答率は高くはなかった。前号でも記したように、全体としてアンケートの実施時期が 10 年遅かったと反省している。

しかし、ご回答を寄せていただいた方々は、学生時代を思い出し、ご自分の人生を振り返りつつ、それぞれの記憶とそれにまつわる思いをしっかりとご回答いただき、母校愛知大学への大きな期待と愛情そして提案までお寄せいただいた。これらを受け取った我々は、その優れて社会人となった卒業生からの「温故知新」も含め、その母校愛知大学への期待感に応えるべき努力を期さねばと思った次第である。

あらためてご回答にご協力をいただいた卒業生各位に心より厚くお礼申し上げたい。

なお、この時期の愛知大学は、その前の愛知大学創設期末に生じたいわゆる愛大事件（1952 年）は、本間学長のその後も続く徹底した学生擁護が、学生たちの信頼と尊敬を得、風評を乗り越え、少々余韻が残る程度になっていた。しかし、戦後の災害史に残る東海地方を襲った台風 13 号(1953 年)と伊勢湾台風（1958 年）は、この時期の開幕前であったが、まず台風 13 号は豊橋市の干拓地神野新田を海面へ引き戻し、三河湾岸に大きな被害をもたらし、　続いた伊勢湾台風は名古屋市南部や海部郡一帯を海に変え、5000 人余りの死者を出す大惨事となった。校舎や交通網の被害により、大学は休校措置が取られ、学生たちは救援活動を行うなど、授業再開まで落ち着かない時期が続いた。

こうして 1960 年代が始まり、日本経済も

動き始めるが、世界では、隣国中国が文化大革命の混乱期、ベトナムではアメリカとのベトナム戦争が激化するなど、激動期にあり、国内も揺れた。そのような中、日本国内では、1960年が日米安全保障条約改定の年であったことから、改定反対闘争がクローズアップされ、6月の裁定に向けて全国の学生のみでなく、広く社会人を含む世論も巻き込んで反対運動が活発化し、国会へのデモ中に東京の女子学生の死亡事件が起こり、波及を恐れた政府強引に締結を図り、岸総理は責任を取って辞任した。愛知大学でも学内がそのような動きに対応し、この年の前半期は落ち着かなかった。

この安保法案の混乱の収拾を図ろうとしたのが、次の総理大臣となった池田勇人でケインズ的手法を導入し、所得倍増計画を打ち出し、経済成長政策によって、政治的に分断化された国民意識の統合を狙った。ここから日本の高度経済成長がはじまっていくことになる。その成果は大学進学率にも表れた。今回のアンケート対象の1960年代当初は、大学進学率はまだ10%台半ばであった。中学卒の就職者は多く、のちの経済成長下で、彼らは「金の卵」と称され、経済成長を下支えした。

したがって、愛大入学者には経済的に恵まれなくても勉学の意欲に満ちた学生たちが集まった。その際、愛知大学の授業料の安さは多くの入学者を支えた面もあった。このような動きの中で、先の読める本間学長は志願者増を予想し、農学部、水産学部、商学部、工学部、医学部、付属高校などの設置の構想を持った。

しかし、その構想を折からのいわゆる三八豪雪（1963年）の中、山岳部13人が富山県薬師岳で遭難する事件が起こった。本間学長指揮による必死の捜索は賞賛され、全国から多くの義援金が集まったが、学長はこの責任を取って辞任し、前述の構想も残念ながら消えることになった。この事件はせっかく歩み始めた大学のさらなる発展を中断することになった出来事であったといえる。

以上が、今回のアンケート対象になった卒業生たちのバックヤード（背景）である。以下の回答の中には、そのようなバックヤードを踏まえた回答もあるので、それらも関係付けてご理解いただけたら幸いである。

2022年度アンケート調査　発送および回収数

			法経学部															新制学部合計		
			豊橋校舎						名古屋校舎						豊橋校舎					
			13法学科			14経済学科			13法学科			14経済学科			文学部					
愛大	西暦	和暦	卒業生数	ｱﾝｹｰﾄ発送数	ｱﾝｹｰﾄ回収数	卒業生数	ｱﾝｹｰﾄ発送数	ｱﾝｹｰﾄ回収数	卒業生数	ｱﾝｹｰﾄ発送数	ｱﾝｹｰﾄ回収数	卒業生数	ｱﾝｹｰﾄ発送数	ｱﾝｹｰﾄ回収数	卒業生数	ｱﾝｹｰﾄ発送数	ｱﾝｹｰﾄ回収数	卒業生数	ｱﾝｹｰﾄ発送数	ｱﾝｹｰﾄ回収数
学園紛争期前	1960	35年	173	69	9	483	212	21							36	23	2	692	304	32
	1961	36年	173	74	5	484	204	16							43	27	0	700	305	21
	1962	37年	128	61	6	463	195	24							40	23	4	631	279	34
	1963	38年	98	52	7	340	160	23	39	14	4	192	91	4	38	16	4	707	333	42
	1964	39年	51	26	2	253	133	16	89	41	5	394	176	15	26	16	2	813	392	40
	1965	40年	74	34	4	259	133	9	104	41	5	470	222	19	37	20	2	944	450	39
	1966	41年	117	59	10	418	219	13	122	49	4	481	222	21	55	28	5	1193	577	53
計			814	375	43	2700	1256	122	354	145	18	1537	711	59	275	153	19	5680	2640	261

			院・専攻		
愛大	西暦	和暦	卒業生数	ｱﾝｹｰﾄ発送数	ｱﾝｹｰﾄ回収数
学園紛争期前	1960	35年	17	6	0
	1961	36年	14	4	1
	1962	37年	21	9	1
	1963	38年	8	3	1
	1964	39年	21	8	0
	1965	40年	24	8	1
	1966	41年	21	14	0
計			126	52	4

※同窓会名簿をもとにアンケートを発送

※データ処理の都合上、多少の誤差が生じる場合もございます

【愛知大学卒業生アンケート調査報告特集（3）
「愛知大学 1960 年代前半期（1960～1966）における法経学部（豊橋校舎、名古屋校舎）、
文学部の卒業生と大学院修了生の在学状況とその後の軌跡」】

2．調査の方法と回答者

愛知大学名誉教授（地理学）、愛知大学東亜同文書院大学記念センター元センター長　**藤田　佳久**

調査の方法は、前回と同様、在学時期に対応した個別調査表を法経学部経済学科（豊橋校舎と名古屋校舎）、文学部（豊橋校舎）、大学院（豊橋校舎）の 1960 年から 1966 年までの卒業生に送付した。内容は前回までとは大きく異なってはいない。出身高校、愛知大学の認知志望と入学理由、志望学科専攻、授業料の工夫、在学中の学業状況、ゼミ活動、卒論在学中の満足度、クラブ、サークル活動、就職、就業状況、就職先、愛大卒業生として在学中の生活、卒業後の同窓会とのかかわり、愛大から得たもの、印象的な思い出、などで、そのほとんどは記述回答とした。

調査票はすべて郵送方式で行った。死亡がすでに分かっている卒業生には送付をしなかったが、大学創設期の卒業生は、調査時点でかなり高齢化しており、亡くなられた方々は多く、そのため回収率は可成り低いものとなった。しかし、そのような中、回答者は調査時点で 77 歳以上のご高齢であり、記憶を頼りに懸命に回答していただいており、十分参考になった。ご協力いただけたことに心から厚くお礼申し上げたい。ただし、もう 10 年早く実施できていたらという反省もあり、心残りはある。

発送数と回収回答数は前表のとおりである。

なお、回収後のデータの一次的な整理は、愛知大学非常勤講師の高木秀和氏にお世話になった。毎週 1 日、1 年間、多くの回収アンケートの整理に取り組んでいただいた。そのご苦労に感謝申し上げる。

表 1 は、1960 年～1966 年卒業生への学部学科別アンケート数と回収率状況を示した。

なおこれらの 1 次データからの整理、まとめ、若干の分析と解説の文章化は小生（藤田佳久）が引き続き行った。法経学部の経済学科豊橋校舎分が多めになっている。これは当時、名古屋校舎には 2 年生まで学ぶ教養課程が置かれ、3 年、4 年の専門課程は豊橋校舎で行われていたためである。これは名古屋校舎法学科も同様である。その後、名古屋校舎にも専門課程が付加されるが、この時期は、法経学部は専門課程はほとんど豊橋で行われていたため、アンケートの回収分も豊橋校舎分が多くなっている。その点をご理解いただき、両学科のまとめを見ていただけたら幸いである。

L-1　L-2　E-1　E-2　B

愛知大学同窓生（昭和35～41年度卒業生）へのアンケートです

アンケートの回答をお願いいたします。［　　］の中で該当する番号に大きく〇をつけてください。複数回答でも結構です。また、自由記載へのご協力をお願いいたします。記入欄が不足の場合は別用紙への記載も可能です。よろしくお願いいたします。

A. あなたの入学時のことなどを差し支えない範囲でお答え下さい。

1 お名前　(　　)　性別［ ①男　②女 ］

入学年次は（ 昭和　　年 ）　卒業年次は（ 昭和　　年3月 ）

生年月日は（ 昭和　　年　　月 ）　現在（2021.3.1）（　　歳 ）

2 入学前のお住まい　(　　県都府道　　市郡　　町村)

入学後のお住まい　(　　県都府道　　市郡　　町村)

それは　［①寮　②下宿　③アパート　④自宅　⑤ほか（　　）］

3 入学される前の学校　［ ①国内　②国外 ］　高校名またはその他(　　)

4 本学への入学は　［ ①卒業後　②編入 ］

②を選んだ方：編入前の学校名　（　　）

5 どのように本学を知りましたか　（　　）

6 本学のあなたの入学先は　［①豊橋　②名古屋（車道）］　キャンパス

(　　学部　　学科　　専攻)

7 本学へ入学した理由は

8 本学へ合格した経緯は

［ ①入試　②推薦　③面接　④ほか（　　）］

9 授業料はどのように工面しましたか

［ ①親から　②親戚・縁者から　③奨学金から　④アルバイトから　⑤ほか（　　）］

10 生活費はどのように工面しましたか

［ ①親から　②親戚・縁者から　③奨学金から　④アルバイトから　⑤ほか（　　）］

11 途中で転学部、転学科、転専攻した場合　［ ①豊橋　②名古屋（車道）］　キャンパス

（ 昭和　　年に　　学部　　学科　　専攻 ）へ

その理由は

B. あなたの在学中の学業は

1 学業の位置は　［ ①学業が主　②どちらかといえば学業　③学業はまずまず　④学業は従 ］

その理由は

2 興味をもったり、面白かった学業分野や授業は

3	印象に残った先生とその理由は
4	ゼミを選択していた方は、どのような内容で、担当の先生は
5	卒業研究を行った方は、その研究テーマは、その理由は
6	先生との交流はありましたか。その交流内容は
7	図書館を利用していましたか。図書館をどのように活用されましたか
8	在学中の全体としての満足度は［　①大いに満足　②まずまず満足　③まあまあ　④あまり満足していない　］ その理由は
9	学業の成果がその後の人生に与えた影響は　［　①大いに影響　②まずまず　③まあまあ　④あまり　］ どのような影響でしたか
	C. あなたのクラブ・サークル活動は
1	クラブ・サークル活動に参加していた方は、クラブ・サークル名は　（　　）
2	よく参加しましたか　［　①よく参加した　②まずまず　③あまり参加しなかった　］ どのような活動内容でしたか
3	クラブ・サークル活動をやってよかった点は　or　クラブ・サークル活動をしなかった理由は
4	クラブ・サークル活動はその後の人生に影響がありましたか ［①大いにあった　②まずまず　③まあまあ　④あまりなかった］ その理由や、良かった点は
5	学外のクラブ・サークル活動をされた場合、どのような活動でしたか
6	その後の社会参加との関わり合いがありましたか

裏面へ続く→

	D. 就職、就業について
1	卒業時に就職活動をされましたか [①かなり積極的　②やや積極的　③普通に　④あまりしない　⑤全くしない] その理由は
2	あなたの卒業時の就職環境は [　①かなり厳しい　②やや厳しい　③普通　④あまり厳しくない　⑤全く厳しくない　]
3	卒業時に就職先、分野を決めていましたか。なぜその分野でしたか
4	希望した分野の職種、企業、機関名、組織へ就職できましたか [　①はい　②なんとか　③意識せず　④意に反して　] それが可能であった理由は
5	差し支えなければ、就職先の企業名、機関名、組織名をお答えください (　　所在地　　)
6	就職のさい、お世話になった方は [①大学就職課　②愛大卒業生　③知人、友人　④自力　⑤就職先　⑥ほか（　　）]
7	就職先では「愛知大学卒業」という経歴は、意識したことはありましたか　[①はい　②少し　③特になし] その理由は
8	転職をされていれば、転職先をお答えください。
	①(会社名:　　/業種:　　/所在地:
	②(会社名:　　/業種:　　/所在地:
9	定年後、再就職されていれば、就職先をお答えください。
	①(会社名:　　/業種:　　/所在地:
10	就職先や社会人として、愛大卒業生は他大学出身者と比較してどのように評価できると思われますか
11	愛知大学卒業生を他大学卒業生と比較すると、どのような点に特徴がありますか（ありましたか）
	E.　愛知大学卒業生として
1	愛知大学の設立主旨は、「世界平和と日本文化への寄与を根幹とし、国際的教養をもつ人材育成、地域社会文化への貢献」であり、さらに「知を愛する真理の探求」、湧き上がった「自由、受難」などが掲げられています。これらの大学の理念が、あなたにどのように反映されたかについてお教え下さい。

2　愛知大学のルーツは上海にあった「東亜同文書院」にあり、そのため愛知大学は戦後旧制大学として設立認可されました。当初、書院生や他の学校からの編入、入学生も多数にのぼりました。あなたは、そのような愛知大学創設期の歴史を知っていましたか

[　①よく知っている　　②少し知っている　　③知らない　]

①②の方は、どのようにして知ったのですか

3　皆さんの在学中、あるいはその前後にいわゆる「愛大事件」があり、本間学長は最後まで学生の弁護に徹しました。この事件に対して、あなたは知っていますか

[　①よく知っている　　②少し知っている　　③知らない　]

「愛大事件」を知っている方（上記①②の方）は、どのように感じられましたか

4　あなたは母校としての愛知大学に　[　①大変関心　②多少関心　③普通　④あまり関心ない　]

その理由は

5　あなたは愛知大学の情報を何から得ていますか

[　①テレビ、新聞　②大学のホームページ　③「愛大通信」　④さまざまな会合　⑤受験雑誌　⑥同窓生　⑦同窓会報　⑧愛大新聞（豊橋、名古屋）　⑧ほか（　　）]

6　愛知大学にどのような情報を期待しますか

7　あなたは同窓会（支部活動も）に参加してますか　[　①はい　②よく　③時々　④いいえ　]

その理由。また、先輩や後輩とどのようなつながりがありましたか

8　同窓会の魅力をどのようにアップしたらよいとお考えですか。要望や提案があればご自由に

9　今日の愛知大学をどのように見ておられますか。要望や提案があればご自由に

10　愛知大学の後輩の学生に伝えたいことをご自由に

11　人生をふりかえって、あなたは　[　①大いに満足　②まずまず満足　③普通　④少し不満　⑤大変不満足　]

12　満足度と、愛大卒業生との関係は　[①大いに関係　②多少関係　③普通　④あまり関係ない　⑤全くない]

13　最後にあらためて、あなたが愛知大学から得たものは何ですか。あれば座右の銘もお答えください

14　あなたが、あなたの人生経験や研究をまとめ、自費出版も含めて刊行したものがあればご紹介ください

15　あなたの愛大時代の印象的な思い出がありましたらご記入下さい

―以上、ありがとうございました―　　2021.3

院　専　　　　　

愛知大学大学院文学専攻科同窓生（昭和35～41年度卒業生）へのアンケートです

アンケートの回答をお願いいたします。［　　］の中で該当する番号に大きく〇をつけてください。複数回答でも結構です。また、自由記載へのご協力をお願いいたします。記入欄が不足の場合は別用紙への記載も可能です。よろしくお願いいたします。

A. あなたの入学時のことなどを差し支えない範囲でお答え下さい。

1 お名前　（　　）　性別［ ①男　②女 ］

院・専への 入学年次は（ 昭和　　年 ）　卒業年次は（ 昭和　　年3月 ）

生年月日は（ 昭和　　年　　月 ）　現在（2021.4.1）（　　歳 ）

2 院・専へ入学前のお住まい　（　　県都府道　　市郡　　町村)

院・専へ入学後のお住まい　（　　県都府道　　市郡　　町村)

それは　［①寮　②下宿　③アパート　④自宅　⑤ほか（　　）］

3 院・専へ入学される前の学校　［ ①国内　②国外 ］　大学名またはその他(　　)

4 本学院・専への入学は　［ ①卒業後　②編入 ］

②を選んだ方：編入前の学校名と学部名　（　　）

5 どのように本学の院・専を知りましたか　（　　）

6 途中または卒業後に転研究科、転専攻した場合　［ ①豊橋　②名古屋（車道） ］　キャンパス

（ 昭和　　年に　　研究科　　専攻 ）へ

他大学（ 昭和　　年に　　研究科　　専攻 ）へ

7 あなたは入学時、すでに就職をしていましたか　（ ①はい　②いいえ ）

その際に、本学院・専へ入学した理由は。また他大学の院・専へ入学した理由は

8 本学へ合格した経緯は

［ ①入試　②推薦　③面接　④ほか（　　）］

9 授業料はどのように工面しましたか

［ ①親から　②親戚・縁者から　③奨学金から　④アルバイトから　⑤ほか（　　）］

10 生活費はどのように工面しましたか

［ ①親から　②親戚・縁者から　③奨学金から　④アルバイトから　⑤ほか（　　）］

B. あなたの在学中の学業は

1 学業の位置は　［ ①学業が主　②どちらかといえば学業　③学業はまずまず　④学業は従 ］

その理由は

2 興味をもったり、面白かった学業分野や授業内容は

3 印象に残った先生とその理由は

4	ゼミを選択していた方は、指導担当の先生、そしてどのような内容でしたか
5	修士論文、博士論文、専攻科論文研究を行った方は、その研究テーマとその研究目的そして自己評価
	［修士］論文名
	［博士］論文名
	［博士課程修了］論文名
	［専攻］論文名
	研究目的・自己評価
6	その後、研究分野の発展や変更がありましたか。その内容をご紹介下さい
7	学内図書館を利用していましたか。学外図書館はどのように活用されましたか。学内図書館への要望があれば
8	学会や研究会の報告は　[　①積極的　②普通　③あまり　]
9	会員になっていた学会名、研究会名、またそこで就任した役員名など
10	在学中の全体としての満足度は［ ①大いに満足　②まずまず満足　③まあまあ　④あまり満足していない ］ その理由は
11	学業の成果がその後の人生に与えた影響は　[　①大いに影響　②まずまず　③まあまあ　④あまり　] どのような影響でしたか
	C. あなたのクラブ・サークル活動は
1	クラブ・サークル活動に参加していた方は、クラブ・サークル名は　(　　)
2	よく参加しましたか　[　①よく参加した　②まずまず　③あまり参加しなかった　] その理由は。また、どのような活動内容でしたか
3	クラブ・サークル活動はその後の人生に影響がありましたか ［①大いにあった　②まずまず　③まあまあ　④あまりなかった］ その理由は

裏面へ続く→

	D. 就職、就業について
1	終了時に就職活動をされましたか [①かなり積極的　②やや積極的　③普通に　④あまりしない　⑤全くしない] その理由は
2	あなたの卒業時の就職環境は [　①かなり厳しい　②やや厳しい　③普通　④あまり厳しくない　⑤全く厳しくない　]
3	卒業時に就職先、分野を決めていましたか。なぜその分野でしたか
4	希望した分野の職種、企業、機関名、組織へ就職できましたか [　①はい　②なんとか　③意識せず　④意に反して　] それが可能であった理由は
5	差し支えなければ、就職先の機関名、組織名、企業名ほかをお答えください
	機関（大学）名など　/業種:　/所在地:
	会社名など　/業種:　/所在地:
6	就職のさい、お世話になった方は
	①指導教授　②大学就職課　③愛大卒業生　④知人、友人　⑤自力 ⑥就職先　⑦ほか（　）
7	就職先では「愛知大学卒業」という経歴は、意識したことはありましたか　[①はい　②少し　③特になし] その理由は
8	転職をされていれば、転職先をお答えください。
	機関（大学）名など　/業種:　/所在地:
	会社名など　/業種:　/所在地:
9	定年後、再就職されていれば、就職先をお答えください。
	機関、組織名など　/業種:　/所在地:
10	就職先や社会人として、愛大大学院,専攻科卒業生は他大学出身者と比較してどのように評価できると思われますか。また愛知大学院への要望があればご自由に
	E.　愛知大学卒業生として
1	愛知大学の設立主旨は、「世界平和と日本文化への寄与を根幹とし、国際的教養をもつ人材育成、地域社会文化への貢献」であり、さらに「知を愛する真理の探求」、湧き上がった「自由、受難」などが掲げられています。これらの大学の理念が、あなたにどのように反映されたかについてお教え下さい。
2	愛知大学のルーツは上海にあった「東亜同文書院」にあり、そのため愛知大学は戦後旧制大学として設立認可されました。当初、書院生や他の学校からの編入、入学生も多数にのぼりました。あなたは、そのような愛知大学創設期の歴史を知っていましたか　[　①よく知っている　②少し知っている　③知らない　]

2	①②の方は、どのようにして知ったのですか
3	皆さんの在学中、あるいはその前後にいわゆる「愛大事件」があり、本間学長は最後まで学生の弁護に徹しました。この事件に対して、あなたは知っていますか [　①よく知っている　　②少し知っている　　③知らない　]
	「愛大事件」を知っている方（上記①②の方）は、どのように感じられましたか
4	あなたの入学前に全国的に学園紛争があり、愛大でもありました。あなたは知っていますか [　①よく知っている　　②少し知っている　　③知らない　]
	①②の方へ。あなたはそれをどう受け止めましたか。また、大学生活にどんな影響がありましたか
5	あなたは母校としての愛知大学に　[　①大変関心　②多少関心　③普通　④あまり関心ない　]
	その理由は
6	あなたは愛知大学の情報を何から得ていますか [　①テレビ、新聞　②大学のホームページ　③「愛大通信」　④さまざまな会合　⑤受験雑誌 ⑥同窓生　⑦同窓会報　⑧愛大新聞（豊橋、名古屋）　⑧ほか（　　）]
7	愛知大学にどのような情報を期待しますか
8	あなたは同窓会（支部活動も）に参加してますか　[　①はい　②よく　③時々　④いいえ　]
	その理由。また、先輩や後輩とどのようなつながりがありましたか
9	前述の「学園紛争」がありました。それはその後の同窓会や大学での活動、その他に影響があればご記入下さい
10	同窓会の魅力をどのようにアップしたらよいとお考えですか。要望や提案があればご自由にご記入下さい
11	今日の愛知大学をどのように見ておられますか。要望や提案があればご自由にご記入下さい
12	愛知大学の後輩の大学院生や修了生たちに伝えたいことをご自由にご記入下さい
13	人生をふりかえって、あなたは　[　①大いに満足　②まずまず満足　③普通　④少し不満　⑤大変不満足　]
14	上記と、愛大院,専攻卒との関係は[①大いに関係　②多少関係　③普通　④あまり関係ない　⑤全くない]
15	最後にあらためて、あなたが愛知大学院生,専攻生から得たものは何ですか。あれば座右の銘もお答えください
16	あなたの研究書や人生経験をまとめ、自費出版も含めて刊行したものがあればご紹介ください
17	以上のほか、あなたの愛大時代の印象的な思い出がありましたらご記入下さい

―以上、ありがとうございました―　　2021.7

【愛知大学卒業生アンケート調査報告特集（3）
「愛知大学 1960 年代前半期（1960～1966）における法経学部（豊橋校舎、名古屋校舎）、
文学部の卒業生と大学院修了生の在学状況とその後の軌跡」】

3．愛知大学「法経学部」「文学部」卒業性たちと「大学院修了生」の在学時代とその後の軌跡

愛知大学名誉教授（地理学）、愛知大学東亜同文書院大学記念センター元センター長　**藤田　佳久**

第 1 章　豊橋校舎「法経学部　経済学科」卒業生の場合

A. 生年、入学年、出身校などの入学時

（1）生年、入学年、出身校

表 1 －A-1 は、この対象者のうちの回答者の生年と入学年を示した。縦軸は生年、横軸は卒業年である。回答者の最古参は昭和 10 年（1935）生まれ、最も若い回答者は昭和 19 年（1944）生まれで、合計 122 人。いずれも戦前の誕生で、戦時下での貴重な生存者ともいえる。幼少期以降、小、中、高の学校生活も厳しい生活の中にあったと思われる。個人的なことではあるが、筆者もまさにこの時期を生きてきたので回答者の方々には親近感がある。愛大卒業年は最古参の 3 人が昭和 35 年（1960）度であり前述の 1960 年から始まる高度経済成長期の第一期生で、社会人として踏み出したといえる。また最若年は昭和 41 年（1966）度であり、まさに高度経済成長の真っただ中へ社会人として飛び出したということになる。

次いで表 1 －A-3 は出身地域を示した。ここではそれを出身高校で示した。愛大がある東三河は 24 人、西三河は 20 人、名古屋は 24 人、尾張知多 8 人、静岡 8 人、岐阜 10 人、三重 3 人、長野 3 人、その他の中部地方 2 人、近畿地方 3 人、関東地方 2 人、四国地方 1 人、九州 2 人である。あくまでこれはアンケートの回答者の数であり、全体を示すものではないが、愛知県内が合計 83 人で、県外が 34 人であり、愛知県の出身者が大半を占めている。県外では近県が 26 人を数え、愛知県とその周辺が入学圏域となっている。それ以外は東北出身者はみられないが、関東から九州まではピンポイント的ながら広がりも見せている。旧制大学としての創設期は海外引揚げ者も含め全国区への広がりも見られたが、新制大学制度が施行され、各地に新制大学が誕生する中で、愛知大学にも地域化の傾向が見られるようになったということであろう。

なお、出身校を見ると、普通課程高校だけでなく、商、工、実業高校への広がりが見られ、当初は多様な学生たちが志願してきたことがわかる。入学先は経済学科であり、学科がかなり幅広の分野であることも反映しているように見える。

（2）愛知大学の認知及び志望動機

愛知大学へアプローチする際、まず「愛知

大学をどのように知ったか」という点である。表１－A-5 は それを示した。目立つのは受験雑誌などからの情報であり、次いで高校の教員からの指導、愛大が地元にある身近な存在としての認知、この時期卒業生も社会人となり、そんな先輩や、知人、親、友人などの知り合いからの情報が、愛大を知るきっかけになっている。さらに、「実際に入学した理由」については、通学の至便性、学費の安さ、高校教員からの勧め、などが目立ち、愛大の基本方針であった授業料の安さは大きな要因になっている。本間学長の勤労青年たちに教育をという信念が機能している。そのほか、前身が東亜同文書院大学であるという歴史性や中国及び中国語への関心、知を愛する大学名へのあこがれなども見られ、遠隔地からは名古屋地区の今後の発展を見込んだという入学生もいた。

実際には授業料の安さが現実問題としてかなり大きな要因となっているが、その実際への問に対する回答は、表１－A-9、10 に示した。それによると、授業料も生活費も親から工面していることが全体の 3 分の 2 を占めている。当時の経済状況がその背景にあったであろう。親にしても授業料の安さが要因の一つになっていたものと思われる。それに対してそのほかはアルバイトや奨学金借り入れなどの工面をしており、働きながら学んだ学生たちが多かったということがわかる。ここにこの地方で愛知大学の存在とその特性が学びの上で大きな役割を果たしたことがわかる。この地域の愛知大学でもあったのである。

B. 学業生活と満足度

では、大学時代の学業についてはどうであったか。B 系列の問から見てみる。

表１－B-1 は、学業のウェイトについての回答である。そのほとんどが「まずまず以上」と回答しており、そのうちの過半が「学業中心であった」と回答しており、向学心に燃え、勉学には熱心に取り組んだことがわかる。この時代、名古屋校舎は教養部として開講されていたが、前述のように、専門課程は豊橋校舎であったため、名古屋校舎入学の学生たちは、専門課程の豊橋校舎で学ぶ目的と意欲がより高かったようである。のちに名古屋校舎にも専門課程が開講され、両校舎での専門教育が行われるようになった。

表１－B-2 は、ではどのような学問分野に関心を持っていたかについての回答である。最も多いのは経営学関係であり、経済学関係は原論、近代経済学、マルクス経済学、と幅が見られる。当時は経済学科に経営学関連の科目も設けられ、後述する経営学の大石教授が人気で学生たちを引き付けていたし、林、山本、四方、玉城、計量経済学の新進で新任の金子敬生の各教授など、他の教授たちもそれぞれの分野と強い個性で学生たちを引き付けた。のちには経営学関係は経営学科として経済学部の中で独立することになる。なお、一般教育にも関心が示され、話で魅了した久曽神教授の国文学、そして書院からの伝統を持つ中国語への関心も高く、折から編纂が始まった中日大辞典編纂の手伝いをする優れた学生もいた。それに哲学や英語もあげられている。英語の若江教授はヘブライ語も教えていた。異色である。

表１－B-3 は、印象に残った先生たちを挙げてもらった。それによると経営学の大石

表１系

A-1

法経学部経済学科　豊橋校舎

	S35 1960	S36 1961	S37 1962	S38 1963	S39 1964	S40 1965	S41 1966
昭和10年	3		1				
昭和11年	6	4	2				
昭和12年	10	2	2				
昭和13年	2	7	2	3			
昭和14年		3	8	2			
昭和15年			9	11	6		
昭和16年				6	7	1	
昭和17年					3	7	2
昭和18年						1	7
昭和19年							4
昭和20年							
未回答				1			
計	21	16	24	23	16	9	13

A-3

出身高校

昭和35～41年卒

東三河	豊橋東	7
	時習館	2
	豊橋商業	3
	豊橋市立	2
	桜ヶ丘	1
	成章	4
	福江	1
	豊川	2
	国府	2
西三河	岡崎北	5
	岩津	1
	岡崎商業	1
	岡崎工業	1
	安城	2
	西尾	1
	西尾実業	1
	刈谷	4
	刈谷北	1
	刈谷商業	2
	豊田西	1
名古屋	旭丘	2
	明和	2
	松蔭	1
	昭和	2
	愛知工業	2
	名古屋市立菊里	1
	名古屋市立向陽	1
	名古屋市立桜台	1
	名古屋市立中央	1
	名古屋市立工業	1
	名古屋	2
	名古屋学院	2
	愛知学院	2
	尾張	1
	東海	1
	東邦	4
	大同	1
	名商大付属	1
	中京商業	1
尾張・知多	小牧	2
	瀬戸	2
	津島	1
	犬山	1
	一宮商業	1
	半田	1
静岡県	浜松北	1
	浜松西	1
	浜松商業	1
	浜松工業	1
	気賀	1
	浜松興誠商業	1
	浜商短大（編入）	2
岐阜県	岐阜	1
	岐阜商業	1
	大垣商業	1
	本巣	2
	海津	1
	多治見	2
	恵那	1
	土岐商業	1
三重県	員弁	1
	松坂商業	1
	尾鷲	1
長野県	飯田	2
	松商学園	1
その他	金沢（石川）	1
	泉丘（石川）	1
	膳所（滋賀）	1
	高野山（和歌山）	1
	八鹿（兵庫）	1
	平塚江南（神奈川）	1
	館山（千葉）	1
	坂出商業（香川）	1
	門司東（福岡）	1
	大村商業（長崎）	1
	合計	115

A-5

本学を知った理由

※回答者のみ集計、複数回答あり

	人数
大学案内、進学資料	4
先輩	6
同級生	2
友人	2
知人	2
親	2
兄	3
叔父	1
いとこ	2
高校教員	13
大石岩雄先生（短大時代の先生）	1
進学塾	2
地元	12
在住地から近い	4
知名度	3
県内私大で最も教員が充実	1
学生の質	1
授業料、入学金の安さ	2
雑誌、雑誌、本、ニュース	14
同文書院	2
外地からの引揚者の仲間	1
旧制大学	1
愛大事件	1
学校史	1

A-7

入学理由

※回答者のみ集計、複数回答あり

	人数
他私大より学費が安い	14
経済的理由	4
自宅通学が可能、通学に便利	32
地元だから	5
高校教員のすすめ	11
先輩の存在	4
友人・知人のすすめ	2
兄のすすめ	1
いとこの存在、すすめ	1
大学受験の失敗、学力不足	3
校名、知を愛する精神	3
優秀な教授陣	3
小岩井先生を尊敬	2
自分に適していた	2
同文書院が前身	5
経済学の修得、興味	3
中国語の修得、興味	4
親の意向	3
健康問題	2
名古屋の将来性を期待して（他県出身者）	1
愛知県に愛着（他県出身者）	2
地元を離れたかった（他県出身者）	1

A-9・10

授業料・生活費の工面

※回答者のみ集計、複数回答あり

	授業料	生活費
1. 親から	104	108
2. 親戚・縁者から	2	3
3. 奨学金から	12	9
4. アルバイトから	33	35
5. 給料から	2	2
5. ほか	2	2
合計	155	159

教授が経営学研究会も主催しており、そこで社会見学も含め、指導も受けられるということで、ダントツのトップで、国文学の久曽神教授が軽妙な語り口で教養科目の人気となっている。エピソードもあげられていて、北海道旅行で観光バスに同乗していた本間学長と会話ができた喜び、他学説を切る山本教授、コンパが楽しかった安藤教授、入院中にお見舞いができた小岩井教授、戦争経済に怒りを込め、迫力があった林教授、よく叱られた杉本教授。歯切れがよい青木教授、厳しいが愛情があった鈴木択郎教授、など、そして熊沢、佐野えんね、伊藤（科学）、山田文雄、酒井栄吉の各教授などである。回答例から見ると、それぞれの教授が学生とさまざまな接点を持っており、そのすべては紹介できないが、教授も学生もそれぞれが尊敬し信頼しあっていた様子が伝わってくる。

それに関連して表１－B-4 は指導を受けたゼミの一覧である。新聞学も含め、幅広くゼミが開かれていたこと、また、当時は各ゼミ生が新入ゼミ生を選ぶ方式をとっており、各ゼミは相互に切磋琢磨していたことがうかがえる。それは全国のゼミ研究発表大会への参加でほかの大学のゼミと交流し、卒論研究へも発展連動した。今回の調査では、愛知大学で全国学生ゼミの大会を実施したときの発表要旨集を寄贈してくれた卒業生もいて、それを見るとまさに学会さながらのレベルで、愛大大会を成功させ、ほかの国公私立大学に負けず各ゼミ活動をベースに健闘していたことがうかがわれる。同じく経営学のゼミ活動でも全国大学や中部 10 大学のゼミ発表大会を愛大が中心になって成功させたと紹介するゼミ卒生もいた。

なお、卒論のテーマも挙げてくれた。全部は示せないが、鉄道企業の教習所での実態調査からの「産業訓練の一考察」、経済発展が進む中での「産業立地について」、「経営者教育」、それに関連した「線形計画での輸送システムの確立」、「中部経済の計量経済的位置付け」、「企業の原価低減原則の研究」、「会計論における減価償却」、「企業会計原則」、「引当金」、「企業会計原則」、「職務給」、「持ち分会計論の考察」、「財政投融資」、「財政」、「経営学組織論」、「賃金、物価、生産性における実証的分析」、「日本の公営企業」、「日本経済に占める中小企業の位置」、「中部地区経済界の現状と将来性」、「我が国経済の二重構造の問題点」、「三河地方の中小企業—鋳物産業と今後の展開」、「輪中と住民の形成」、「1612 年ころの日本経済（農業）」、「貨幣理論の展開」、新しい「割符販売方式」、「商業立地」、「商業新聞批判」、「修正資本主義」、「社会主義と資本主義の経済」「中国人民の労働生産性について」、「中国経済の農業問題」、「資本論研究」などで、新事象にも積極的に取り組んでいた姿勢がうかがわれる。また卒論テーマをしっかり記憶して今回開陳してくれたところに、卒論作成へのおおきなエネルギーが伝わってくる。

次に先生との交流状況についてみると、これについては多くが回答を寄せ、ゼミ単位を中心に、その 3 分の 2 が現役時代だけでなく、卒業後も交流があったとしており、各先生との交流はかなり活発であったといえる。具体的には教員の自宅訪問や研修旅行への同行、研究会誌の発行、卒業後も先生を招いて懇親会や講演会の開催、卒業後も在校生を交えた会食会、先生の奥様も交えた家族ぐるみの交流会、愛大公館での何人

かの先生たちとの交歓会、ゼミ組織を中心とした卒業後の交流会も。変わったところでは、豊橋～名古屋間の通学電車内での交流会としてゼミをベースにした先生との交流会、などがあげられ、そのような場での先生の指導会やゼミ生だけの交流会も数多く挙げられている。教授の別荘に夏中勉強で滞在をしたり、辞書編纂の手伝いを通して鈴木択郎教授宅へ何度も訪問したという例もある。また浅野事務局長宅へも訪問した報告もあり、教授だけでなく大学事務局のスタッフも学生たちとは交流があったこともわかる。それらの多くは卒業後も続いているケースが多くみられ、良き青春時代からの発展が続いている。

図書館利用については、この時代を反映した蔵書がまだ不十分で、普段から十分利用したという回答は多くなく、卒論やゼミ発表など授業の必要性に迫られて利用したという状況と、その一方、毎日近くフルに利用したという一定数の学生もいた。この学生たちは図書館の利用法をしっかり把握していたということであろう。愛大の図書館が、この後急激に整備され蔵書数が全国トップクラスに発展していく前の状況であった。

以上からの在学中の満足度についての回答は、表１－B-8 に示した。回答者のほとんどは「まあまあ」以上の満足度を示しており、回答者の愛大在学中の満足度は可成り高かったといえる。その主な理由をみると、「好きな学科で学べ、ゼミ生たちとの交流が活発にできた」、「高校時代からから変化する磁場であった」、「広い分野にわたる知識を習得できた」、「クラブサークル活動とともに楽しく過ごせた」、「大学らしいのびのびとした自由な校風の良さ」、「次々と新しいことが学べた」、「もの事を理論的に考えるようになった」、さらに「多くの先輩、同輩、後輩などの友人を得」、「寮を通じて全国の友人も得たり、そこでの多くの役員を経験して組織を動かすことの学びもあった」ことなどが大きな経験になったなどがあげられている。

その一方、経済的理由もあってアルバイトに多くの時間を割かねばならなかったとする回答も見られた。人生への試金石でもあった。

また、大学生活がその後の人生への影響については、表１－B-9 に示した。「まずまず」以上は７割以上を占め、「まあまあ」以上は 9 割近くを占める。人生への影響はかなり大きかったといえる。その理由をみると「「考え方が幅広く、深くなり、先輩にも助けられた」、「中小企業の経営」や「信金」、「貿易関係の仕事」、「損保会社の仕事」「会社会計関係の仕事」などに役に立ち、「経済活動の重要性を認識」、「東証１部企業立ち上げの際人事部での活躍」、「雨にもまけず、風にも負けず、貧困にも負けず、頑張り通し、現在の生活を得た」、「入社試験に卒論を提出し、入社試験に合格した」、「労働運動参加時の支え」、「文学活動の下地ができ、文学の道へのきっかけとなった」、「自立心ができた」、「先輩、後輩との付き合いができた」、「中国語の習得で、希望していた中国との貿易会社に入り、活躍ができた」、「一流大学卒の連中に十分伍するだけの成果を得た」と自己評価する回答も見られ、あらたな人生への影響が大きかったことを挙げている。

表１系

B-1　学業の位置

	人数
学業が主	60
どちらかといえば学業	18
学業はまずまず	34
学業は従	7
学業が主・まずまず	1
無回答	2

B-2　興味　※複数回答

	人数
経営学、経営学関係	14
経済原論	6
会計学、会計学関係	5
近代経済学	4
財政学	3
簿記	2
マルクス経済学	2
経済地理	2

中国語	7
哲学	3
英語	2

中国語は実際に学ばなかった人も含む。

B-8　在学中の満足度

	人数
大いに満足	27
まずまず満足	60
まあまあ	28
あまり満足していない	3
まずまず・まあまあ	1
無回答	3

B-9　学業の成果が人生に与えた影響

	人数
大いに影響	30
まずまず	35
まあまあ	31
あまり	15
無回答	11

B-3　印象に残った先生　※複数回答

	人数
大石岩雄	14
久曽神昇	8
林要	7
岡崎不二男	7
山本二三丸	5
鈴木拓郎	5
小岩井浄	5
本間喜一	4
細迫朝夫	4
副島種典	4
金子	4
大内義郎	3
野間清	3
安藤万寿男	3
玉城肇	3

桑島信一	3
今泉潤太郎	2
紺野俊雄	2
胡麻本蔦一	2
青木脩	2
張禄沢	2
小此木久一郎	2
若江得行	2

B-4　ゼミ　※複数回答

	人数
大石（経営学）	8
小幡（財政学）	7
青木（会計学）	6
金子（近代経済学、計量経済学）	6
林（近代経済学、金融資本論）	6
安藤（経済地理学、産業立地論）	5
岡崎（近代経済学）	5
野間（中国経済）	5
一條（日本経済論）	4
紺野（会計学、銀行論）	4
玉城（経済史）	4
山崎（金融論、銀行論）	4
大島（ソビエト経営学）	3
杉本（労働問題）	3
副島（マルクス経済学、資本論）	3
四方（経済史）	2
清水（新聞学）	2
山田（中小企業論）	2
山本（マルクス経済学、資本論）	2
亀井（統計学）	1
郡（統計学）	1
田中（簿記学）	1
村長（日本経済史）	1
吉尾（金融論）	1

C. クラブ、サークル活動

旧制愛知大学が誕生（1946年11月15日）し、時代の変化の中で大学も色々な出来事を体験し、それらを潜り抜けつつあった。今回のアンケートの対象者はその開学から10年余りたった1960年から1966年にかけての入学者であった。授業開始の1947年から見れば、10年余りの年月が経過した。入学志願者、入学者も増え、大学の基盤も少しずつ固まりつつあった。この大学を支えるのは入学した学生たちであり、彼らもまた新しい大学の器に新しい水を注ぎ、愛知大学の存在を社会的にも認知させる役割があった。それは基本的には勉学と研究であるが、同時に学生たちが作り出すクラブ、サークル活動の活発化であった。そしてそれは大学側が用意するものではなく、学生自らが作り出すものであり、その内容は、学生たちの力量と叡智によるものであった。それは戦後が終わり、国民が新たな日本国を建設する中で、地域からの関心事であったに違いない。戦争直後は食べるだけに一生懸命であった人々にとって、大学生のクラブ渇望に関心を持つ人は極めて少なかったに違いないし、腹が減るスポーツも好奇の対象だったに違いない。しかし、以降、少しずつ生活ができるようになって、スポーツや文化、芸術活動は、人間らしき最たるものであることは多くのひとびとも理解できはじめた。主体となる学生たちは、戦争下で失われ、断絶していたそれらの活動を継承し、創造できるようになっていった。特に旧制大学として誕生した愛知大学は人文社会系では中部地方唯一の旧制大学として誕生しただけに、この地域のリーダーとしての役割が期待され、注目されていた。

開学と同時に、学生たちは自由に自分たちの思いをクラブやサークルの設立に向けて動き出した。前々号で述べた開学直後 2か月目に学生たちが演目やスポーツ種目を企画した「豊橋市民との文化交歓祭」は、まぎれもなく学生たちを包んでいた終戦直後の閉塞感を打ち破るエネルギーの爆発であり、その先に様々なクラブ、サークル活動の展望自分たちでひらいたということであったように思われる。それがいち早く可能であったのは、旧制愛大開設後の1949年に認可されたほかの新制大学とは大きく異なり、旧制愛知大学は、上海時代の東亜同文書院大学の在学生の多くを、また海外の諸大学の在学生を編入学生として受け入れたことである。そのため、旧制愛知大学は予科3年、学部3年の計6学年が一気にそろってスタートした。それに対して、それより遅れて開学した新制大学は新1年生だけからのスタートであった。

したがって、学生たちのクラブやサークルは先輩、後輩を交えた形でスタートできたのである。もちろん、まったく新しいクラブ、サークルの結成は学生たちの新たなプロジェクトによって設立されることになった。とはいえ、それはそう簡単ではなかった。この時期まだ日本は貧しく、資金は不十分、学生たちの中には自らアルバイトで生活費や学費を稼がねばならない者たちもいた。彼らにはクラブどころではなかった。また勉学の道だけに進む学生も、クラブやサークルどころではなかった。

ともあれ、こうしてこの時期の開学から10年余りの愛知大学のクラブ、サークルを見ると表1－C-1のようである。それによると、表に示されたクラブ、サークルの数はス

ポーツ系と文化芸術系の合計実に 50 に近い。しかもこれは当時を振り返った回答者の加入分である。この表には当時の愛知大学を代表した硬式野球部も示されていないし、重量挙げ関係部も見られない。実際は、もっと多かったに違いない。しかし、ここでは回答分だけを扱う。

この 50 近いクラブ、サークルの数はこの時期としてかなり多いと思われる。そこに当時の愛知大学の学生たちの身体的エネルギーと知的な好奇心の結集が見られるといってよいだろう。

もちろんクラブ、サークルは学生の必修ではない。表１－C-2 と表１－C-4 を見ると、回答者のほぼ半数は無回答であったり、あまり積極的に参加はしていない学生もいる。ただ、当初は愛知大学だけであったこのクラブ、サークルの活動は大学内にとどまるが、のちに新制大学が新しく産声を上げ、大学間の交流や交流試合が対抗戦のように発展すると、そして場合によっては指導者、監督が誕生すると、関係クラブ員やサークル員はメンバーとして固定され、母校の名誉を背負うようになり、自由というわけにはいかなくなる事態も生じた。前 2 表のうち、クラブやサークルによく参加するという回答者の中には、そのようないわば選手層が形成されているとみてよい。

D. 就職と人生

学業生活の後には就職問題への取り組みがあった。1960 年代当初はまだ戦後の経済不況も残り、就職もスムーズでない局面もあったが、その後は政府の高度経済成長政策もあって、東京オリンピックや神武景気へ向かっていく動きがみられ、求人も次第に増え、採用側には大学卒業生も少ない状況があり、それゆえ積極的に採用する動きが生まれ、全体としてはスムーズに展開した。就職に対する学生側の対応を見ると、今日とは異なり、切羽止まった雰囲気はみられず、就職活動はおおらかであった。ゼミの教授や先輩からの誘い、大学への求人、縁故関係、親の世話などを交えて決定した。「当時就職活動をする人は少なく、学校への求人を見て応募した」など、愛大卒という自負も見られた。

エピソードもいくつか寄せられたが、そのうちの一つを紹介する。

「就職先の〇〇別山株式会社大阪支店では、小生が入社試験を受けた直前に中国語のできる社員三人が急に退社された。したがって、小生の入社後は中国とのやり取りは小生 1 人でやらせてもらうことになりました。中国語は知っていて当たり前でしたから、中国語をレベルアップできる絶好の職場で、願ったりかなったりでした」（昭和 41 卒、一部省略、改変）。

なおアンケートによる各問に対するまとめは表１－D-1、2、4、6、7 の通り。以上述べきた状況がほぼ浮かび上がってくる。全体としてはやはりおおらかな状況であったように思われる。

ではどのような職場に就職したかについて、「就職先」（D-5）、「転職先」（D-8）、「再就職先」（D-9）別に示した。

D-5 の就職先についてみると、県内を中心に、関西、東京、中部のトヨタ系やマツダ、スズキ、三菱ふそう、アイシン、コジマなどの自動車関連企業、金属化学建設関係メーカー、電気、紡績、食品、商社、輸送、メディア、金融商圏、保険、大型商業・、文具、

表１系

C-1　参加していたクラブ・サークル名

※複数回答あり

	人数
自治会	1
学生寮自治活動	1
新聞会、新聞部、愛大新聞	3
体育会	1
応援団	3

剣道部	3
柔道部	3
空手部	3
弓道部	1
少林寺拳法	1
武道系	1

サッカー部	3
バスケットボール部	2
バレーボール部、排球部	2
準硬式野球部	1

卓球部	3
軟式テニス部	1
硬式テニスクラブ	1
バドミントン部	2
ゴルフ部	1

山岳部	1
ワンダーフォーゲル部	1
馬術部	3
フォークダンス部	1
自動車部	2

水泳部	2
水上競技部	1
ヨット部（同好会）	1

写真研究会、写真部	6
美術部、美術クラブ	5
演劇部、演劇研究会	3
男声合唱団	1
尺八	1
囲碁部	1

哲学研究会	1
文学研究会	1
英会話クラブ	1
会計学研究会、会計会	2
株式研究会	1
経済学研究会	1
経営学研究会	1
証券研究会	2
金融（研究会）	1
中国研究会、中国語研究会	4
中国問題研究会	1
日動信部	1

C-2　クラブ・サークル活動の参加

	人数
よく参加した	52
まずまず	11
あまり参加しなかった	11
無回答	48

C-4　クラブ・サークル活動の影響

	人数
大いにあった	34
まずまず	12
まあまあ	15
あまりなかった	7
無回答	54

表１系

D-1　卒業時の就職活動

	人数
かなり積極的	9
やや積極的	11
普通に	45
あまりしない	26
全くしない	23
普通に・あまりしない	1
無回答	7

D-2　卒業時の就職環境

	人数
かなり厳しい	26
やや厳しい	36
普通	41
あまり厳しくない	10
全く厳しくない	4
無回答	5

D-4　希望した分野への就職

	人数
はい	24
なんとか	24
意識せず	32
意に反して	19
意識せず・意に反して	1
無回答	22

D-6　就職でお世話になった人　※複数回答あり

	人数
大学就職課	26
愛大卒業生	10
知人、友人	27
自力	30
就職先（OB、知人）	2
ほか（教授、親、縁故など）	15
無回答	23

D-7　愛大卒業生の経歴を意識

	人数
はい	44
少し	27
特になし	33
無回答	18

D-5　就職先（1/2）

名称	所在地	（人）
パイロット万年筆（株）	東京都	2
アイシン高丘株式会社	豊田市	2
小島プレス（株）	豊田市	2
（株）マツダオート名古屋	名古屋市	2
日製産業（株）	東京都	2
河合楽器製作所	浜松市	2
（株）中山製鋼所	大阪市	1
ゴムノイナキ（株）	名古屋市	1
旭精工（株）	堺市	1
朝日工業（株）	豊橋市	1
愛三工業（株）	大府市	1
井澤金属（株）	大阪府	1
（株）興和工業所	名古屋市（本社）	1
新東工業株式会社	名古屋市	1
共成鋼材（株）	名古屋市	1
新日東化学（株）	神戸市	1
三共理化学（株）	名古屋市	1
（株）江沼チエン製作所	石川県	1
津田工業（株）	刈谷市	1
（株）竹中工務店	大阪市（本社）	1
徳倉建設株式会社	名古屋市	1
東洋プライウッド	名古屋市	1
日本ドリゾーム（株）	東京都	1
大府紡績（株）	大府市	1
手嶋繊維工業（株）		1
□□織布	浜松市	1
遠山産業株式会社	名古屋市	1
アート工業（株）	豊橋市	1
アート産業（株）	豊橋市	1
トーエネック	名古屋市（本社）	1
都築電気工業（株）	名古屋市	1
ホンダ・三菱電工代理店	名古屋市	1
サーラコーポレーション	豊橋市	1
（株）パロマ	名古屋市	1
松下リース（株）	大阪市	1
宮地工業	名古屋市	1
中京コカ・コーラ	名古屋市	1
中部ペプシコーラ（株）	名古屋市	1
カゴメ（株）	名古屋市	1
金城製菓（株）	豊橋市	1
太洋物産株式会社	大阪府	1
総合商社	名古屋市	1
阪神急行自動車	大阪市	1
西濃運輸（株）	大垣市	1
丸太運輸（株）	名古屋市	1
勝木海運（株）	名古屋市	1
名古屋港振興組合	名古屋市	1
東海放送	名古屋市	1
毎日新聞社	大阪市（本社）	1
新聞社	東京都	1
大手専門出版社	東京都	1
ミノルフォンレコード	名古屋市	1

表１系

D-5　就職先（2/2）

名称	所在地	（人）
愛知トヨタ自動車（株）	名古屋市	1
岐阜トヨタ自動車（株）	岐阜市	1
名古屋トヨペット（株）	名古屋市	1
愛知スズキ販売	名古屋市	1
愛知マツダ	大阪市	1
マツダオート名古屋	名古屋市	1
名古屋三菱ふそう自動車	名古屋市	1

名古屋信用金庫	名古屋市	1
豊橋信用金庫	豊橋市	1
豊橋商工信用組合	豊橋市（本店）	1
尾西信用金庫	愛知県	1
大栄信用組合	名古屋市	1
磐田信用金庫	磐田市	1
岐阜信用金庫	岐阜市	1
豊橋農協	豊橋市	1

大井証券	大阪府	1
山一証券（株）	伊丹市	1
角丸証券	東京都	1
証券会社	名古屋市	1

三井生命保険相互会社	東京都	1
東邦生命相互会社	東京都	1
千代田火災		1

ナゴヤ□□□□（スーパー）	名古屋市	1
（株）丸栄百貨店	名古屋市	1
名鉄百貨店	名古屋市	1
西川屋チェーン	名古屋市	1

株式会社　文祥堂	東京都	1
（株）イトーキ	名古屋市	1

建設省中部地方建設局	名古屋市	1
国家公務員	中部・近畿管内	1
地方公務員（県）	香川県	1
県教育委員会		1
犬山市役所	犬山市	1
刈谷市役所	刈谷市	1
浜松市役所	浜松市	1
地方公務員		1
市議会議員		1

静岡県学校教育関係	静岡県	1
三重県内の中学校	三重県	1
三重県立高校	三重県	1
市邨学園高蔵高校	名古屋市	1
享栄高校	名古屋市	1

（株）東海事業所	名古屋市	1
株式会社藤石材	恵那市	1
周平株式会社	京都市	1
杉生商店		1
会計事務所		1

家業		2

表１系

D-8　転職　（各1）

名称	業種	所在地
阪部工業（株）	鋳造業	西尾市
風媒社	図書出版	名古屋市
愛知新報社	政党新聞社	名古屋市
著述業		
一進産業（株）		静岡市
サンリオ		アメリカ
（株）島精機製作所		和歌山市
家電販売店（個人）		知立市
名古屋椅子工業（株）	椅子製造	刈谷市
不二サッシ（株）	営業	東京都
大洋漁業株式会社	漁業、食品	東京都
中部ペプシコーラ株式会社	清涼飲料製造販売	名古屋市
寺田建商（株）	建築機械の販売	名古屋市
（株）岩永製作所	防災	東京都
自動車保険料□算定会	事故調査業務	名古屋市
湯浅□□工業（株）	経理	名古屋市
□□クスタ（株）	包装資材業	大阪府
愛知県商工会連合会	経営指導員、商工指導員	名古屋市
社労士業		
日本NLR（株）	事務機販売	名古屋市
日本オリベッティ（㈱名古屋市	事務機販売	名古屋市
中京建鉄工業	土木（橋梁）	小牧市
（株）津田鈑（出向）	自動車部品	知立市
東亜建設（株）	土木建設業	名古屋市
日本タイル工業（株）	営業	多治見市
東海窯業（株）	営業	多治見市
（株）ダイワ不動産		岡崎市
ダイワ管理システム（株）		岡崎市
旭丘高校他	教育	名古屋市
蒲郡竹島観光（株）	ホテル業	蒲郡市
東邦生命相互会社	生命保険	東京都（本社）
岐阜県羽島市役所	公務員	岐阜県
中部ペプシコーラ	飲料水	名古屋市
（社）セールス・プロモーションビューロー	経営コンサルタント	東京都新宿区
協和化学（株）	化学工業薬品製造販売	兵庫県ほか
（株）エーデル ダイケン	化学工業薬品製造販売	岐阜県
（株）総合開発機構	不動産業	豊橋市
スギヤマ便	託配便	豊橋市
（株）中部	管工事、土木工事	豊橋市
利昌工業（株）	営業	名古屋市、松本市
ミユキエレックス	営業	名古屋市
大阪スバル自動車（株）	自動車販売	大阪市
朝日生命	営業	全国
ホウコク株式会社	繊維製造業	名古屋市
日本鋪道	常温合材販売	名古屋市
奈良県信用組合	金融	奈良県
（株）東京精密	精密機械	東京都
刈谷紙器（株）	段ボール製造販売	刈谷市
原田商事	機械商社	大阪府（本社）
長野トヨペット（株）	営業	飯田市
渥美町役場	地方公共団体	渥美町
三重県真珠株式会社	真珠養殖、加工、販売	伊勢市
明治真珠（自営）	真珠加工、販売	伊勢市
鈴木会計	税務	浜松市
鈴木□□	染色	浜松市
前田建設		大阪府
フジトランスコーポ		名古屋市
トヨフジ海運（株）	海運業	東海市
協栄物産	家庭用品メーカー	名古屋市
□□幼稚園		名古屋市
北方町商工会	サービス業	本巣郡北方町
名古屋実業（株）	印刷	扶桑町
テクノタジマ	鉄鋼問屋	名古屋市

表１系

D-9　再就職　（各1）

名称	業種	所在地
TVメヂイア・ジャパン社		
ABC・Mortor社（NZ）		
神杉酒造	酒造業	安城市
浜松熱供給（株）	アクト全体の空調	浜松市
スーパー		
尾西アイエス（株）	損害保険紹介業	一宮市
東洋工芸（株）	営業	多治見市
住友信用保証株式会社		
トヨタファイナンス		
豊田乳業		
刈谷職業安定所		
愛知商事	個人事業主	豊明市
大同工業大	事務	名古屋市
中京大学	秘書	名古屋市
丸栄コンクリート工業（株）	コンクリート製造販売	岐阜県
岡崎プリント（株）		岡崎市
（株）エーデル ダイケン	化学工業薬品製造販売	岐阜県
静岡簡易裁判所浜松支部	調停委員ほか特別職	浜松市
（株）三晃空調	管工事業	名古屋市
大学非常勤講師		
三愛自動車（株）	中古車販売業	春日井市
岐阜金属（株）	非鉄金属卸売業	岐阜市
豊橋商工信用組合	地方銀行	渥美町
（株）ネンキ	住宅設備機器	西東京市
市町村教育委員会		
（財）河川情報センター		名古屋市
イビデン	製造業	大垣市
ミズノテクニクス	製造業	養老町
オークワ	小売業	養老町

公務員、教員、その他と多様な業種に広がっている。転職もかなり見られるが、そこではより地域密着型の企業が並んでいる。再就職もそのような傾向が強いように思われ、地域経済の土台を第から築いてカバーしたことがわかる、

なお、アンケートでは、職場などの社会体験の中での愛大生の評価と愛大生の特徴を問うた。この両者は分離できないので、併せてプラス的、普通、マイナス的なキーワードにまとめて示してみた。職場の状況や各人の性格もあるため、目安的な内容であることを付記しておく。

例えば、プラス的側面は、「積極性、努力家、まじめでよく働く、地道な努力家、温厚で協調性あり、愛大史と書院の頑張り屋、処遇する際に下のポジションには置けない、東亜同文書院の背景の大学、個性的、営業での頑張り、5 段階の 4 くらい、社会的に役立つ、行動力あり、親しみが持てる、学業では他大学に負けず、行動力あり、誠実、退職後も顧問として勤務、おっとりしているが個性派、穏健な愛知県民性有、独立心あり、本人のやる気で評価される、発想の自由さと適応力、人間性豊か、出世主義ではない、やらまいか精神あり、偉ぶらない、控えめゆえに他人から親しまれる、自己努力と発言力、バンカラ校風で積極的、一目置かれていた、劣っていると思った部分は頑張った（現在の愛大生は大丈夫か、の逆質問も）」などなどであった。

「普通」というレベルでは、「評価は個人の問題、職場にはほかの大学出身者がいないので、愛大と比較できない、個人力の社会だから比較は困難、意識しなかった、人により様様、実績主義だったから、比較するだけの卒業生がいなかった、特になし、個人の問題、特になし、比較する大学卒生がいなかった、本人の能力次第だ、他」などである。

「マイナス」のレベルでは、あまり見られないが、「英文、英会話が弱点では」であった。中国語への特化だった表れかも。

以上を単純にカウントすると、プラス的評価は 87 件、普通評価は 43 件、マイナス的評価は 1 件であった。しかし、全体としての評価は単純でなく、「普通」評価が全体の 3 分の 1 を占めたのもその表れであろう。それを踏まえても愛大卒業生が社会へ出て頑張り、評価されていた様子は十分にうかがえる。

E　愛知大学卒業生として

（1）愛知大学設立趣意書とのかかわり

次は愛大設立趣意書についての卒業生のかかわり、受け止め方についてである。愛大設立趣意書は終戦直後の 1946 年、旧制大学として愛大が誕生するときの設立方針である。その内容は第 2 次世界大戦を反省し、平和国家への寄与を大きな冠として掲げ、それを実現するために国際人の養成と地域文化への貢献を掲げた。国際人の養成はまさにそのベースに東亜同文書院大学の存在があり、戦後の占領軍 GHQ が日本人を 4 島に閉じ込める政策に対して、あえてその国際性を主張し、認可された。その点では画期的な趣意書であった。地域文化への貢献は大学が立地した豊橋は地方都市であり、6 大都市以外に初めて開設立地できた初の旧制大学であり、その点でも初の画期的な誕生であった。両者とも、当時としては斬新な大学設立目標であり、まさに愛知大学の世界と地域を結ぶ画期的な設立趣意書であった。

そしてそれは学内ではキャンパスも学生たちもまだ落ち着かない創設期に「自由、受難の鐘」とともに誇り高く学内に刻まれた。

これについて、1966 年卒生は、

「小生にとって、わが母校はその設立趣旨、愛知大学学生課、愛知大学寮歌が三位一帯となって、読むたび、歌うたび、聞こえるたび、まさしく魂に届きます。何とか願わくば、これが小生の人となりになって、永続して欲しいと思ってやみません」

と熱い心を開陳している。

回答の中には、意識的に無意識的に、この設立趣意書、そして「自由、受難」が体の中にしみこんでいる、として大学との一体感を理想として意識してきたとする回答は多い。そして先生方が授業を通して、学問での真理の探究へむかう熱心な姿にその人格も含め敬服したことも伝わってくる。もう一つの「地域文化への貢献」については、色々な形でボランティアも含め、その経験を紹介しており、中には、本格的に豊橋港行きの明海地区の開発をリードし、貢献した経験も紹介している。ただ、この早い時期である 1960 年度卒生の一人は、マルクス経済学が当時の愛大経済学部では主流であり、大企業への就職はできなかったとこぼしている。しかし、当時は近代経済学が未成熟で、全国の主な経済学部はミッション系大学を除けば、ほとんどマルクス経済学であり、経営者のなかでもそれを習得していたケースも多かった。実際、愛大生の前述した就職先を見ても、その後に大企業発展する企業へ就職した卒業生は多い。1960 年は、最初の日米安保改定の学生および社会人のデモがあり、その影響があったのかもしれない。しかし、もしそうであれば、チェックは愛大だけではなかったはずである。

（２）東亜同文書院の認知

ここでは、旧制愛知大学のベースを作った東亜同文書院大学にたいする認知の問である。旧制愛知大学誕生時、東亜同文書院からの引揚げ学生は 500 人ほどいて、予科 3 年、学部 3 年の計 6 学年生たちが一斉に旧制愛知大学へ編入してきた。

今回のアンケート対象者たちは、彼らがほとんど卒業した後の入学生たちである。その先輩たちをどのように知っているかの問いである。

表１－E-2 は、知っているかどうかの問である。回答してくれた 43 人中 35 人は少し以上知っているとし、8 割が認知している。そして、アンケートの記述内容を個別にみると約 100 人が何らかの形で知っており、全体のアンケート数から見れば、やはり 80％ほどとなる高い認知率である。中には書院卒業生と実際に会って直接交流した経験者もいて、情報は可成り共有されていたように思われる。

（３）愛大事件の認知

愛大史のなかの大きな事件の一つがいわゆる「愛大事件」であった。夜陰に校内に紛れ込んだ男二人を寮生が不審者としてとらえ、誰であるかをチェックしたら現役警察官二人であった。服から警察手帳とピストルが出てきたからである。本来なら侵入者として逮捕した学生側の手柄であろう。しかし、違った。当時は東大ポポロ事件のように学生運動が活発化しており、誕生したばかりとは言え、旧制愛知大学は大学として全学年体制が一気に出来上がっており、警

察がその動きを偵察に来たのである。警官二人を捕まえたとして、学生は手柄どころか警察官をとらえた犯人とさせられてしまった。戦後の警察は民主化されたとはいえ、日まだ浅く、戦時体制のふんいきがまだ強かった。しかも市町村警察から、広域を管理する県警ができたばかり。東大のポポロ事件は何の問題にもならなかったのに、愛知県警は愛知大学を旧制大学とはいえ生まれたばかりの大学だから簡単な相手だと思ったのだろう。これを機会に新生県警は張り切った。寮の学生を次々と逮捕した。戦時中のグループ逮捕と同じやり方だった。しかし、県警察には認識のミスがあった。愛大の創設者で 2 代目本間喜一学長がちょうど最高裁事務総長から愛大学長へ戻ったばかりであったからだ。本間喜一学長は、二人が一緒に受けた侵入者である警察官の尋問内容を信用せず、学生の尋問内容が正しいと見抜き、その後、学生は三親等の関係だとして、国会や最高裁まで徹底的に弁護を貫いた。

この一件はメディア側の過剰報道もあって、戦時体制の雰囲気が残る県内では、事件を引き起こした愛大に対して「赤い大学」というレッテルを張り付けようとした。しかし、以上のような経過を目の前で実感した卒業生たちは、そのようなメディア報道とは異なり、そのアンケートの中で、本間先生の学生への信頼と愛情、そして大学への信用が強くしかも冷静に語られ、一方、国家権力の乱用も強く指摘批判している。戦後の混乱期の余韻がまだ残り、世界へようやく独立復帰した日本が再出発するときの、そしてまだ日本の高等教育が芽生え始めた中での、実体のない言葉だけの「民主主義」時代に引き起こされた事件であり、その時代を象徴する出来事であった。そんな中で愛大生の多くは事の本質を感じる力を持ち、見抜いていたという点が、アンケートから浮かび上がってくる。そして責任を全うした本間先生への信頼と尊敬、愛大への信頼を在校生、卒業生たちにもたらしたといえ、この事件の意味は「温故知新」として現在の愛大学生、関係者のみならず、もっと広く知られてもよいだろう。

もう 1 点、付加するならば、この事件は当時の学生寮を中心に始まった。寮生の原点は東亜同文書院生はじめ外地にあった高等教育学校からの帰国学生であり、戦争末期には軍事訓練もほとんど受けてない書院生を含め、学業途中で学問を国家によってあきらめさせられた学徒出陣の経験者で、戦場を知り、学友を失った戦争体験をした学生たちであった。とりわけ書院生は、外地にあって、自由に広大な夢に向かって歩み始めた学生たちであった。不本意に自らのみちを閉ざされた、あるいは閉ざされようとした学生たちにとって、ふたたび国家権力の登場には敏感であったに違いない。学徒出陣の経験のない後輩の寮生たちも、寮生活を通して書院生たちの息吹を吸収していたことであろう。そして上海にあって東亜同文書院の長い歴史の幕を自ら閉じざるを得なかった最後の本間喜一学長も不本意な学生たちの心情を十分理解していたに違いない。そして帰国して書院を踏まえて夢と希望に満ちた広大な構想を持ち、新大学の実現をめざした矢先に再び国家が立ちはだかった事件であった。まさに身内に感じた学生を最後まで面倒を見るエネルギーの根源はそこにもあったように思われる。それ

は今度こそ国家権力には負けない、そして責任も全うしようとする本間学長の姿勢でもあったろう。その本間先生の姿を知って卒業生たちのアンケートが回答されており、この時は愛大全体がほぼ本間学長に共感し、支持して盛り上がっていたことが伝わってくる。改めて「温故知新」である。

最後にアンケートの集計分を示しておく（表１－E-３）。回答者 122 人のうち、「愛大事件を知っている」以上が 91 人で、この事件に対する 75%を占めている。若干の回答例を示すと、「愛大の熱気と政治状況を感じた。学生たちに寄り添い続けた本間先生の人格に傾倒した」、「大学生として立派な行動で、誇るべき事件であった」、「愛大事件は残念です。しかし、本間学長の姿勢はありがたく、尊敬しています」など、本間学長の正義への共感と尊敬の言葉が続く。のちに卒業生越知専氏が位置づけた指導者学長の「本間イズム」に全学生、そして大学が最高にまとまった時代であったといえる。

（４）母校愛大への関心

次は母校愛大への関心レベルについての問である。そのレベルについてのみ単純集計した結果を表１－E-4 に示す。無回答を含め 75%が多少以上の関心を持っており、関心度は高い。うち「大変関心を持っている」とする卒業生はほぼ半数を占めており、愛大状況とその動向に強い関心を持っていることがわかる。

その関心理由についてみると、関心が「大変高い」ランク層では、「愛大のどんな出来事も自分の分身と理解しているから」、「私は母校が中部地方の私学ではナンバーワンだと思っている」、「苦しい生活の中で親しい友人にも恵まれ、印象深き青春時代をおくれたことで、愛知大学は人生の支えになっているから」、「母校は自分のルーツだと考えている」、「愛大卒業生として誇りを持っている」、「愛大で学べて本当に良かったと思っている」、「愛大の先輩たちの各界での活躍ぶり」、「徹底して教授も学生も教育を重んじる精神」、「自分の人生に大きな影響があった」、「歴史と伝統のある大学」、「著名な先生がたがおられた」、ほかである。このように愛大への心からの愛着を持った卒業生が多く、これは本学にとっての宝物であり、このような愛大ファンが今後も続くためにも、大学当局は学生ための視点をしっかりと持つべきであろう。

というのは、関心を持つこのランクの卒業生からも、またそのほかのランクの卒業生の一部からも、近年、愛大らしさが弱まっていること、他の私大と同様のレベル化への危惧の念を抱く指摘も見られるからである。それについてはあらためて教員も学生も愛大の歴史を学び、「温故知新」を踏まえることが重要だとする助言もある。あらめて、愛大に注がれる卒業生からの期待の目の重要性に気づかされる。

（５）愛大情報の入手

では愛大情報の入手先は何かを、情報源の項目としてまとめたのが表１－E-5 である。こちらから入手先の項目については 提示した。

それによると、最も多いのは「愛大新聞」、次いで「愛大通信」、次がテレビや新聞で、複数回答ではあるが、この３媒体でほぼ 75%を占める。回答者の多くが高齢者であることからすれば、新聞や情報紙誌、テレビ

などが中心だろうというのは予想通りである。ただ学内の学生新聞がこれだけの比率を持っているのが予想外であった。特に入手法はむつかしいのではないかと思うからである。「愛大通信」は送付されるから納得はできる。それだけに高齢の読者層が知りたい情報提供にも考慮する必要があるだろう。アンケートでは、大学の動き、卒業生の動向などには強い関心を持っている事がわかっている。年 1 回の情報ではあるが、それを増刊するか、内容を豊かにするかは、同窓生からの発信もうまく入手していくことが必要であろう。

一方、大学発のホームページの閲覧者は大幅に少なく、ホットな情報が届いていないことがわかる。アナログの高齢者の場合、アプローチしにくい手段である。そこをどう伝えるかは、手法も含め大学側が丁寧に伝えていくべきであろう。情報機器の環境があった今後の高齢者にはアプローチは容易になるであろうことも期待してである。また、同窓会活動も、その情報の出しかた、あり方も含め、検討していく必要があるだろう。

（6）同窓会への参加状況

次に愛大卒業生の組織である同窓会への参加状況を問うた。

それによると、1「はい」は 18 人、2「よく」は 6 人、3「時々」は 23 人、4「いいえ」は 27 人である。全体としてみると、6 割の 74 人の卒業生がこの問に反応しており、無記入が 4 割である。回答をした中の「いいえ」の回答内容を見ると、転勤や高齢化のため、友人たちが健康上出てこられなくなり、かつては出席していたがそれが困難になったという回答が目立つ。また、同窓会ではなく、ゼミ会、クラブ OB 会、高校教師の会などの方に出席しているという回答も見られる。会員の高齢化が大きな理由でもある。また、会の開催情報を得ていないという回答者もいる。積極的あるいは何等かの形で参加しているとする回答内容では、それに連動して地域活動にまで及んでいるという例まであり、また、多くの先輩後輩との交流で多くの情報を得ており、また愛大のよさを伝えているなどとする積極的な回答もいくつか見られる。支部によってはウォーキングなどのレクリエーション活動も加え発展しているケースも見られ、活動の多様性が見られる。

この地方では愛知大学の同窓会がもっとも活発だとされてきたし、それは以上のような活動からもうかがわれる。一方、会費納入率の問題や、参加者率、参加者年齢の偏りなどの指摘もある。それに対しては、ＰＲの徹底、表彰制度、終身会員制度の導入、参加の際の勧誘、情報誌の拡充、大学での講演会のＰＲ、街中に交流できる常設ルームの設置　（少し前まで、金沢には都心に愛大交流カフェがありましたが、入居ビルの建て替えで、いまはなし—筆者注）などの案が回答されている。

（7）大学への要望など

卒業生の目からいろいろな提案がみられる。それらをまとめると、一つは、これまでの愛大の伝統を広く知ってもらう工夫が必要、時代の流れになかで、時代にも対応できる理系情報系学部などの増設と豊橋校舎の学部拡充を目指す。今日のような日中関係だからこそ、書院以来の歴史を踏まえた愛

大こそが日中間の民間をつなげられる人材養成を。今日の愛大は地味すぎるので、もっと愛大をかつてのように全国区で広く知ってもらう工夫を。メデイアにもっと愛大教授が評価されるように。入試の推薦制度で有能な学生を。ゆとりある学園環境を。これまで社会に迷惑をかけない学生を育ててきた指導を（給付金事件はほんとうに悲しかったし、失望もした）。

以上多岐にわたるが、愛知大学の基礎を作ってきたこの期の卒業生たちは、優れた社会人として戦後日本を築いてきた経験者の先人達（77 歳以上－回答時）であり、愛大の宝物でもある。そのような卒業生の発する言葉には、学内だけの狭い発想とは異なり、より広い本質を踏まえたスタンスからの母校の愛大に対して強い関心と愛情の思い入れがあるように思われる。愛大のより優れて発展することを希望している多くのこの卒業生たちの熱い気持ちを受け止めていくことは本学にとっての大きな知恵を得、発展につながるであろう。

（8）後輩たちへ

上記に関連して、後輩たちへ伝言も問うた。これも各人の人生経験から９み出された言葉である。一部要約して後輩たちに届けたい。

「常に同窓生であることを誇りに」。「和して同ぜず」。「誠意を以てつとめ社会貢献平和を」。「学生として誇りを」。「世界をよく見てほしい」。「個性を伸ばせ」。「自由闊達」。「誇りを持って」、「自分の心に残る学問を」。「スマートでなくひたすら頑張る気概」。「自分の言葉を持ってプライドを」。「自分さえよければではない社会を」。「愛大の伝統と設立理念を」。「学問に徹した人物に」。「学問も部活もボランティアも」。「学生時代空手部、根性は負けず。勉強もした」。「誠実さと挑戦」。「自信と必死」。「学歴ではなくやる気」。「自由のありがたさ」。「友は財産」。「自由」。「学生運動と信」。「聞いて一つ、通りて一つ、年限重ねて一つ、の理」。「至誠女神」。「馬術部で馬と接することで、馬に必ず達するを学んだ」。「艱難辛苦」。「歳月人を待たず」。「臥薪嘗胆」。「自由発想力」。「人生良い場面ばかりではない。前向きな方を。」。「至誠一貫」。「経済学専攻してよかった」。「自信」。「すばらしい大学あったと」。「上を見すぎるだけではいつまでも満足しない」。「友人」。「自由な学風。遊んでばかりいた自分に先輩や先生の言葉でやる気が。人との出会いは大切」。「ネバーギブアップ」。「愛大国際問題研究所で近代日中関係書籍複数あり、販売します」。「自分で考える力を」。「努力」。「和を以て尊しとなす」。「華語習得時の訓導、人の和に如かず」、などである。各卒業生の言葉をそれぞれの人生と関係づけて検討すれば、愛大卒業生に関する優れた研究が誕生するだろう。

（9）愛知大学から得たもの

以上の人生からの後輩への送り言葉を見てきた。ではその愛大という原点で何を得たかであるが、次のテーマである。大学から見れば、在学中の教育を通して、社会へ送り出した卒業生が、大学で何を学んだのかということは、従来ほとんどフイードバックされていない課題でもある。愛大だけの話でもないだろう。

それを卒業年の時間軸から見ていく。回答された多くはキーワード風なのでそれに

従うことにする。キーワードをどう読み取るかは、今後の急ぐべき課題であろう。

1960 年

「課題に取り組む情熱」、「苦あれば楽あり」「真理の追求」、「一人は万人のために、万人は一人のために」、「何事も経験」、「努力は雑草のように生きる」、「誠心誠意」、「人々との出会いを大切に」、「何事にも負けずに突き進む」、「自由、粘り」、「責任をこなし誇りであった」、「真実一路」、「愛と喜び」、「がつがつせず自由な気持ち」、「自由。世の中には自由は全くない」、

1961 年

「自己責任での自由を」、「学んだことを生かし就職で生かせたこと」、「考え方を幅広く、塗閣進める」、「忍耐」「継続は力なり」、「サッカー部での忍耐力」、「「一期一会」の大学卒業」、「前進」、「ひとの一生は重荷を背負うと遠き道を行くがごとし。急ぐな」、「自由と受難の愛大史」、

1962 年

「積善家有余慶」、「全力投球」、「継続は力」、「世界平和、戦争反対」、「愛大見学の精神、精神一統一何事かならざらん」、「親しい仲間を得たこと、一隅を照らせ」、「戦争に加担しない。小岩井先生「憲法を守れるかどうか瀬戸際だ」、「知る限り卒業生は我慢強くまじめで信頼されている」。

1963 年

「誠実に生き挑戦する力を」、「自信、必死」、「人生は学歴よりも気で決まる」、「往時には無意識であった自由」のありがたさ」、「バスケットボールの友は財産」、「強いてあげるなら自由」」、「自由な発想力」、

「至誠如神」、「臥薪嘗胆」。

1964 年

「人間の生き方、判断力の大切さ、常に弱者に目を向ける。政治も」、「至誠一貫」、「自信です」、「素晴らしい大学であった」、「知息」に感謝し、さらに努力を」、「自由なやる気。先輩先生の言葉で勉強にやる気が出た」

1965 年

「ものの考え方」、「青春時代に大学で学んだことは大きい、善友善学」、「ネバーギブアップ」、「人生は邂逅」「人生を豊かにして下さいました」。

1966 年

「考え方の芯をもらったと思います」、「一つのことを長く続けて努力する」、「多少自分自身で考える」、「多くの友人知人を得た」、「至誠一貫でおぎなってきた」、「同期、先輩とのつながりと和」、「素晴らしい教育者からの訓導で華語を習得」。

（10）刊行物

磯貝治良　小説 5 冊、文学評論 4 冊、社会時評 1 冊、文芸雑誌「架橋」発行。

河合和弘　ボランティア活動 10 周年記念誌『美濃の歴史探訪』

戸田七支　市民団体での歴史関係論文多数。

松山琢哉　2 冊。

稲岡勲　何冊かあり。

中根富文　昭和の風景・松平村・明治大正の物語

（11）思い出

1960 年

学園祭での日本舞踊（研究室の伝統）学生運動が政治課題に取り組み、ストライキを決行、参加したこと。

2 年生で特待生に選抜され、伴侶に出会えたこと。

ボロ校舎時代と名古屋駅前校舎とでは大違いで、想像できないが、文化関係も新聞で見ることできず残念。

懸命に学び、十二分に楽しんだ。

入学時、授業開始時、終了時、小さい鐘を用務員さんが鳴らして知らせてくれたこと

愛大写真研究会の日々がよかった。

小岩井先生の講演。

乗馬クラブの部員に勧められ乗馬したが、木の枝に引っ掛かり落馬したこと。

同窓会活動で大変良い経験をした。

玉木先生との交流の場、ゼミ、四葉会のメンバーを忘れない。

自動車部での全国旅行。

1961 年度

愛大新聞を発行し他大学や社会にアピール。小岩井先生追悼号。

下宿での伊勢湾台風の体験。柔道部の豪傑が周囲を闊歩そる光景。

先輩に助けられたられたこと。

豊橋駅北出口の天ぷらうどんの味。

広い敷地と草が多い運動場。卒業後の薬師岳遭難事故。

早朝からの中国語授業。映画「二等兵物語」撮影。東側レンガ建物入学までと入学の間。

1962 年度

商工会議所で、「私は貝になりました」の上演。

邦楽（尺八）演奏

下宿でいろいろな地方の人と会えた。

全学ソフトボール大会と駅前でのデモ参加。

8 番教室での授業。学生自治会活動が活発。安保闘争で休講多し。

校庭の一角でのソフトボール。

安保時代、学生は元気だった。

小岩井先生の笑顔と愛大が大好きであった。

愛大寮生の食堂での討論が素晴らしかった。自由と自主を。

4 年間の応援団で先輩と後輩の絆が今も続く。

1963 年度

豊橋アパート生活と住民とのつながり。

1963 年 9 月の伊勢湾台風で名古屋方面が大被害。試験は中止、名古屋方面への救助支援に何日もでかけた。

愛大校庭で撮影された映画「二等兵物語」の撮影に出演したこと。

毎夏のゼミで林要先生の蓼科の別荘で研究会実施。山登りやアイスクリームの味。

中国語を鈴木、内山両先生に熱心に教えてもらい、努力したこと。

ワンゲル時代、薬師岳事故で外部の目も考慮したこと。

バスケの主将として 4 年間、関西大会へ出場したこと。

学生運動は盛んであった。

薬師岳事故で友人 2 人を亡くしたこと。

同じく友人 1 人を亡くしたこと。

豊橋下宿時代、他府県からの先輩たちが勉学に励まれ、教えられた。

薬師岳遭難事故（複数以上）。
学生寮での食事。
下宿付近の散策。
通学用の小さめのガソリンスクールバス。のどかな時代でした。
1964 年
法経学部な 600 人中女子 4 人だけでしたから、女子トイレに不自由でした。
とても貧しかった衣食住生活。
寮生活。薬師岳遭難事故
2 年生の時に美術部を同好会から部へ昇格させ、スケッチ旅行を楽しんだ。
大学生になり、自己責任を学んだ。
1960 年の安保。
全学連の活動に少し参加。
先輩、後輩、同僚との交流。
人とのふれあい。青春時代の一時期、精神的に愛を持つ友との語らい。
1965 年度
友人関係。
弓道部。
学生食堂の麦飯の懐かしさ。
薬師岳遭難事故。
安保反対運動による学校閉鎖。
スクールバス。
桑島、張先生たちに大切にしていただいた。
1966 年度
寮祭。
古い木造校舎と下駄の音。
卒業旅行と称し、北海道を 30 日間一蹴したこと。
部活のみ。
薬師岳遭難事故で、高校からの同級生 3 人を亡くした。
大石ゼミ試験に合格し、同期生と下宿生とともに酒ビールの会。
学生寮での生活のすべて。

（１２）大学と、人生の満足度。

アンケートの最後の締めくくりは簡単ではないが、これまでの長い人生を振り返ってもらい、人生の満足度をうかがい、その人生に寄与したと思われる愛知大学とのかかわりのでの満足度を問うた。それは人生の満足度に大学がどうかかわっていたかという問いであり、最も知りたいたところである。

アンケートではそれぞれについて問うた。まず表１－E-6 ではまず、人生の満足語を 6 ランクに分けて示し、どのランクに該当するかについて問うた。その際なぜそのランクなのかについては、少々私的問題とも関わりそうなのでお尋ねを遠慮した。示されたランクレベルでうかがい知るということになる。

その結果、1、2 位ランクの「まずまず満足」以上はあわせると実にほぼ 75%に達している。そしてなんらかの不満を表明した人は数人足らずで、残るは「普通」だとの回答である。大きく見れば、この時期の愛大卒生はほぼ満足した人生をすごし、あるいはそのレベルに達したということであろう。そこは大いに評価されるだろう。

次に、では愛大卒業生としての満足度は同かを問うた。その結果は表１－E-7 に示した。5 ランクのうち、上位 1、2 位の「多少関係有り」以上は、併せてずばり 50%である。一方、「普通」だとしたのは 30%台で、「関係ない」と「あまり関係ない」は 20 人で 16%である。全体としては、人生の満足度は高く、うち、愛知大学で学んだこととの

表１系

E-2　東亜同文書院

	人数
よく知っている	44
少し知っている	59
知らない	12
無回答	7

E-3　愛大事件

	人数
よく知っている	39
少し知っている	52
知らない	23
よく・少し知っている	1
無回答	7

E-4　母校・愛知大学への関心

	人数
大変関心	57
多少関心	36
普通	18
あまり関心ない	3
無回答	8

E-5　愛知大学の情報　　※複数回答あり

	人数
1. テレビ、新聞	36
2. 大学のホームページ	6
3. 「愛大通信」	45
4. さまざまな会合	9
5. 受験雑誌	1
6. 同窓生	15
7. 愛大新聞（名・豊）	65
8. ほか（ラジオ、部活動など）	12
無回答	9

E-6　人生の満足度

	人数
大いに満足	26
まずまず満足	64
普通	19
少し不満	2
大変不満足	1
大いに・まずまず満足	1
無回答	9

E-7　満足度と愛大卒業生との関係

	人数
大いに関係	31
多少関係	30
普通	27
あまり関係ない	16
全くない	4
無回答	14

かかわりが特に強かったのは、この時期ではその半分の卒業生にみられた。

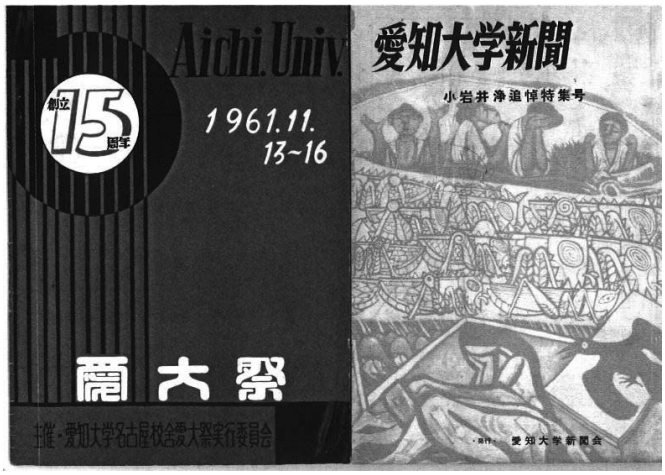
F. おわりに

以上、1960 年度から 1966 年度までの法経学部経済学科豊橋校舎の卒業生を対象にした愛大時代の生活、そしてその後の社会人を含めた軌跡についてのアンケート結果を報告した。この時期の豊橋校舎には、法学科と同様、専門課程は豊橋校舎で行われたため、名古屋校舎で教養課程を終えた学生たちも統合したため、最も多い対象者となった。今でいえば対象者のすべては 70 代後半から 80 代前半にかけての後期高齢者に該当する。したがって、亡くなられた卒業生も多く、回答数も限られたが、回答を寄せていただいた方々は、それぞれご自分の人生史を振り返る形で、丁寧に回答していただき、愛知大学創設期の一角を卒業生の眼から明らかにしていただいた。時代は 60 年安保改定の国内の混乱を受けて、新池田内閣が国民の経済生活を豊かにするための所得倍増計画を開始した時期に重なる。安保改定や愛大事件の余波に加え、台風 13 号に続いて 1059 年 9 月には伊勢湾台風が来襲し、東海地方は社会経済がマヒをし、大学の授業も大きな影響を受けた。その上に愛知大学では「三八豪雪」（1963 年）による山岳部 13 人の遭難事故で、全員が死亡という悲報が大学を襲った。折からの大学をめぐる上昇機運を読み、複数の新学部構想を抱いていた本間学長は最後にその責任を取って辞任し、その構想を幻にした。しかし、この遭難事件に対する本間学長の捜索対応は目覚ましく、「命は地球より重い」発言も全国から多くの義援金が寄せられることになり、その剰余金は富山、長野両県の山岳遭難警備隊の新設に寄付された。

このような出来事は大学当局のみならず、学生たちにも目の前で体験させることになり、その多くの刺激となった。その際、特に本間学長の行動力と対応、そして最後は辞任しないでほしいという多くの声の中で、学長として、教員そして法律家として責任を取って辞任したことも、法、文系の学生たちにとっても、多くのことを学んだに違いない。

今回の対象となった卒業生たちは、この一連の愛大をめぐる出来事とともに成長したのではないか、それがアンケートを読み解く上での鍵になっているように思われた。

（卒業生からの寄贈 2 冊子）



第 2 章　名古屋校舎「法経学部　経済学科」卒業生の場合

はじめに

当年報の前々号でもふれたように、愛知大学は、戦後すぐ開学地の豊橋と東海地方の全域で、大学とは別に青年、市民と対象として広く各地で夜間講座を開設した。それは多くの受講者に支持され、NHK の浜松放送局は毎週愛大講座を放送したほどであった。名古屋とその周辺地域についても同様で、戦後の戦災からの復興を目指す動きの中で、戦時体制の中で学びができず、戦後学びたい意欲を持つ多くの青年や、一般市民に対して、本間学長の指導の下、愛大教員の全スタッフでまずは市民向け夜間講座からスタートした。それはさらなる学びの継続と学びの場確保の強い要望へ発展し、その強い要望に応え、名古屋校舎として夜間短大、さらに 2 部の開設へと進んだ。それは法経学部名古屋校舎への発展へとつながり、教養部を設置しさらの学部開設の要望へと展開した。今回の名古屋校舎の対象者はその渦中にあり、当初専門課程は豊橋校舎で受講し、名古屋校舎に学部用の新校舎と完成するのを待って名古屋校舎の学部教育が一貫することになった。しかし、豊橋の専門課程へ通学していた学生は、豊橋校舎の緑の学園環境を気に入り、そのまま豊橋校舎で卒業した者も多かった。そのため今回の経済学科の名古屋校舎の卒業生からの回答者は豊橋校舎に比べて 2 分の 1 と少なかった。これは同時に進行した後掲する法学学科についても同様であった。以下、順にみてみる。

A. 生年、入学年、出身校、志望動機など

（1）生年、入学年、出身校

表２－A-1 は回答者の生年と入学年を示した。生年の最古参は昭和 12 年、(1937)、最も若い回答者は昭和 19 年（1944）で、前掲の豊橋校舎の回答者とはほぼ同じである。時代状況などは豊橋校舎分で示したので、ここでは繰り返さない。

表２－A-3 は、出身高校名を示した。あくまで回答者分だけである。当然であるが名古屋地区が最も多く、次いで岐阜県、三河は西三河の安城のみで、尾張も少ない、尾張も通学の足となる名鉄線沿いは 1 校あるのみだが、岐阜も含め名鉄線沿いの多くは豊橋校舎へのダイレクト通学の便が良く、豊橋校舎への通学、または下宿生である。

表２－A-5 は愛知大学を知った理由を示した。もっとも多いのは高校、中学の先生、地元民、先輩、兄、雑誌などで、教師の影響力が多い。表２－A-7 は、それに関係して、入学理由の回答で、通学条件を挙げ、ついで授業料の安さをあげている。

表２－A-9、10 はその授業料などとの関係についての問で、4 分の 1 がアルバイトで授業料も生活費も工面していることがわかる。親も授業料の安さにこだわったという回答も散見され、この時代勤労学生たちには愛大の授業料の安さは助かっていたことがわかる。

B. 学業生活と満足度

では学生の本分学業生活はどのような位置にあったのかである。

（1）学業の位置と分野

表２－B-1 はその回答をまとめたもので、そのほとんどは学業を重視している。大学へ入学したのだから学業は当たり前だとする正統派の回答が多い一方、クラブに夢中になり、アルバイトにも精を出し、生活費のためにアルバイトしたという回答もいくつか見られる。学業とアルバイトを両立させようと頑張った学生も少数ではない。

では、学問のどのような分野に関心を持ったかである。それによると経済学原論、マルクス経済学、近代経済学、経営学、会計学などの基礎科目が並び、それぞれが印象に残る先生につながり、さらにゼミの選択とかかわっていることがわかる、ゼミは広く、各分野が選ばれ、開かれていたことがわかるが、地域づくり、町づくりなどの実践的授業ゼミを展開した経済地理学の安藤万寿男先生が、タッチの差でトップに選ばれており、高度経済成長期にさし掛かるこの時期に興味を持たれたのであろう。入りたいゼミには入れなかったが、その先生の授業には出席したという回答者もいくつか見られた。

（２）先生たち

なお、印象に残った先生については、表２－B-3 に示した。専門課程の先生だけでなく、教養課程や語学の先生も含まれる。ここに挙げられた先生はいずれも講義が面白かったと回答しているし、安保闘争終束後「資本論」の内「恐慌論」を読み始めたゼミの山本二三丸教授、家族的つきあいもしてくれたという中西教授、経営会計学のゼミを担当された若き河合講師、学生の経済学研究会、経済史研究会などの関係クラブの部長を担当してくれた先生たちでもある。そんな中、当時マル経の先生たちが多い中で、数少ない近経でそれも計量経済学の岡崎二三男教授への印象度が高い。本格的な近代経済学が新鮮であったからかもしれない。ただし、ある程度内容がわからないと単位はとれなかったとされているから、この 7 人の回答者は優秀な学力を持っていたものと思われる。

（３）卒業論文

卒業論文については、「地方自自体の財政的あり方」、「観光業」、「産業革命」、「原価計算」「人事管理」、「国内におけるミカン栽培」、「アメリカ経済」、「経営分析」、「経営学」、「マルクス再生産論」、「国際競争力、を高める自己資本比率のアップについて」、「アメリカ経済における軍事費の役割」、「地域調査報告」（産業史研究会全国学生経済学ゼミ発表分）、「恐慌論」（名大祭で招待講演もした）、など。思い出しながらテーマを回答してくれた回答者も。また高齢化のため思い出せない回答者もいた。

（４）在学中の満足度と人生の満足度

では、以上から、愛大での学業の満足度はどうであったかも問うた。その結果は表２－B-8 である。それによると不満足、無回答の 17 人以外は「まあまあ満足」以上で、全体の 80 パーセント近くを占める。特に「まずまず満足」以上は過半数を占めており、学業はそれなりに満たされたということであろう。それらの背景には、「大陸と海外にあった東亜同文書院大学など旧制大学の伝統が消え去ってはいなかったところがあったこと」、また「教授陣も充実し、自分の意思があれば学ぶことが可能。全国から来た友

表 2 系

A-1　　法経学部経済学科　名古屋校舎

	S38 1963	S39 1964	S40 1965	S41 1966
昭和10年				
昭和11年				
昭和12年		1		
昭和13年				
昭和14年	1			
昭和15年	3	5	1	
昭和16年		7	3	1
昭和17年		2	11	1
昭和18年			4	14
昭和19年				4
昭和20年				
未回答				1
計	4	15	19	21

A-5　　本学を知った理由

※回答者のみ集計、複数回答あり

	人数
大学案内、進学資料	2
先輩	4
友人	2
知人	1
親	1
兄	4
中学・高校教員	9
高校	7
地元	5
高校に近い	1
知名度	1
雑誌、雑誌、本、ニュース	5
弓道部があるから	1
各種情報	1

A-7　　入学理由

※回答者のみ集計、複数回答あり

	人数
自宅通学が可能、通学に便利	14
他私大より学費が安い	8
大学受験の失敗、学力不足	5
地元だから	4
就職に有利	3
経済学に興味	3
自分に適していた	3
開かれた大学だと思ったから	2
経済的理由	2
兄のすすめ	2
高校教員のすすめ	1
親戚のすすめ	1
優秀な教授陣	1
設立の経緯	1
数学の代わりに簿記で受験可	1
幅広く知識を得るため	1
希望する学科があったから	1
経済学に将来性を感じたから	1
経営学の修得	1
中国語の修得	1
長男だから（地元を離れられない）	1
質実剛健	1
弓道を続けるため	1
愛大以外にはなじみがなかった	1
合格したから	1
何となく	1

A-9・10　授業料・生活費の工面

※回答者のみ集計、複数回答あり

	授業料	生活費
1. 親から	52	53
2. 親戚・縁者から		
3. 奨学金から	2	2
4. アルバイトから	17	19
5. 給料から		
5. ほか		
合計	71	74

表 2 系

A-3　出身高校

昭和35～41年卒

三河

安城	1
安城農林	1

名古屋

中村	3
名古屋西	2
明和	2
愛知商業	2
熱田	1
松蔭	1
瑞陵	1
名古屋市立向陽	2
名古屋市立桜台	1
名古屋市立商業	2
東邦	3
中京商業	3
名古屋学院	2
東海	2
名古屋	1
大同工業	1

尾張

半田	2
津島	1
犬山	1
一宮商業	1
瀬戸窯業	1

岐阜県

加納	1
長良	1
大垣北	1
大垣南	1
不破	1
多治見	1
多治見北	1
本巣	1
海津	1
恵那	1

三重県

松阪	1
員弁	1
亀山	1
尾鷲	1
高田	1

その他

船橋（千葉）	1
新宮（和歌山）	1

未回答	5

合計	59

表 2 系

B-1　学業の位置

	人数
学業が主	21
どちらかといえば学業	11
学業はまずまず	19
学業は従	5
主・どちらかといえば	1
まずまず・従	1
無回答	1

B-2　興味　※複数回答

	人数
ゼミ（角谷）	2
ゼミ（中西）	1
ゼミ（岡崎）	1
卒業論文（青木）	1

経済原論	3
マルクス経済学	3
近代経済学	2
統計学	2
アメリカ経済	1
会計	1
会計学（経営管理）	1
近代経済学	1
経営学	1
経済学（資本・社会主義経済）	1
計量経済学	1
原価計算	1
社会科学	1
商品学	1
地域学	1

フランス語	3
ドイツ語	3
英語	2

哲学	4
体育実技（スケート）	1

教職課程	1

B-3　印象に残った先生　※複数回答

	人数
岡崎	7
高桑幹夫	3
山本二三丸	3
安藤万寿男	2
角谷	2
郡	2
玉城肇	2
中西	2
本間喜一	2
山崎	2
青木脩	1
今泉	1
岩瀬	1
岩田（英語）	1
植屋春見	1
大石	1
金子	1
桑田	1
合田（ドイツ語）	1
鈴木正四	1
副島	1
長洲一二	1
津之地	1
林要	1
細迫	1
三好	1
映画俳優の兄弟の先生	1

B-4　ゼミ

	人数
安藤（地域経済、地域開発）	4
小幡（財政学）	3
角谷（経営学）	3
山本（資本論）	3
青木（会計学、経営分析）	2
岡崎（近代経済学、計量経済学）	2
大島（経営学）	2
河合（経営会計学）	2
郡（観光と交通）	2
中西（アメリカ経済学）	2
村上（女性の先生）	1
一条	1
三好（農業経済）	1
山﨑（銀行論）	1
正木（貿易論）	1
杉本（社会政策）	1
岩瀬	1
村長	1

表 2 系

B-8　在学中の満足度

	人数
大いに満足	8
まずまず満足	24
まあまあ	14
あまり満足していない	7
無回答	6

B-9　学業の成果が人生に与えた影響

	人数
大いに影響	8
まずまず	18
まあまあ	16
あまり	13
無回答	4

人と交流することができた」、そして「自由さ」ということになるだろう。ただし、当時の校舎の環境はよくなかったともいう。名古屋車道校舎はようやく整備が始まろうとする時期であった。

では「学業が人生に与えた影響」はどうであったか。表２－B -9 がその結果である。

それによると、中位の「まあまあ」を基軸に上位側に重心があり、全体としては肯定感が見られるが、下位の方にも少々ウェイトが見られる。上位では、「自分の人生観の基盤ができた」との評価、「家業や組織の効率化をすすめられた」、「普通科や商業高校の教員になれた」、「大学の自治と学問の自由を実践してきた」、また、「語学を習得し、世界中を仕事で駆け巡ってきた」という回答がある一方、「入学時からの劣等感を最後まで持ち続け、学ぶという気持ちは持てなかった」との開陳もあった。またその理由が見られない白紙の１回答も見られた。

C. クラブ、サークルについて

名古屋車道校舎のこの時期の回答者が参加したサークルは、表２－C-1 のようになり、新設も続き、スポーツ系も文科系も活発になっていく時期にあった。文科系にはクラブへの芽である同好会もいくつかできている。これらはあくまで回答者の参加した、あるいは新たに結成したクラブ、サークルであり、これ以外にもクラブ、サークルは誕生していたものと思われる。

車道校舎では広いグラウンドや体育設が不十分であったため、スポーツでは、町道場を借りたり（柔道部）、南区日清紡のグラウンドを借りたり、鶴舞のテニスコートを借りたりした。他大学も施設が不十分な時代で、鶴舞では愛学、商大などと一緒に利用した。人数の少ないクラブもあったが、ラグビー部はそんな中で三重大学や岐阜大学が最強であった時代の東海リーグで、一部残留実績を示した。

活動も多岐にわたり、ワンゲルは白樺ロッジ合宿や蕨とりをし、世界的プロ写真家の東松氏を輩出した写真部は、撮影旅行のほか全国学生写真展へ参加、また、全日本学生写真コンテストで、金、銀の各賞や入賞を得、日本一になった（写真部）。

京大での農村調査発表や全国学生ゼミでの発表（経済学研究会、経済史研究会）、演奏発表会では愛知県中小企業センターを満席にしたこと、大学祭に学外での仮装行列や大阪釜ヶ崎での合宿による住民実態調査（旅行研究会）、会話、劇、弁論大会で世界中のひとたちとの交流ができた（ESS）、など。また、活動は学外へも広がり、他大学との活動交流、慰問、市民活動などの社会活動へ発展しているケースも見られた。

これらの諸活動により、体力の上昇、友人や仲間との信頼関係、責任、誇り、礼儀、良心、節度、闘志、忍耐力、先輩や後輩との付き合い、応援団精神、交流、競争、人間性の成長、継続の価値、活動の楽しさを得たとし、その後の人生にも強く影響しているとしているほか、伊勢湾台風、東北大震災などへのボランティア活動も行ってきた。

表２－C-2 と表２－C-4 は、クラブ、サークル活動への参加状況とその活動による影響のレベルをまとめて示した。これにより、前述の状況が理解されよう。

表 2 系

C-1　参加していたクラブ・サークル名

※複数回答あり

	人数
応援団	1
柔道部	1
弓道部	1
空手部	1

バレーボール部	1
ラグビー部	1
準硬式野球部	1
硬式テニス部	1

ワンダーフォーゲル部	2
アイスホッケー部	2
スキー部	1
ダンス部	1
アーチェリー	1
自動車部	1

写真研究会、写真部	3
ギター	3
茶道研究会、茶道クラブ	2
軽音楽部	1
尺八部	1
演劇研究会	1
E.S.S.	1
広告研究会	1
旅行研究会	1
将棋同好会	1
囲碁同好会	1

会計学研究会	2
経済学研究会	1
経済史研究会	1
中国研究会	1

C-2　クラブ・サークル活動の参加

	人数
よく参加した	27
まずまず	3
あまり参加しなかった	7
よく参加した・まずまず	1
無回答	21

C-4　クラブ・サークル活動の影響

	人数
大いにあった	17
まずまず	9
まあまあ	1
あまりなかった	7
無回答	25

D. 就職と人生

次は卒業後の就職活動、そして社会人になって以降の人生の歩みの件である。

表２－D-1 は、卒業時の就職活動についてである。それを見ると積極的に取り組んだ回答数よりも、「普通」、「あまりしない」、「全くしない」の合計が多数を占める。その内容を見ると、家業の継承、農家、楽観、縁故待ち、楽観、企業への理解不足、考えていなかったなど、あまり、公務員や教員、それにその後の社会経済から予想される業界の見通しを持った回答者以外は、就職については強く考えていなかった局面がある。今日とは違い、日本経済も復興間もないころで時代もゆるく、のちに中卒生が「金の卵」だともてはやされる時代の前の時期で、大学進学率はまだ 10%台にとどまっており、就職問題はまだ競争的ではなく、当然自然に就職はできるという認識で、4 年生になっても就職自体が実感のわかない状況にあったといえる。縁故による「つて」も多く、いわばのんびりしていたし、愛大生の場合、自分たちが大学を作り上げていける様子が大学生活に満たされていた状況もあったことが、大学から離れられない意識となっていたことが、回答内容からうかがわれる。

それは、表２－D-2 の状況からもうかがえる。したがって、就職分野も「なんとか」スムーズに決まったように見える。さらに、表２－D-6 で示すように、当時は卒業生への縁故者ともいえる就職斡旋者は多種多様に存在して入り、今日とは異なり、大学就職課による斡旋は絶対的ではなかったことがわかる。その際、表２－D-7 のように、就職時の愛大卒の学歴意識については、就職者も就職先もそんなに高くない。これも前表にみられるように、当時は大学就職課以外の就職斡旋者が多く存在しており、社会全体が大学卒業業生をある意味で大事に包み込んでいたからであろう。大学就職課は今日のような職業安定所、斡旋所とは明らかに異なっていた。従って大卒生は多様なネットワークの中で、個人個人がスムーズに社会の中へ溶け込んでいけたともいえる。

最後に表２－D-5、8、9 は、卒業時の就職先、転職先、再就職先を一覧した。自由な就職意識ではあったが、就職については自己の目的により、公務員、教員、各分野の業界の企業、家業などに確実に就職先を見つけている。就職もまたゆったりとした時代ではあったが、様々なネットワーク、コネクションが発揮され、愛知大学の存在感は大きかったといえる。

E. 愛知大学卒業生として

（１）愛知大学設立趣意書とのかかわり

「愛知大学設立趣意書」の成立等については前述したので、ここでは卒業生の卒業年次別のかかわり方についてみてみる。

1963 年度

今年度に限らず、「意識しなかった」や無記入が 1～2 割見られるが、多くは趣意書に意識し反応している。その反応を見ると、「理念がすばらしい」。「自由、受難」はなんとなく心にしていた。しかし、まだ国際化の動きが始まったばかりであり、グローバル化を教える人材は少なかった」とする。

1964 年度

「シンガポール、香港では愛知大学の名が知られていたし、人生に大きな影響を受けた」、「私は愛大史と愛大の理念

表 2 系

D-1　卒業時の就職活動

	人数
かなり積極的	4
やや積極的	6
普通に	22
あまりしない	13
全くしない	12
無回答	2

D-4　希望した分野への就職

	人数
はい	18
なんとか	14
意識せず	11
意に反して	4
無回答	12

D-7　愛大卒業生の経歴を意識

	人数
はい	20
少し	15
特になし	18
無回答	6

D-2　卒業時の就職環境

	人数
かなり厳しい	8
やや厳しい	17
普通	24
あまり厳しくない	3
全く厳しくない	2
無回答	5

D-6　就職でお世話になった人

※複数回答あり

	人数
大学就職課	11
愛大卒業生	5
知人、友人	14
自力	18
就職先（地元の人が在職）	3
ほか（高校恩師、親など）	4
無回答	10

表２系

D-5 就職先（1/2）

名称	所在地	（人）
東海プレス工業（株）	名古屋市	1
明道鉄工所	名古屋市	1
三守鉄鋼	名古屋市	1
愛知三洋KK	名古屋市	1
東海理化電機製作所	名古屋市	1
愛知紡績	名古屋市	1
中部化学株式会社	名古屋市	1
ダイニッカ	大阪市	1
中北薬品		1
昭和薬品	名古屋市	1
（株）コバル	東京都	1
日本楽器製造K.K.（ヤマハ）		1
リコー時計（株）	名古屋市	1
愛知日産自動車（株）	名古屋市	1
石田株式会社	名古屋市	1
サンエイコーポレーション	名古屋市	1
アダム紳士服（株）		1
松坂屋	名古屋市	1
（株）山泉商店、盛田（株）	名古屋市	1
新興窯業（株）	尾張旭市、土岐市	1
越智理容	豊橋市	1
三□製作所	名古屋市	1
スガキ□システムズ（株）	名古屋市	1
アカシヤ商事	大阪市	1

就職先（2/2）

名称	所在地	（人）
名鉄	名古屋市	1
名鉄観光サービス（株）	名古屋市（本社）	1
宿泊業（名鉄関連）	三重県伊勢志摩	1
岐阜相互信用銀行	岐阜市	1
第三銀行	名古屋市、東京	1
東春信用金庫	小牧市	1
常滑信用組合	常滑市	1
碧海信用金庫	安城市	1
東濃信用金庫	多治見市	1
三重信用金庫	松阪市	1
大徳証券	名古屋市	1
毎日新聞社	名古屋市	1
名古屋タイムズ新聞社	名古屋市	1
フヨー・エージェンシー	名古屋市	1
栄印刷	名古屋市	1
八事病院	名古屋市	1
岐阜県厚生連		1
名古屋中央郵便局	名古屋市	1
岐阜市役所	岐阜市	1
大垣市役所	大垣市	1
四日市市役所	四日市市	1
亀山市役所	亀山市	1
愛知県立高校教員	名古屋市	2
岐阜県立高校教員	岐阜市	1
三重県立高校教員	三重県	1
市邨学園高蔵女子商業高校	名古屋市	1

表 2 系

D-8　転職　　（各1）

名称	業種	所在地
ジョンソン（株）	化学製品	横浜市
アイギ工業	自動車部品	岐阜県
フジテック	人材派遣	三島市
学校法人安城学園　　愛知学泉大学		豊田市
第一広告社	広告代理業	名古屋市
読売新聞社	新聞（広告部）	名古屋市
中部電力（株）	営業、電気温水器販売	
昭和薬品化工（株）	営業	東京
中部経済新聞社	記者	名古屋市
東海プラスチック工業	合成樹脂製造	名古屋市
リコー	営業本部	東京、名古屋市
（株）マルアイ	食品製造	名古屋市
ライト工業（株）	建設	名古屋市
兵庫ツバメプロパン販売（株）	工業用燃料販売	神戸市
ジャニス（株）	衛生機器販売	常滑市
三重県高校教員	教員	三重県
裁判所	書記官等	
豊山産業	ポリウレタン加工業	小牧市
森林株式会社	繊維専門商社	大阪
北津島病院	医療業	稲沢市
アイホン（株）	インターホン製造、販売	名古屋市
小林記録紙（株）	印刷	刈谷市
セブンアップ飲料（株）	飲料	名古屋市
中部ペプシコーラ	飲料	小牧市

D-9　再就職　　（各1）

名称	業種	所在地
学校法人聖徳学園	岐阜聖徳学園高校教員	岐阜市
（株）システムワーク	自動車部品	岐阜県
日本ケミカル工業（株）	発泡スチロール加工	四日市市
学校法人愛西学園	事務局長・理事長	弥富市
（財）産業雇用安定センター		
中部大学　キャリアセンター		春日井市
名古屋市シルバー人材センター		名古屋市
（財）亀山市地域社会振興会	常務理事	亀山市
	合成樹脂製造販売	名古屋市
	プラスチック・金属加工	名古屋市
NPOグリーンライフ小牧	造園	小牧市
菊武ビジネス専門学校	非常勤講師	名古屋市
（株）谷商店	鋼材切断、販売	名古屋市
（社）半田法人会	税務団体	半田市
岐阜市社会福祉事業団	障害者施設	岐阜市
モリシン物流株式会社	繊維倉庫、物流、加工業	摂津市ほか
松原病院	医療業	福井県
（株）協和産業	フィルター販売	名古屋市
富永貿易（株）	食品全般	神戸市

を知ったうえで入学したから、これらの理念は今日までの導きになっている」、「のちに中国現地で合弁事業を立ち上げる時に順調であった」などの国際意識にも及んでいる。

1965 年

「知を愛する真理と国際貢献を意識した」、「自由を人生に生かしている」。

1966 年度

「反権力、真実の探求と裏社会への探求心」、「本間先生が学長であることに安心」、「反映させたが、まだ力不足」、「愛大のネーミングが最高」、「他人におもねることなくに生きられた」、「自分の意思により勉学できた」、「書を通じて文化奨励賞（安城）など地域貢献」、「各国からのホームステイを受け入れて文化共生」、「わが道を行く。知を愛し、国際教養を」、「主旨はいつも気持ちの中に」。

1966 年

「知を愛する真理の探究だけでよい」、「クラブ活動や催事の時の校歌で認知」、「4 年間自由闊達に生きた」、「現実とのずれ」、「大学側から教えてもらってない。大学側に熱意がないのでは」。一部に次の大学紛争期直前の学生側の意識か。

（２）東亜同文書院への認知

表２－E-2 は、この質問への回答をまとめたもの。「少し知っている」以上が 7 割を占める。その理由を見ると、

1963 年

「書院に知人がいる」、「受験誌や新聞から」（複数）。

1964 年

「先輩が書院生」、「色々な人からの話」、「大学で知った」、「本から」、「愛大主催の連続市民講座で小岩井学長の講演から」、「霞が関の同窓会から」、「入学後」、「本間学長から」、「同窓会史料から」、「法学科卒の兄から、」「受験時」。

1966 年

「親から」、「興味あったから」、「在学中に」（多数）、「愛大卒業生から」、「大学案内から」（複数）、「同窓会報から」、「同窓会誌から」、「サークル先輩から」、「入学後」、「親から」、「学校紹介記事」、「新聞」、「教授から」、「学生から」（多数）、「妻の兄弟に書院卒生」、「学校からの説明」、「入試案内から」。この時期まだ大学からの説明や関連受験雑誌、情報誌、身内からなど多様な情報源があったことがわかる。

（３）愛大事件についての認知

表２－E-3 は、過去におこった「愛大事件」についての認知を問うた結果。「よく知っているよりは」「少し知っている」以上が 6 割の多数であるが、「知らない」、など 4 が割近くを占め、時間の流れがうかがわれる。その認知内容を見てみる。

1963 年

「本間先生という尊敬できる人間力があった」、「正しいことに向かう強い意志を教えられた」。

1964 年

「クラブの先輩から」、「本間先生のような方が今もいるかな」、「灯台ポポロ事件と並ぶ事件で、大学の自治と学生の権力批判運動を弾圧しようとした」、

「学長の学生を思う強い心を感じた」、「思想に走らず学業専念を」。

1965 年

「学園の自治は守る必要あり」、「本間学長のすばらしさ」、「本間学長はすごい、警察の介入は良くない」、「「学生を信じ、学生の弁護に徹したことは立派」、「本間学長ご苦労様でした」、「正義はなかなか社会に受け入れられない」、「双方もっと話し合うべきだったのでは」。

1966 年

「本間学長はたいへん良い学長であった」、「新聞連載もあった。転職時に話題になった」、「大学はだれでも自由に入れない場所だ」、「学長としては当たり前だ」、「学長は立派」、「安保前だったのである程度分かるが、やりすぎか」。

（4）母校愛大への関心

この問いへの回答は表２－E-4 に示した。「関心有」以上は約 6 割、「ふつう」は 2.5 割、「関心薄い」、また「無回答」併せて 1 割弱で、全体的には関心を持っていたといえる。その内容を見ると、

1963 年

「関心を持つのは当然だし、反映をねがっている」、「有名大学出身などということ自体、人間を小さくする」。

1964 年

「先輩後輩との交流で同窓会役員として有意義な時間をもてた」、「誇り」（複数）、「最近中村区政の議事に学生が参加してくれた」、「他大学事務局長時代、愛大事務局長と交流ができた」、「変化発展を見たい」、「校舎によっては人生に変化があったかも」、「人生を成長させてくれたから」。

1965 年

「母校だから」」、「卒業生としての誇りあり」、「人生、人を成長させてくれた」、「4 年間貴重な人生を過ごさせてくれた」、「愛大の進展を見たい」、「大学の社会的評価を下げてほしくない」、「大学にはそれぞれの在り方がある」、「良いニュースを望む」。

1966 年

「母校だから」、「愛大卒としての誇りあり」、「大学の活躍を」（複数）、「今後も社会への貢献を」、「就職時学内推薦に落ちたことを悔やむ」。など。

（5）愛知大学情報の入手

では、愛知大学の情報はどのように入手しているのかを尋ねた。その結果が表２－E-5 である。最も多いのは両校舎の「愛大新聞」だが、どのように購入しているのかは不明。次いでテレビ、新聞などのメディア、次いで年に複数回発行される「愛大通信」と続く。しかし、大学のホームページは極めて少ない。この対象年齢は 70 代後半から 80 代半ばまで。パソコン機器の使用はむつかしそうであることの表れであろうか。そして同窓会会報はあくまで同窓会情報中心で大学情報が少ないためか「その他」のなかのも顔を出していない。この辺りは大学側、同窓会側も検討の余地があるだろう。

しかし、情報への期待や要望は強く多い。本間先生という理想像があるためか、愛大で人間的にも人格的にも優れた教授への待望、学生や卒業生の活躍情報、教育と研究が地域とつながりを作る担当課情報と部局の

強化、実社会とのコネクトを実践する組織を、老人講座の創出と充実、在校生や後輩の社会での活躍情報、政界への人材養成、時代の変化に対応した教育の在り方、地方へもメディアによる愛大情報を、体育や文学ほかなどで幅広く活躍している卒業生の紹介を、他分野で活躍できる愛大生の活性化を、など。

（６）同窓会への参加状況

この点の参加状況を尋ねた結果は、表２－E-7 のようになった。「時々」以上の参加出席者は、全体の 4 分の 1 である。対象者の多くは仕事の第一線から離れた卒業生が多い。年齢に伴う体力のこともあるであろうが、このレベルの出席状況の状況評価はよくわからない。回答から見ると、愛大〇〇会のような職場ベースや元クラブのつながりには参加するが、愛大同窓会と距離があるという回答が見られる。高齢化のために参加できなくなったとか、同窓会の連絡がない、などそれぞれの理由が回答されている。一方、高齢化しても、友人たちに会える楽しみで積極的に出席している回答もいくつか見られる。そして自分の卒業年度に近い卒業生の情報に接したいという要望もある。これらの問題をどううまく調理していくかが同窓会にとって今後の課題であろう。

なお同窓会の魅力としては、次のような諸点があげられている。

「同窓会が同窓生の親睦会というより、大学を支え発展させる提案機関であってほしい」、「愛大出身の有識者の PR も」、「あまり学歴にとらわれると時代おくれかも」、「校歌を歌うと気持ちが安らかになる」、「よくがんばっている」、「人生を変える良い習慣だ」、「会合の時には隣の人と話ができるような机や椅子の配置の工夫を」、「有名人も参加してもらいたい」、「情報交換の場として活用できる」、「クラブ単位の同窓会も」、「地域社会とのつながりも」。

（７）大学への要望など

いくつかのレベルの要望が見られた。

A. 現状・発展評価型

「真の民主主義に立脚した哲学の教育を」、「他大学のような有名な先生を迎える」、「教師として愛大受験の高校生徒から愛大評価がうかがわれる。評価の高まることを願う」、「地元の優秀な大学だ」、「レベルアップして入学難だ」、「学生の学力はあがっている。県知事や大臣誕生を」、「笹島へ移転して大学がどう変わったかを知りたい」、「教育環境が充実。今後を期待」、知名度アップした。地元での活躍者多く、誇り」、「大学はどんどんよくなっているようだ」「素晴らしい」、「地元での評価向上し、うれしい」。

B. さらなる要望型

「昔日のような「ゆとり」と「ひたむきさ」を」。「大学の特色を打ち出してほしい」、「人類と地球を持続させる役割意識をもった若者に」、「笹島校舎を見学させて」、「他大学に後れを取っているように見える」。「有名教授が必要。教授にプライドが有るのか。もっと論文や著書出版を。学生のスマホに同窓生の活躍や教授の紹介を」、「豊橋校舎にはぜひ入学したいと思えるような充実を」、「豊橋校舎こそ愛知大学の伝統があり、火を消してほしくない」、「最近他大学の名前のほうをよく見聞する」、「もっと知名度を」、「愛知の私大でかつてにように第 1 位を」、

「スポーツでも伝統になる分野を」、「地域社会に強い大学であれ」、「卒業資格は厳格に」、「最近の受験生の減少気味が気になる」、「愛大が多くの大学の一つにしか見られなくなった」、「自分の品格、器量を育てる教育を」。

以上、多岐にわたる卒業生の要望は、暖かいし、しかも客観的であり、歯にものを着せないところもあって、大学へ出入りする業者のようによいしょするところはない。ありがたいことだと思われる。いずれも卒業生たちの愛知大学を強く愛する気持ちから発している要望であり、課題であると理解できる。特に、この調査の直前に野球部員の引き起こした不祥事が全国に報道され、卒業生たちは悔しがって嘆いた。それは愛大の伝統である「自由」ではなく、大学の「ゆるみ」と見えたからだろう。回答の中にはそれを意識した内容も見られた。

（8）後輩たちへ

次は卒業生から後輩への伝言である。年次別にみてみる。

1963 年

「世界のどこへでも行く勇気と住む勇気ある人材に」、「具体的目標を立て到達をめざすがんばりを」、「社会に迷惑をかけるな」、

1964 年

「親を泣かすな」、「他大学に負けるな」、「学閥もよいところあり」、「自分の力で、大学を頼るな」、「私たちは、こんな世界にしてしまってごめんと謝るしかない」、「社会へ出てとても良い大学だと PR を」、

「大学生活を十分に楽しめ」。

1965 年

「プライドを持てるように、」「東亜同文書院からの歴史を学べ。大学史の授業は良いことだ」、「自信を持った生き方を」、「日本を動かす大物に」、「友人を作りなさい」、「大学時代しかできないことを悔いなく」、「チャレンジ精神をできる方法で」、「反社会的行動をしない倫理観を」、「障害目標をどこへ置くか」、「勉学もしっかりと」、「建学精神だけは忘れない」、「広く世の中を学ぶ」。

1966 年

「自由に学ぶ」、「たくさん苦労し前向きな人が豊かな人生を送っているように感じる。人の痛みもわかり、明るく振る舞っている人は素敵だ」、「知を愛する人間に」、「人の 2 倍の働きと努力を」、「就職で希望する企業や業種が有れば、そこにいる先輩を尋ね、情報交換をしてほしい」、「人生を切り開くには知識と知恵が大切」、「人生堂々と」、「愛知大学出身だと堂々と言えるように」、「卒業までに何か一つ資格を」、「自由闊達に、人生を楽しく、自分の意見を持ち、他と協調協力も」。

以上、人生をしっかりと組み立て味わってきた先輩たちからの言葉である。それぞれの人生がにじみ出ていつように思われる。

（9）愛知大学から得たもの

1963 年

「経営的にも JICA との連携を」、「飛び込まなくては何も生まれない」、「当時は大学の施設も十分でなかったが「徹して」「学ぶ」ことを知ったこと」。

1964 年

「原価計算に始まり、原価計算に終わることが生産性につながること」、「まじめさ」、「青春の一時期政治闘争で過ごしたこと」、「絶望の淵まで行ってもなすべきことを成そう」、「不言実行」、「ケセラセラ」、「地域文化貢献の心」、「卒業後 50 年の発言、自信をもって社会の中へ泳げ」。

1965 年

「正々堂々正義のために」、「人の立場に立って、ものを考える」、「人事を尽くして天命を待つ」、「一つのことを一生やり続けること」、「独立独歩の精神で生きてこられた」、「探求心を得た」、「継続は力なりを実感」、「ゼミで自ら研究し、自分の考え方を持つことの必要性を実感。未知は楽しい。未知への挑戦（いつでも、いくつになっても勉強を）」、「誠実。人生万事塞翁が馬」、「知を愛すること」。

1966 年

「知を愛する。誠実」、「自分の進むべき方向や進み方を得られるよう大学 4 年間どう過ごしたかだ。己を信じて切り開いてきた」、「自分が特に勉強した経営学が、会社役員、定年地域活動で役立った」、「学歴の後輩先輩とのつながりを強く」「愛寛容」、「努力、不屈の精神、自由」、「人間味のある事」、「大卒の肩書」、「STICK　TO WHAT YOU HAVE DECIDED！」、「20 人ほどの同僚にめぐまれ、1～2 年に 1 回酒を酌み交わし、青春時代を懐かしんでいる」。

（１０）出版物など

1963 年　「人生みな師なり」。

1964 年　「多くの特許出願」。『学力回復と商業教育』（明治図書、1979）.『経営学部の 10 年誌』（愛知学泉大学、編著 1997）。「日本精神科病理協会氏誌」上に発表。

（１１）思い出

1963 年

「薬師岳遭難事故と同級生遭難」（複数）、「ギター部で四日市コンサート開催、「アイスホッケー部 1 年次に優勝」、「プロゴルフアー鈴村君の活躍」。

1964 年

「在学中の安保デモ参加」（多数）、「自治会規約を慶應や他大学を参考に改定したこと。事務局と私的に交流したこと」、「同期の友人たちと今なお年 10 回のゴルフコンペ」、「薬師岳遭難事故」（多数）」。

1965 年

「吹奏楽部で全国第 3 位になったこと」、「リーグ戦優勝」（野球か）」、「体育ヨット研修時の先輩指導者の質の良さ」、「三八豪雪と薬師岳遭難事故、何人もの友人をなくす」（多数）」、「山岳部部長と薬師岳の太郎小屋へ借金を返しに行ったこと」、「尺八との出会いで一生の楽しみを得たこと」、「クラブ活動」（複数）、「ゼミの入会試験をうけたあとの合宿研修と他大学との合同研修会への出席」、「演劇公演をしたこと」、「この年になってもあの車道へ通いたい」。など。

1966 年

「卒業旅行で行ったまだアメリカ統治下の沖縄で、渡航時の保証人を沖縄の

学生に頼み、国際通りのバラックの暗い店で語り合ったこと、カーテン越しのバスから見た米軍の装備やジープ、白い家、そのフェンスに書かれた Dogs and Japanese　keep out は忘れられない。「サークルが楽しかった」、「薬師岳遭難と友人の死」（多数）、「その友人には体育の単位を取るために上高地の山岳部キャンでお世話になった」、「東海大会で優勝候補を破ったことと、インカレで日本一の中央大を破ったこと」、「1年生時に特待生になり、授業料が半額になったこと」、「愛大の校歌。いまでも口ずさむ」、「自由」、「活発に行った ESS 活動」、「名古屋校舎に大学のキャンパスの実感はあまりなかった」

（１２）人生の満足度と愛大卒業生との関係―おわりに寄せて―

最後に上記（１２）について問うた。方法は満足度レベルを選択する方法であり、その理由などは問うてない。すでに多くの発問をしてきたからである。その結果は以下の通りとなった。

表２－E-11 は、人生をふりかえっての満足度である。それによると「まずまず満足」以上が全体のほぼ 75%を占めており、一方「多少なりとも不満」は 2 人、それに「無回答」を加えても 5 人にすぎず、回答した卒業生の多くは、人生にほぼ満足していることがわかる。いずれも戦争直後の食糧難から始まる厳しく貧しい時代を出発点とし、社会経済もそして大学も様々な試練にぶつかってきた中の人生であった。回答内容を見ると、それぞれの頑張りが苦難を乗り越えて生き残ってきたともいえる。そして働き盛りの壮年期は高度経済成長をそれぞれの役回りで頑張り実現し、その成果を手にできた面も大きかったであろう。戦後初となった民主化教育世代の展開の中で、戦後の日本経済社会をいちずに頑張り、日本の発展を支えてきた世代である。それだけに波乱の人生でもあったろう。それゆえにそれをほぼ終えた今、人生を振り返ると、波乱の展開も含め、それらを余裕もって見つめる思いを感じられる。

ところで、そのような人生の満足度に対して愛知大学の学びはどのようなレベルにあったかである。表 4－E-12 がそれを示している。 やはり、かかわり方の強度レベルの選択で回答を求めた。それによると「多少のかかわり有り」以上は、ほぼ半数を占める。前表にみられる人生の満足度レベルよりは少し低い。大学での学びはその後の人生への価値観、学問を通しての真実へのアクセス方法などに重きが置かれ、法学のような実用性はない。回答の中にみられた愛大とのかかわりの多様性を見ると、回答「ふつう」の中にかなり吸収されている面もありそうである。それも含めると、ほぼ 80%が大学とのかかわりを認識しているということになる。しかしいずれにせよ回答者の半数が大学とのかかわりをより積極的に認めていることは愛知大学の大学教育に大きな価値があったことを示しているといえる。このレベルを見て実務教育へ指向すると、専門学校になってしまう。真理を追究する学問の面白さをどう発展させるかが研究者、そして大学人の課題になろう。

表 2 系

E-2　東亜同文書院

	人数
よく知っている	11
少し知っている	34
知らない	11
無回答	3

E-3　愛大事件

	人数
よく知っている	7
少し知っている	29
知らない	17
無回答	6

E-4　母校・愛知大学への関心

	人数
大変関心	13
多少関心	22
普通	16
あまり関心ない	4
無回答	4

E-7　同窓会（支部活動も）参加

	人数
はい	5
よく	0
時々	9
いいえ	38
時々・いいえ	1
無回答	6

E-5　愛知大学の情報

※複数回答あり

	人数
1. テレビ、新聞	21
2. 大学のホームページ	4
3. 「愛大通信」	18
4. さまざまな会合	5
5. 受験雑誌	3
6. 同窓生	7
7. 愛大新聞（名・豊）	31
8. ほか（ラジオ、電車内等の広告、部活動、ツール不足など）	11
無回答	6

E-11　人生をふりかえって

	人数
大いに満足	15
まずまず満足	30
普通	9
少し不満	2
大変不満足	0
無回答	3

E-12　満足度と愛大卒業生との関係

	人数
大いに関係	8
多少関係	19
普通	18
あまり関係ない	4
全くない	4
無回答	6

第 3 章　豊橋校舎「法経学部　法学科」卒業生の場合

はじめに

豊橋校舎法学科もこの時期、名古屋校舎の教養課程を終えた 3 年制が豊橋校舎で学ぶ形がしばらく続いたので、法学教育の核は豊橋校舎にあった。経済学科に比べても法学科は公務員の指向がその後強まる前であり、入学志願者、入学者も経済学科に比べると少なかった。しかし、行政にかかわる仕事は法的知識が必要であり、夜間 2 部のコースでは弁護士を目指す学生も出てきており、次第に国の政策が多様化していく中で、法的知識を持つ学生は増えていくことになる。そのような動きのなかの開明期にあたる法学科であり、本間学長も裁判官や弁護士を務め、戦後の最高裁事務総長を務めるなど、愛大の法学はほかのスタッフも含め、中部地方の大学では名実ともにトップであった。

A. 生年、入学年、出身校など

（1）生年、入学年、出身校

表３－A-1 は、今回の回答者の生年別入学年を示した。今回の入学年の 1960 年生のうち、生年が最も古いのは 1931 年生で、同じ学年でも 1938 年までかなり年齢に幅があり、法学を目指す入学生の特徴にもなっている。ここでは 1966 年の入学生までの内、やはり高齢化が進み、対象者の中にはなくなったり、体調を崩したり、行方不明者も見られたりして、回答者は多くないが、それでも 43 人が回答を寄せてくれた。調査の実施が 10 年遅かったことを反省している。

出身地を見ると地元三河が 12 人で最も多く、次いで 9 人の名古屋地区となっており、今回は名古屋以外の尾張地区は知多の 1 人だけである。通学環境もありそうである（回答者によれば 1959 年に名鉄電車が高速化し、瀬戸からも通えるようになったとある）。あとは隣接県で、通学圏ぎりぎりというところである。注目されるのはそのほかの県で、中部地方から西日本へ広がっており、全国区型の分布である。書院由来の歴史と伝統への評価、中国への関心など、愛大法学が求心性を持っていたことの表れであろう。

（2）愛知大学の認知度と志望動機

表３－A-5 は、「本学を知った理由」である。それによると、最も多いのは高校教員からの勧めであり、受験雑誌など、そして地元の認知、先輩や知人などの人的情報も多い。色々情報を集めて決定したこともわかる。そして表３－A-7 は、その入学理由である。以下はその紹介。地元学生が多いのは当然として、授業料の安さ（回答者の中には自衛隊で学費をためて入学。そんな貧しい学生は当時ごろごろいたと）、優秀な教授陣（例えば本間、小岩井、松坂教授など）、前身が東亜同文書院大学という歴史的背景、中部地方有数の大学だった。地方に沢山の試験場が置かれていた。また愛知大学しかなかったという回答も、早くも司法試験を意識している入学生もいたことなどがわかる。

B. 学業生活と満足度

（1）学業の位置

以下、学業についての回答である。

まず、表３－B-1 は、学業の位置について

である。当然ながら学業中心だとする回答者がほとんどである。しかし、多くの学生はアルバイトもしながら頑張り、懸命に両立を図ろうとし、そのような中で、常に学業へ指向していたこともわかる。その実態を知ると頭が下がる思いがする。そして病気で数年間浪人し、同学年生がすでに大卒で就職する姿を見て、発奮したとする回答や、バイトをしても昼間の学校で学びたいと歯を食いしばって勉学を頑張ったとする回答者もある。そして良い教授たちに巡りあえた喜びも語っている。また、強い柔道部にあこがれて入部し、そこでは文武両道主義の岩竹先生に会い、学業も練習も頑張ったとの（複数）回答もある。

（２）関心分野

では学業の対象になった分野についてはどうだったのかの回答である。

表３－B-2 はそれをまとめて示した。まず、ゼミについては、回答者は 5 つのゼミをあげている。ここでは法社会学の黒木ゼミ生が多い。黒木ゼミは入会林野などの法社会学的現地実践と先生を交えたコンパで知られていた。専門科目は 12 科目があげられ、必修科目の憲法は当然として民法、法学概論、政治学、法社会学、刑法、法哲学などの今日も継承されている科目であったことがわかる。そのほかでは教養科目の哲学。外国語科目では中国語などに関心があったことがわかる。

（３）印象に残った先生

これについては表３－B-3 に示し。憲法、公法の酒井教授、私法の前田教授、法社会学の黒木教授、政治学の鈴木正四教授、労働法の胡麻本教授、商法、手形の本間教授、株主関係の脇坂教授らを中心に各教授へ広がっており、それぞれ力量のある教授の名前があげられている。教養部の所教授や短大では丸山薫教授（文学研究会顧問）たちの名前もあげられている。

（４）卒業研究論文

記憶が薄れたという回答もあるが、回答のあった分を卒業年次別に示してみる。

1960 年

「商行為」、「国会の両院性」、「訴因と控訴事実の関係について」、「認知幇の研究」。

1961 年

「株式譲渡」、「会社法上の機能」、「民法明認方法」。

1962 年

「行政処分」。

1963 年

「夫婦別産制批判」、「帝国主義と植民地争い」、「民法と商法」。

1964 年

「不法行為における損害賠償の請求権の時効」、「抵抗権の考察」。

1965 年

「法の施行の現状」、「不法労働行為と権利の乱用」、「憲法改正」。

1966 年

「生命の侵害」、「署名」、「手形、小切手の独立について」、「離婚は破綻主義で」、「現代アメリカの外航政策」、「国際連合」、「民法 5 部」、「会社法」。

表３系

A-1　法経学部法科　豊橋校舎

	S35	S36	S37	S38	S39	S40	S41
	1960	1961	1962	1963	1964	1965	1966
昭和6年	1						
昭和7年							
昭和8年	1						
昭和9年		1					
昭和10年	2						
昭和11年	2			1			
昭和12年	1	2					
昭和13年	2	1	1	1			
昭和14年		1	3	2			
昭和15年			2	3			
昭和16年					1		
昭和17年					1	1	1
昭和18年						3	
昭和19年							8
昭和20年							1
未回答							
計	9	5	6	7	2	4	10

A-2　出身地

昭和35～41年卒

三河	豊橋	4	
	豊川	1	
	御津町	1	
	田原町	1	
	蒲郡	1	
	吉良町	1	
	岡崎	3	
	知立	1	
尾張	名古屋	7	うち守山市1
	瀬戸	1	
	春日井	1	
	清須	1	
知多	阿久比町	1	
静岡市	浜松	1	
	御殿場	1	
岐阜	岐阜	1	
	瑞浪	1	
	池田町	1	
	神戸町	1	
三重	桑名	1	
	四日市	2	
その他	兵庫県	5	
	石川県	1	
	新潟県	1	
	香川県	1	
	広島県	1	
	佐賀県	1	
	合計	43	

A-3　出身高校

昭和35～41年卒

三河	時習館	2
	豊橋商業	1
	豊橋市立	1
	国府	1
	成章	1
	蒲郡	1
	一色	1
	岡崎	2
	安城	1
	知立	1
名古屋	旭丘	1
	松蔭	1
	名古屋市立西陵	2
	愛知	2
	東海	1
	東邦	1
	名古屋	1
知多	半田	1
静岡県	浜松西	1
	掛川西	1
岐阜県	岐山	1
	大垣北	2
	多治見	1
三重県	四日市	1
	海星	1
その他	市立姫路（兵庫）	2
	龍野（兵庫）	1
	神港学園（兵庫）	1
	大阪（大阪）	1
	穴水（石川）	1
	新発田（新潟）	1
	三原工業（広島）	1
	大手前（香川）	1
	佐賀（佐賀）	1
	未回答	3
	合計	43

A-5　本学を知った理由

※回答者のみ集計、複数回答あり

大学案内、進学資料	3
先輩	3
知人	2
友人	1
兄	1
いとこが愛大教員	1
高校教員	6
雑誌、雑誌、本	6
愛大教員が有名	1
地元	6
既に知っている	4
地域性	1
学力	1
愛知大学しかなかった	1
法律学科	1
中国に興味あり	1
柔道部が有名	1
事前調査	1

A-7　入学理由

※回答者のみ集計、複数回答あり

他私大より学費が安い	5
経済的理由	1
自宅通学が可能、通学に便利	9
地元だから	1
高校教員のすすめ	2
先輩の存在	3
友人・知人の存在	2
父のすすめ	1
兄のすすめ	1
優秀な教授陣	5
受験問題の難易度、学力	3
受験会場、試験日	2
司法試験を考えていたから	1
中国に興味	2
同文書院が前身	3
柔道が有名だから	1
外の世界を知りたいから	1
健康問題	1

表３系

B-1　学業の位置

	人数
学業が主	22
どちらかといえば学業	9
学業はまずまず	9
学業は従	3

B-2　興味　※複数回答

	人数
ゼミ（黒木）	4
ゼミ（酒井）	2
ゼミ（鈴木正四）	2
ゼミ（前田）	2
ゼミ（木田）	1
セミナー	1

法律全般、法学概論	5
憲法	10
民法	7
政治学	4
法社会学	4
刑法	2
法哲学	2
政法史創始	1
商法	1
国際法	1
会社法	1
刑事訴訟法	1

哲学	2
社会学	1
文学関係	1

中国語、中国関係	4
英語	1
ドイツ語	1
スポーツ	1

大陸帰りの先生の授業	1
若い先生の授業	1

B-3　印象に残った先生　※複数回答

	人数
酒井吉榮	11
黒木三郎	9
前田耕造	9
小岩井浄	4
鈴木正四	4
長谷川雄一	4
山中康夫	3
入江（国際法）	2
木田純一	2
久曽神昇	2
桑島信一	2
胡麻本蔦一	2
鈴木択郎	2
本間喜一	2
本間忠彦	2
松坂佐一	2
脇坂雄治	2
板倉鞆音	1
今泉潤太郎	1
内山雅夫	1
遠藤（中国語）	1
大内（柔道部）	1
大河内（独語）	1
大林（英語）	1
大林（行政法）	1
岡崎不二男	1
勝部元	1
川崎一郎	1
木田純一	1
鈴木安蔵	1
高桑純夫	1
知念（倫理学）	1
張禄沢	1
浜田（会社法）	1
林（中国語）	1
藤田（中国語）	1
細迫朝夫	1
松岡（教養部）	1
丸山薫	1
薬師寺	1
柳沢英二郎	1
若江（英語）	1

（5）先生との交流

回答例中心だが、かなり活発な教授たちとの交流があったことがうかがわれる。その一部を以下紹介する。

1960 年

「酒井教授の「五葉会」で学生とご家族ぐるみのお付き合い」、「清水教授と「愛知大学新聞」との関係で」。

1961 年

「交流あり」、「先生宅で食事をごちそうになった」、「卒業後も」。

1962 年

「ゼミの同窓会開催」、「結婚式の来賓で」、「卒業後も」。

1963 年

「結婚式に来賓で」、「先生の自宅や公館に来られた時の食事会など」（多数）、「研究室へもよくお邪魔した」。

1964 年

「先生たちもまだ学内に多く住んでおられたので、色々お世話になった」。

1965 年

「黒木先生宅へはよく出かけ、前田先生とも意見交換をした」。

1966 年

「柔道合宿所でよく意見交換し、近くで食事会も」、「食事会」（多数）、「先生とゼミ生たちとたびたびの旅行」（多数）、交流の中で先生の人生観にも触れることができた」。

（6）図書館利用

全体としてみると、①普段から積極的に利用、②卒論時に集中的に利用、③ほとんど利用しない、の 3 グループに分けられ、それぞれがほぼ 3 分の 1 を占めていた。豊橋校舎の図書館も充実期はこの後であり、豊橋市立図書館へ通う学生もいた。

（7）在学中の満足度

これについては表３－B-8 にまとめた。それによると「まずまず満足」以上が実に 86％を占めている。満足度はきわめて高かったことがわかる。そこであげられている理由を以下に示す。

1960 年

「教授陣が立派であったこと」、「他大学や裁判所などに籍を置く学者や判事は年齢も召しており、経験も十二分にあったが、そうでない教授には物足りなさも感じた。学生寮の経験をしたかった。ただ厩舎を改造して居住されている先生たちを考えると贅沢かも。豊橋校舎には学食がなくひもじい思いをした。賄いつき下宿もなかった」、「学費未納で除籍処分を受けたが、復学できたこと」。

まだ、基本的には食糧難の時代であったことがうかがわれる。

1961 年

「先生方の熱心な講義に満足感」、「自分次第」、「単位を取って空手修行に励んだ」。

1962 年

「よき友人に恵まれた」（多数）、「自由で束縛のなかったこと」。

1963 年

「よき友を得た」（多数）、「よき先生に巡り会えた」、「どんな学科の授業も自由に受けられた。豊橋校舎は木造であったが、構内の環境は良かった」。

1964 年

「多くの友人を得た」、「岩竹先生の授業は文武両道で全出席した」。

1965 年

「寮の友人と学び、交流できた」。「寮生活 3 年、下宿 1 年」。

1966 年

「色々な学生と付き合えた」、「自分は学生間の交流に欠けた。自己責任だ」、「愛大新聞、自治会の活動で議論を深められた」。

（8）学業の人生への影響

表３－B-9　にその結果を示した。それによると「まずまず」以上が 75%を占めている。「まあまあ」以上を加えると 88%になり、学業が人生への大きな影響を与えたことがわかる。これは前述した経済学部卒生の回答を大きく上回る。法学がより専門性の高さがあるからであろうと思われる。その具体的な内容をみると以下のとおりである。

1960 年

「世の中をより広く見ることができるようになった」、「勤勉」、「物事に対する考え方」、「崇高な大学設立の理念を自分なりにかみ砕き、そのエキスを座右の銘に凝縮させ、自己の生きる縁にしてきた」、「労働法のゼミから人事課労組対策に配属、関係部署に定年まで、あとは社会労務士事務所を開業した」、「モノを考える基盤ができた」、「国家資格を沢山受けた」。

1961 年

「岐阜県上級公務員試験に 300 人中 9 番で合格」。

1962 年

優良企業（三菱 TB）に入社」、「愛大の基礎の上に他大学の博士課程に進学できた」、「なにごとも基礎を理解することだと」。

1963 年

「友人たちの援助を受け、40 歳になって大学教員を目指し、名古屋文理大 10 年、静岡福祉大で 10 年勤務」、「公務員になったので色は出せず」、「労務部で法関係業務が多く、愛大で学んだ法学の基礎が役だった」。

1964 年

「15 倍の難関を突破して姫路市役所に 22 年、その後統一地方選で当選し、32 年つとめた」。

1965 年

「愛大で学友や先生と交流できたことが仕事にプラス」、「今思うに、法律にかなり自信を持っていたので、生活や仕事を恐れない傲慢さもあって恥ずかしさもある」。

1966 年

「自力本願を学んだ」、「高卒就職者が多かった時代、下宿までして愛大へ行かせてくれた親に感謝。一部上場の会社役員になれたこと」、「民事不関与の公務員になったが、民事関与多々あり」、「県警に就職」。

C. クラブ、サークル活動

表５－C-1 は回答者が参加したクラブ、サークルに一覧表である。自治会、新聞界、応援団のほかに、スポーツ系と文科系の基本形がほぼ出そろっている。

その活動状況をみると、「名古屋校舎時代

表 3 系

B-8　　在学中の満足度

	人数
大いに満足	10
まずまず満足	27
まあまあ	3
あまり満足していない	0
まずまず、まあまあ	1
無回答	2

B-9　　学業の成果が人生に与えた影響

	人数
大いに影響	18
まずまず	13
まあまあ	7
あまり	5

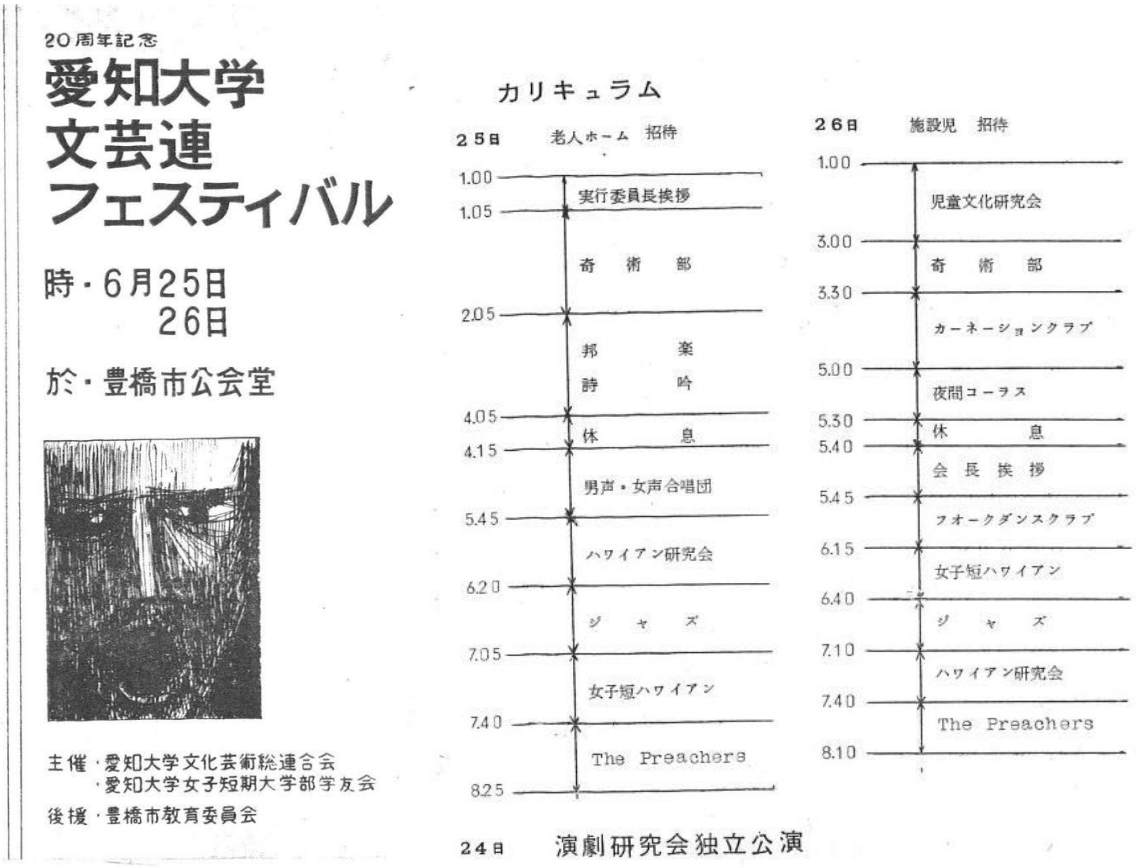


表 3 系

C-1　　参加していたクラブ・サークル名

※複数回答あり

	人数
自治会	1
新聞会	2
応援団	1

空手部	2
剣道部	2
柔道部	2
運動部	1

サッカー部	1
バスケットボール部	1

卓球部	1
バドミントン部	1
ゴルフクラブ	1

馬術部	2
自動車部	2

茶道研究会	1
演劇研究会	1
吹奏楽部	1

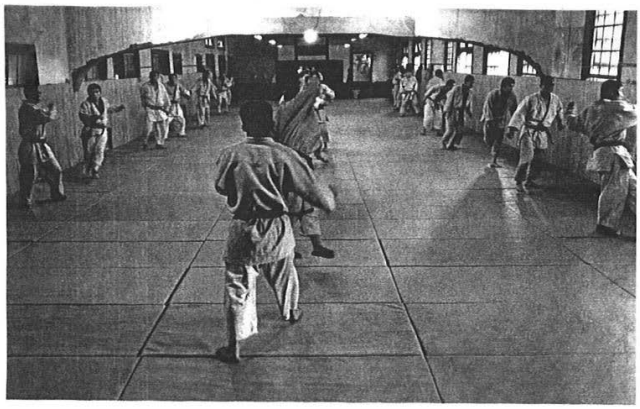
法学研究会	3
法社会学研究会	3
憲法研究会	1
社会科学研究会	1
文学研究会	1

C-2　　クラブ・サークル活動の参加

	人数
よく参加した	12
まずまず	11
あまり参加しなかった	5
よく（名古屋）、あまり（豊橋）	1
無回答	14

C-4　　クラブ・サークル活動の影響

	人数
大いにあった	12
まずまず	3
まあまあ	5
あまりなかった	4
無回答	19



の自治会は、名古屋にあった大学の二流評価を払しょくするため、名古屋校舎では学力向上の刺激を大学側に求め、補講のカバー、試験結果の公表、自治会執行部の学食での皿洗い手伝い、などを要望、実施し、学外の活動では他大学と先頭を競っていた。豊橋校舎へ移ってみると、名古屋校舎と全学連の派が異なっていたので、憲法ゼミの方を楽しんだ」。「愛知大学新聞の発行。3年次に小岩井淨追悼号を発行した」、「愛大新聞の発行や取材」、「憲法研究会は主に第 9 条問題」、「法学研究会は、先輩や同級生がよく勉強し、熱心に議論した」、「バトミントン部を創設。名古屋市のバトミントン連盟委員長、東海地区選手権を獲得」、「乗馬の順連、対外試合、馬の世話」（複数）、「毎日練習した空手。体育会長も務めた」、「愛大柔道部は東海地区で 13～16 連覇」、「剣道練習と試合」、「サッカー体力強化」、「名古屋校舎にはまだなかった茶道部を立ち上げ、既存の豊橋で入会」、「文学研究会で『愛大文学』を刊行」、「法社会学研究会では先生との交流、会長も担当」、「自動車部で中国地方へ長期遠征し、中国地方の経済活動を知った」、など。

そしてこれらのクラブ、サークルを通して、「多くの友人ができたこと」（多数）、「部やクラブの上下関係、規律、挨拶の大切さを知った」し、「青春そのものであった」、「授業と違い自分の考えをのべることができた」、「東京の大学で全国ゼミナールに参加し」、「連帯感、共助の精神を養えた」、「多様な考えを持つ人たちと議論、交流ができた」、「我慢することも養われ」、「協調性もできた」、「先生方や事務局の方々の立派な指導者に恵まれ教えをうけた」、「いろいろな角度から法律や凡例を研究できた」、「愛知大学新聞界会長及び学生自治会の機関誌部長として活躍できた」。

そしてこれらの人生への影響は、「人の上に立つことができた」、「労働組合との協議に役立った」、「市長選に立候補したとき、同窓生たちが応援弁士として駆け付けてくれた」、「議論の仕方や相手の気持ちも知れた」、「モノの見方がわかった」、「1000 人の労組結成にたずさわった」、「体力を付けたおかげで今も元気だ」、「卒業後、地域に劇団を立ち上げ、茶道も伝統文化の啓蒙を進めた」、「中学校の剣道クラブの指導に役立った」、などがあげられ、さらに「国民体育大会に三重県代表として 4 度出場」、「他大学の空手部との話あいができ」、「兵庫県柔道協会参与、姫路柔道協会長を 20 年間つとめた」、「色々な大学との交流で勉強になった」、「労働組合の結成にかかわり、書記長、委員長就任」を経て充実感を味わった」、「イラクのバクダッドから思いもかけない指導依頼が来た（剣道）」、などの発展経験が寄せられた。そして、「愛大に学び、ともにめぐり逢い、大学の自由な雰囲気の中で、4 年間を過ごせたことはよかった。その後の困難を乗り越える時、道を選ぶ時の指針を得ることができたのは、ここにあったと思う」という回答で結んでおきたい。

D. 就職と人生

卒業と同時に迎える就職問題に回答者たちはどう対応したのであろうか。

まず、その対応レベルを表３－D-1 に示した。それによると前述の経済学科と同様に、あまり活発に対応はしていない。その理由も経済学科とほぼ同じように思われる。

例えば、1963 年卒の回答の中に、「昭和 30 年代後半でも、現在のような会社説明会の開催はなく、個人で先輩を尋ねて話を聞く程度でした」とあり、表３－D-6 に見られるように、自力での開拓が最も多いが、これも含め縁者などの推薦、コネが就職を決めていたその当時の状況がよくわかる。大学就職課は大きな力ではなかった。まだ個別の力による就職であった。背景にはまだ大卒者が圧倒的に少ない時代であり、企業もコネを優先していたからである。学生も卒業直前までクラブ活動や卒論と取り組んでおり、就職は何とでもなるというような思いも強かったことがいくつかの回答からうかがわれる。今日のイギリスのように、授業は卒業直前までやる大学本来の姿がまだ見られた時代であった。今日のように大学へ入学したとたんから就職指導が組織的に行われる時代はもっと後の時代であった。しかし、1965 年には「高度経済成長の時代」、「企業戦士といわれた時代」というキーワードが　回答の中に現れ始めており、大量生産時代へ向かう中での大学進学率の上昇が重なる中で、企業と大学がいやおうなしに次の組織的就職の時代へと向かっていくことになる。その前段階であった。

表３－D-2 はまだ穏やかな就職環境レベルである。「やや厳しいレベル以上が多いが、しかし、表３－D-4 のように、「意識せず」も含めると、ほぼ順調に、希望通りに就職している。これに関して 1963 年には「まだ愛大事件がまだ冷めやらぬ時代であったが、諸先輩の各産業界での活躍が評価されていた点が大きかったと思われる」との回答もある。

それにも関係して、愛大卒業生の経歴とその意識についての回答が、表３－D-7 である。全体としては、意識組と無意識組に分かれるが、ほぼ 60％が意識している。意識組では「後輩たちのためにも有名企業にはいった」（1960 年卒）、「仕事上、法学科卒でよかった」（同）、「同文書院の開拓精神に共感」（同）、「東亜同文書院、ハルピン学院出の先輩たちと交友」（1962）、「東海の有力大学としての自信」（1965）、「優れた県副知事への入庁時の紹介」、「有名大卒へのライバル意識」（1965）、「母校の名誉」（1966）、他など。一方,無意識組には「大卒がそんなに有利ではなかった」、「企業によってはまだ先輩の少なかったところも」（多数）。

表３－D-5、8、9 は回答者の就職先、転職先、再就職先の一覧表を示した。それぞれ当時の幅広い有力企業が並び、県や市、それに教員、メディアなどに就職し、当時の法学科卒の特徴もわかる。

最後は、就職に絡んで、愛大生の評価と特徴についての回答を見てみる。

まず、評価に関しては、「それぞれ自分の道を歩いている」、「出身大学による差はほとんどない」、ただし、「車道キャンパスの夜間コースの卒業生は、きわめて優秀な人材が多く、地味ながらも県行政の礎を支えている」（1960）、「外見より中身だ」（同）、「かなり評価されている」（1961）、「卒業生で評価されるのではなく個人として尊重されるべき」（同）、「普通」（1963）、「比較しようがない」（同）、「今回の学生による給付金事件で大きく評価を落としたのは残念」（同）、「愛大卒生を自負して生活している」（1964）、「優秀だが自己アピールが今一つ」（1965）、「比較は無関係」（同）、「バイタリティあふれた元気な人が多い」（1966）、「真

表３系

D-1　卒業時の就職活動

	人数
かなり積極的	4
やや積極的	5
普通に	16
あまりしない	10
全くしない	5
無回答	3

D-2　卒業時の就職環境

	人数
かなり厳しい	11
やや厳しい	13
普通	10
あまり厳しくない	6
全く厳しくない	0
無回答	3

D-4　希望した分野への就職

	人数
はい	14
なんとか	9
意識せず	11
意に反して	3
無回答	6

D-6　就職でお世話になった人

※複数回答あり

	人数
大学就職課	7
愛大卒業生	5
知人、友人	9
自力	17
就職先	2
ほか（親、兄弟、恩師など）	5
無回答	5

D-7　愛大卒業生の経歴を意識

	人数
はい	14
少し	11
特になし	13
無回答	5

D-5

就職先　(1/2)

名称	所在地	（人）
オーエスジー		1
川鉄機材工業（株）	名古屋市（本社：東京）	1
愛知金属工業K.K.	春日井市	1
トヨタ車体	刈谷市	1
トヨタ生活協同組合	豊田市	1
菊水化学工業	愛知県	1
名古屋塗料	みよし市ほか	1
日本オリベッティ	東京、名古屋、大阪	1
中部ナショナル		1
八欧電機	川崎市	1
河合楽器製作所	浜松市	1
六甲バター	神戸市	1
栗田工業	大阪～東京	1
山和工業	名古屋市	1
小原建設	岡崎市	1
建設業	四日市市	1
名古屋鉄道	名古屋市	1
西濃運輸	大垣市	1
伊勢湾海運	名古屋市	1

就職先　(2/2)

名称	所在地	（人）
愛知マツダ	名古屋市	1
静岡日産自動車	静岡市	1
新潟日産自動車	新潟市	1
三菱信託銀行	東京	1
岐阜信用金庫	岐阜市	1
兵庫県たばこ信用組合（金融業）	神戸市	1
大商証券	名古屋市	1
愛知県庁	名古屋市	1
一宮市役所	一宮市	1
豊川市役所	豊川市	1
姫路市役所	姫路市	1
愛知県警	愛知県、名古屋市	2
蒲郡郵便局	蒲郡市	1
尾張高校	名古屋市	1
岡崎市立学校	岡崎市	1
尾道市立中学校	尾道市	1
東京経済大学（事務職員）	国分寺市	1

表 3 系

D-8

転職　　（各1）

名称	業種	所在地
ミドリ安全	安全靴販売	東京、名古屋、福島
美濃紙業	販売	大阪府
ネスレ日本	食品製造、販売	神戸市
食品新聞社	編集・営業職	大阪市

協栄信用組合	金融業	大阪市
吉良保険	損保	名古屋市

日本自動車産業労働組合	労働組合	東京都
連合会（現、日産労連）		
司法書士事務所	司法書士業	名古屋市
姫路市議会議員		姫路市

D-9

再就職　　（各1）

名称	業種	所在地
セフティトップ	安全用品販売	大阪、名古屋、東京
西村家具		藤枝市
第一電話		岡崎市

近畿日本ツーリスト名古屋営業本部	旅行業務	名古屋市
スイトタクシー	旅客運送	大垣市
グリーンハウス	外食産業	東京
金融機関	サービス業	
多数	サービス業	愛知県

臨海環境整備事業団	県外郭団体	名古屋市
愛知県水道サービス事業団	県外郭団体	名古屋市

建設業（自営）	建設業	四日市市
学習塾（自営）	教育	稲沢市
塾（自宅）	教育	
マルサカ企画（自営）	保険代理店（損害）	新発田市
食品流通新聞社		愛知県
常光寺	寺院の布教活動	豊川市

面目で研究熱心」（同）、「良い方だ」（同）、「下積みや地味な仕事も頑張る」（同）、「一目置かれていた」（同）、「同期生のほとんどは最後まで職を全うした」。

自己評価的ではあるが、当時の愛大生の高い評価と自信が伝わってくる。

これらにも関係するが、次に愛大生の特徴について問うた。

それに対しては、「県職員について振り返ると、人柄に派手さはなく、地味で純朴、人間味ある温かい、地方行政で県民に対応するのに格好の人材が多かったようです。しかし、最近は「古哲会」もなりを潜めていると仄聞します」、「質実剛健」、「群になるより独立志向が高いように思われる」（以上1960）、「法律をしっかり学び、論理的に話す」、「特にない」（以上 1961）、「まじめ」、「あまり感じない」、「自由でいい学校だ。愛大卒を素直に言えた」、「負けない精神」（以上 1962）、「上位 10%だけでなく、80%が並みの社員にはなれるレベルでした」、「がつがつしない」、「とくにない」、「一部の卒業生は知識、人格も高く評価されているし、全般を見てもどの卒業生も堅実さがある」（以上 1963）、「当時は学内に畑もあり、自作で野菜作りなど、他大学では見られない先生と学生関係でした」（昭和 30 年代後半）、（1964）、「個性的で優秀だが二番手も見られた」（1965）、「バイタリティあふれる元気な人が多い」、「真面目で研究熱心」、「我慢、忍耐強い」、「骨太」、「庶民的」、「とくにはない」（以上 1966）。

以上から見ると、多面的な顔も伝わってくるが、「先生」も校舎内に居住していた時代、「愛大塾」のような雰囲気が学生たちを支えていたようにも思われ、そこから愛大生が育ったようにも思われる。大学と学生をめぐる戦後の厳しい諸環境は、大学内に居住する先生宅と大学の中での学生と先生の関係を密にし、公館での交流も含め、ケンブリッジやオックスフォード両大学のカレッジにつながる雰囲気もあったように見える。今後の研究課題かもしれない。

E. 愛大卒業生として

（1）愛大設立趣意書とのかかわり

まずは愛大設立の憲法ともいえる愛大設立趣意書への学生たちの思いはどうだったのかである。

「主旨通りであると思う」、「公平を常に求めていた」、「誇りだ」、「愛大卒生として恥じない生き方をしてきた」、「理念を具現化されてきた先生方に感謝。日本国憲法の大学に関する部分を網羅している」、「自由の影に受難は必然。その文言は今も胸に刻んでいる」、「愛大卒を誇りに思っている」（1960）、「知を愛する教養人としての自尊心」（1961）、「中国との交流を進めてきた」、「とくに意識せず」、「同窓生が多い四日市市で気軽に交流」（1962）、「学ぶことの大切さ。それを生活に生かすことの重要さ」、「自由受難の強烈な印象」、「自己的でなく、相対的立場で人と接すると理解」、「真理の探究心は学生時代に養われた。地域で各種の役割を担っています」（1963）、「わからない」（1963）、「愛大卒を使って、地方で地域社会文化の貢献をしている」、「自由に生きてきた」（1964）、「地域社会への貢献と人を大切に生きてきた」（1965）、「政治あふれる貢献を」、「誇りを持てるようになった」、「社会への関心は高くなかった」、「海外とのつながりをサイパンのホテルで展開中」、「生活

に潤いを持たせてきた」（1966）。

（２）東亜同文書院への認知

「図書館の文献」、「先輩から」（複数）、「先輩から）」（複数）、「先生方から」、「本間、小岩井先生の講義で」（1960）、「高校の先生から」（複数）、「新聞報道から」、「書院出身者から」（1961）、「大学の先生から」、「先輩から」（1962）、「大学広報」（複数）、「図書館で」、「中国語授業で」、「豊橋校舎資料室で」（1963）。「本間喜一先生や先輩から」、「寮生だったから歌も歌えた」（1964）、「本や先輩から」、「兄から」（1965）、「先輩、教授から」、「親と本から」、「入学時は知らなかったが、愛知県の人は良く知っていた」、「入学時と愛大新聞界の活動から」、「外地から引き揚げてきた先生から」、「入学前から」、「入学後に歴史資料から」、「親や教授から」（1966）。

書院情報は広く知られていたようである。

（３）「愛大事件」の認知

「学問や学園の自由について当時、当事者の理解と司直や社会一般の考え風評の違の中で、目的不明の不審者ともとれる行動がこの発端だったと理解している」、「脇坂教授も法廷に立った」、「私は翠嵐寮にいたので、常に意識していた」、「教授が弁護士にもなられていた」、「大変な時代だった」、「誇り」、「世間の大学を見る目」（1960）、「本間学長は偉大な人格者だ」、「当時愛大は赤の学校だと」、「就職など影響あるように受け止めた」（1961）、「特になし」（1962）、「学長や先生たちの熱意と大学自治」、「警察権力の横暴だと考えていた」、「時の流れ」、「あまり関心なし」、「諸状況からやむを得ないものと理解。ただし、裁判が長引いたのは残念」（1963）、「昭和 29 年の事件ですが、やはり開拓精神で何者にも負けなかった」（1964）、「正義を貫いた本間学長に敬服」、「公権力に立ち向かっての勝利」（1965）、「（本間先生は）理想と気骨にあふれる人物である」、「新聞報道程度」、「在学中の口コミや愛大新聞などで」、「学生自治の大切さを知った」、「本間学長の学生弁護は素晴らしい取り組み」、「高校時代の新聞で」、「平和主義の理念に基づき良識を以て対応できたのだと」、「考え方の多様性」（1966）。

愛大事件は、この時期には過ぎ去ったことではあったが、本間先生らによる学生弁護はまだ続いていていた。法学を学んだ学生には最大の関心事であったことは間違いない。

（４）母校への関心

「大学の成長ぶりを」、「母校だから」、「闘病生活後の 4 年間、心身ともに学びの日々でした」、「自分の進路をつくっていただいた」、「キャンパスが三好市にもできた」（1960）、「立派な先生たちの情熱ある授業を受けた母校だから」、「多くの若者に慕われてほしい」、「国内外で現役も卒業生も活躍を」、「知名度もアップするように学びの時代だった」、「東三河に存立する大学だから」、「新聞紙上で見ている」（1961）、「母校だから」（1962）、「素晴らしい大学でした」、「関心あり」（1962）、「愛大卒の研究者がもっとメディアに」、「卒業生の社会貢献の活躍を期待」、「先生がたともいろいろ相談ができた」（1963）、「当時はまだ少数の時代だったので互いに親近感があった」、「卒業後（もお互いが）仲良しであった」（1964）、

「ますますの発展を」、「知名度アップを」、「学生も卒業生も国内外での活躍を」（1965）、「人格形成の重要部分を学んだ」、「愛知大学の知名度を全国区へ」、「誇りあり」、「研究者として優秀な先生を育成してほしい」、「貴重な母校愛」、「高齢となり過去が遠くなりつつある」（1966）。

（５）同窓会への参加

「行政職として同窓会の色々な職場の卒業生との交流から得る情報がありがたかった」、「同期と一緒に役員をやった」、「会費だけ納めている」（1960）、「母校愛があるから」、「各地に支部を作りたい」、「支部 100％出席」（1961）、「仕事上助けられたり、助けたりがある」、「かつてよく出席したが、今時ご無沙汰」（1962）、「同窓生の活躍ぶり。情報交換で仕事にも役立つ」（1963）、「兵庫県連とすぐ連絡が取れる」、「同窓会出寮歌が歌える」（1964）、「先輩、後輩にお世話になり交流していました」、「支部活動で地方出身者と壁があるようです」（1965）、「同窓会で友人とのつながりがさらに深くなった」、「支部役員、議員」（1966）。

（６）同窓会の魅力

「講演会」、「同窓会は学生たちの活動活発化を支援すべき。公務員用、山岳部復活など」、「年代を超えて付き合える」（1960）、「各地に同窓会を」、「しっかりした支部の設立を」（1961）、「各地で定期的開催を」（1962）、「学内に同窓生が集まれるような談話室を」、「大学から現状や構想の説明を何年かに一度説明に来てほしい、また、毎年 4 人ほど同窓会活躍者の話を聞きたい」（1963）、「各界の活躍者をメディアにて紹介する」（1965）、「活動資金をもっと OB に要望した方がよい」、「もっと愛大の歴史を知らせ、学べるようにするべきでは、」、「同窓生の横のつながりをもっと強く」、「多数の方に参加してもらえる工夫を」「資金力に問題ありや」（1966）。

（７）大学への「要望」

「他大学に負けるな」、「特徴あるものをアピールし、大学の存在意義を示してほしい」、「すべての大学に共通するが、学生の粒が小さくなっている。自分の意思や思考を持たないように見える。かつてのような愛大生を育成してほしい」、「旧制大学令によって設立された数少ない真の大学であることに誇りを持っている」、「年代に関係なく共通の話題提供もしたい」（1960）。「司法試験や公務員試験に合格してほしい」、「もっと地域とのつながりを」（1961）、「将来理学部も作り、ユニバーシテイにしてほしい」（1962）、「全国的に著名に」、「卒業生にも図書館の利用を」、「法科大学はともかく、愛大がかつてのように中部地方での一流大学に」、「愛大生はよく頑張っている」（1963）、「東海地区ナンバーワンにアピールを」、「ニーズを生かした新学部や学科を」、「特色を出してほしい」（1965）、「少しスマートになりすぎている」、「全国的なブランド力発信の努力が足りない」、「以前は骨太の学校として評判であった」、「現在の先生方をメディアで見ることが少なくなった」、「名古屋駅前進出は楽しみだ」（1966）。

この大学への要望は、かつて自由の雰囲気の中で大いに学び、クラブ、サークル活動に情熱を燃やした卒業生たちにとって、その後の時代の変化の中で、卒業生から見る

今日の愛知大学への要望を見ると、大学への卒業生のもどかしさがにじみ出ているように見える。それは10年余り前の100億円の損失事故以来、名古屋駅前の進出はあったとはいえ、また損失もすでにカバーしたとはいえ、大学がすっかりカタツムリのように殻に閉じこもってしまい、かつてのような闊達な動きが見られなくなったことを、卒業生も感じているからであるように思われる。今後どのように殻から身を乗り出していく知恵と勇気を持つかであろう。

（８）後輩たちへ

「若い力で愛大のレベルをもっとあげてほしい」、「愛大の後輩だけに伝えたいということはない。しかし、最高学府で学んだことの自負だけは忘れないでほしい。最善を尽くしてほしい。だから短い4年間は大事だ」、「始業、終業時に鳴る鐘の柱に掘られた「自由」「受難」の意味を伝えたい」、「あらゆる機会をとらえて友人を作ること」（1960）、「司法公務員試験に合格してほしい」、「付き合える友達を作れ」（1961）、「自由に学べる大学であり、楽しい学園生活が送れる大学だ」（1962）、「対人関係を大切に」、「人生の基礎を作る最後の時期だ。勉学はもちろん、人間形成にも力を入れるために信頼できる先輩や友人を得たり、クラブや読書も重要だ」、「よく頑張ること」（1963）、「文武両道で頑張れ、クラブ参加も」（1964）、「全国で卒業生が頑張っていることを知り、自信を持ってほしい」、「学生生活の謳歌を。普通の学生でなく、特性（学業、他の能力）を生かして」（1965）、「すべてにもっとバイタリティあふれる生活を」、「愛大の歴史を学び、愛大卒に誇りを」（複数）、「4年間のびのび自由に」、「学業で身につけたことを生かす」（1966）。

（９）愛大で得たもの

「哲学。人生の生き方、考え方」、「つながりある同窓生は多くないが、そのつながりの強さ深さは圧倒的に同窓生で、職場の付き合いから生じた」、「愛大卒の誇りある最終歴。物事を正しくみる目を」、「独立心。ただし、おごれる者久しからず」（1960）、「法社会の確認、と自律心」、「価値基準」、「努力はかならず返ってくる」、「空手部で頑張ってきたこと」、「愛大卒の誇りを持ったこと」、「「心」、「モノの基本」を学校以外で学んだ」（1962）、「巡り合い。老いても学ぶ大切さ。学問の自由」、「多くの師（黒木、鈴木、高桑、玉木）と良き学友」、「無心。他社の立場で考えること。素晴らしい大学生活でした」、「勉学の楽しさ、真理の探究と正しい自由。「行雲流水」、「上善は水の如し」（1963）、「人間としての絆（先輩後輩と）、柔道部に籍」、「精神善用」、「自他共栄」、「人生の友人を得た」」（1964）。「ものごとをいろいろな方向から見ること」（1964）。「愛校心、のち愛社会芯」（1965）、「国立大出身でなくてよかった、人生努力次第」（1965）、「友人」、「同窓会をつうじての人的交流」、「大学生活の人的交流」、「左、右の考え方がわかることと努力」、「良識を生かした人生を送ることができたこと」、「自由な校風」（1966）。

（１０）出版物

1961年　愛知大学同窓会尾西支部設立20周年記念号。県上級職公務員合格試験勉強方法。

1962年　戦中戦後の様子を物語風に2冊

目出版中。
『株式譲渡制限制度の研究』（法律文化社）。
1963 年　郷土史研究会に随筆。
文献（DVD）作成。

（１１）思い出

1960 年

「貧しい時代によく親が応援してくれた。感謝いっぱい」。「自由な校風」。「アルバイト」。「小岩井学長の学者、人間としてのオーラに感激」。「2 年生のころ原水禁禁止の全学連デモで、名古屋地区諸大学のトップを行進し、翌朝の新聞に「時の人」として、写真が載り、父親にひどく叱られたこと。名古屋教養課程から豊橋専門課程へ移り、就学環境激変。豊橋の従前からの学友との些細な軋轢、自治会環境の激変、全学連内の意見の違いで出る幕がなくなった。生活環境も下宿環境で激変。自炊が不得意でした」。「寮生活のころ、アチャコ、伴淳三郎主演の映画「二等兵物語」の学内ロケに出演。多くの愛大豊橋校舎施設が撮影された。また、法学科の榛村千一先生（高校先輩）が掛川市長選挙に立候補、応援弁士として先生宅に宿泊して活動。見事当選」。「昭和 32 年、小岩井学長から金一封と賞状を直接もらった。」

1961 年

「書ききれないほど多くあります。おわかりいただけるでしょう」。「高校時代の先輩、後輩が多くいたこと」。

1962 年

「民法の前田ゼミ、中国語、演劇部、茶道部」。「2 年次伊勢湾台風と試験が重なった」。

1963 年

「激動の 4 年間だった。1 年に伊勢湾台風、2 年に 60 年安保、4 年に山岳部遭難」。「伊勢湾台風、第 1 次安保反対闘争、全国法学ゼミ参加、黒木ゼミ活動、文学研究会（丸山薫先生）」。「学食が安かったこと、コーヒー30 円、ピース 40 円、ラーメン 20 円、スクールバス 10 円」。「現在 80 歳で記憶も老化、同窓の畑中司法書士の助言もいただき報告します。当時の名古屋車道校舎は狭い敷地にポツンと校舎が立っているだけ。移った豊橋校舎戦前の兵舎跡でしたが、多くの樹木あふれる広い構内に、心身とも癒されました。豊橋校舎にはすべての学部があり、どの学部の授業も自由に聞け、文学関係の授業も聞きました。また各教授の研究室もあり、書棚が研究室のかなりの面積を占めていました。私どもは気軽に各研究室に先生を尋ねました」。

1964 年

「2 年次に試合中にケガをし、豊橋市民病院に入院し、友達の友情に感謝です」。「まだ戦後が残っているような時代に写真記録があること」。

1965 年

「寮生による、また研究会によるイベント開催」。「寮生活の助け合い。また、薬師岳 13 人の遭難事故」。「下宿生活の自立生活、前期後期の徹夜試験勉強、下宿仲間との楽しい生活」。

1966 年

「民法前田教授を柔道場に招いての何回もの懇親会」。「学園祭での乗馬」。「薬師岳 13 人の遭難事故」。「愛大新聞とのかかわり」。「学園祭、寮祭」。「高校、愛大と同一の地区で 7 年間、良い環境でした」。「バイトに多忙でしたが、卒論を残し、3 年間で全単位取得」。

（１２）おわりに寄せて

以上、各卒業生が思い出を振り返ってくれたが、それぞれが戦後のまだ不安定な時代に、授業を重視しつつ、クラブ、サークル活動も積極的に力を入れ、友達親友を作り、それがその後の人生の宝物になったこと、台風や学生運動、山岳遭難など、当時の学生にとって最大級の事件事故が頻発しながらも、それらを乗り越える力を見せた。

その背景には、当時の一流の教授陣との交流、自由な学生たちの自立的な活動、それらを支えた寮生たちのエネルギーの発揮などが目に浮かんでくる。それだけに環境の充実とは裏腹に、見え隠れする近年の母校や後輩学生たちへのもどかしさがにじんでいるように思われる。卒業生の外からの目は十分に確かであろう。それにどうこたえていくかである。

表 3 系

E-2　東亜同文書院

	人数
よく知っている	20
少し知っている	15
知らない	6
無回答	2

E-3　愛大事件

	人数
よく知っている	17
少し知っている	23
知らない	2
無回答	1

E-4　母校・愛知大学への関心

	人数
大変関心	23
多少関心	9
普通	10
あまり関心ない	0
無回答	1

E-5　愛知大学の情報

※複数回答あり

	人数
1. テレビ、新聞	13
2. 大学のホームページ	7
3. 「愛大通信」	22
4. さまざまな会合	2
5. 受験雑誌	2
6. 同窓生	10
7. 愛大新聞（名・豊）	27
8. ほか（友人、知人、理事、豊橋の親戚、パソコンなど）	8
無回答	2

E-7　同窓会（支部活動も）参加

	人数
はい	11
よく	0
時々	10
いいえ	20
無回答	2

E-11　人生をふりかえって

	人数
大いに満足	12
まずまず満足	22
普通	7
少し不満	0
大変不満足	0
無回答	2

E-12　満足度と愛大卒業生との関係

	人数
大いに関係	12
多少関係	6
普通	16
あまり関係ない	4
全くない	0
無回答	5

第４章　名古屋校舎「法経学部　法学科」卒業生の場合

はじめに

前述の名古屋校舎経済学科と同様に、名古屋校舎法学科の入学生も専門課程は豊橋校舎へ通うことになり、それをめぐる状況は前述の経済学科で触れたので、繰り返しは避けることにする。ここでは名古屋校舎をベースとした入学生を中心に取り上げる。

A. 生年、入学年、出身校などの入学時

（１）生年、入学時、出身校

表４－A-1 は、回答者の生年別卒業年を示した。生年の最古参は昭和 13 年で、最も若い回答者は昭和 18 年であり、その傾向はほかの学科の回答者と同じである。ただし、前述の理由で、回答者数は合計 18 にすぎない。専門課程は豊橋校舎へ移動編入したケースが多く、後半は名古屋でも開講されたが、そのまま豊橋で継続した回答者も居り、前章の豊橋校舎法学科分と合わせて参考にしていただければ幸いである。

表４－A-3 は、地区別出身高校を示した。当然ではあるが、名古屋、尾張地区が大半を占める。三河も名古屋に近い高校である。

前述の豊橋校舎法学科に比べてローカル性が強い。

（２）愛知大学の認知及び志望動機

表４－A-5 は、「愛知大学を知った」理由である。それによると、情報先は幅広いが、中高の先生からの情報であり、大学案内や新聞情報となっている。また入学理由も多岐にわたって、通学の便や高校教師からの指導、将来の仕事への考慮などがあげられている。ほかには「小岩井先生の学風」。「学費の安さ」。「教授の先生方の魅力」、「国内私大では法学が充実」などの理由があげられている。

授業料の安さについては、本間学長の戦後における働く学生への配慮政策で、多くの学生がその恩恵に浴した。表４－A-9、10 はその一端を示した。授業料や生活費の親への依存度は高いが、記入内容から見ると、回答者は可成りバイトに精を出している姿も見える。その分大学の政策は、有効であったと思われる。

B. 学業生活と満足度

では、学業生活とその満足度はどうであったのか。

表４－B-1 は「学業の位置について」のレベルをまとめて示した。それによると、そのほとんどは「まずまず以上」で、自治会、新聞会、クラブやバイトなど、色々な状況もクリアしながら学業のウェイトを高めていたことがわかる。

表４－B-2 は関心あったゼミと授業科目の一覧であり、表４－B-3 は、印象に残った先生たちである。一部教養課程の先生も含め、多くの先生が選ばれている。先生評については、「真面目でよく勉強される鈴木正四先生」、「経営学（大石）そのものが新鮮」、「博士論文執筆中の酒井先生」、「胡麻本先生は薬師岳遭難時の学生部長で、お世話になった」、「民法山中」、「商法脇坂」、「民法浜田」、「黒木法社会学はその全盛期」、「本間先生に焼き肉屋で卒論提出」、「大教室がシーンとなる高桑先生の哲学」、「柳沢先生の

授業はいつも一番前で」、など。

表４－B-4 は回答者「前田先生のゼミで先輩たちの学ぶ姿勢から強烈なインパクトを受けた」、「黒木ゼミで社会問題になった四日市公害など、社会を見る目を学んだ」、「同じく近代法における所有権と入会権」、「本間先生の憲法」、「鈴木正四先生の近代政治史」、など。

卒論では、「すべての法律にかかわる民法」、「ブルジョア民主主義とプロレタリア民主主義」、「罪刑法定主義」、「未必の故意」、「ベトナム小史」（努力賞）、「伊那谷の入会権」、「沖縄問題」、「基本的人権」、「入会権の諸形態」、「手形行為独立の原則」、「土地所有制度史」、「日本国憲法」、「不法行為の研究」。

先生との交流では、「山の家で」、「集いがあるたびに（前田先生）」、「茶話会」、「コンパ」、「先生宅訪問」、「ゼミ合宿」（以上については複数）、「逝去されるまで政治、憲法、人権の議論」、など。

図書館利用では、卒論時に利用が多い。名古屋図書館はまだ整備途上であった。

「在学中の満足度」については表４－B-8 に示した。67％以上が「学業に満足」しており、「まずまず」を含むと 89％に達する。回答者からの「教育設備、教育環境は不備でしたが、学業内容は満足でした」が共通認識だったといえる。

この「在学中の満足度」の理由の一つには「よき友人に巡り合えた」（多数）ことが数多くあげられており、それが在学中の満足度につながった大きな条件であったと思われる。その関係は卒業後にも続いていることも重要である。なお施設などハード面では、「当時の居住性を考えると、今の新校舎がうらやましい」。

表４－B-9 は「学業成果の人生に与えた影響」を示した。「まずまず以上」は、56％、「まあまあ以上」を加えると 78％になる。全体的にみれば影響はそれなりにあったといえる。その内容を見ると、「思考力の幅がひろがった」、「大学で自分で勉強して頑張ればできるということを学んだ」、「職場の訴訟事件に役立った」、「学力では劣っていないと」、「中国語を習得できたこと」、「日中国交回復期に学んでいた中国語を学び始めた」、「考え方、見方、人格形成に」、「幅広の人間形成に」、「小学校での教育科目に役立った」、「地方公務員の法的思考に役立つた」、などがあげられている。

C. クラブ、サークル活動

クラブ、サークルについての動向なども他学部などで触れたので、ここでは、回答を中心にみてみる。

表４－C-2 は、その参加状況である。それによると、「まずまず」以上は 3 分の 1 あまりであり、特に活発というわけではないが、当時の車道校舎の環境とバイトも考慮した状況下で、各クラブが学生たちの熱意と工夫でここまで頑張ったという点では十分に評価してよいだろう。回答者の参加したクラブは表４－C-1 に示した。種類は少ないが、基本的といえるクラブは立ち上がっており、創設期から発展期への途上にあったといえるだろう。

活動内容を見ると、文系では新聞部は記事と広告取り、憲法研は学研的であった。中国研究会は中国語の勉強と毛沢東著作読んだ。放送研は他校との交流も多く、場所を提供した元二の丸跡の名大放送研との交流も。

表 4 系

A-1　法経学部経済学科　名古屋校舎

	S38 1963	S39 1964	S40 1965	S41 1966
昭和10年				
昭和11年				
昭和12年				
昭和13年	1			
昭和14年				
昭和15年	2			
昭和16年	1	4	3	1
昭和17年		1		
昭和18年			2	3
昭和19年				
昭和20年				
未回答				
計	4	5	5	4

A-2　出身地

昭和38～41年卒

三河	高浜市	1
尾張	名古屋	8
	一宮	1
	津島	1
	犬山	1
	清洲町	1
	木曽川町	1
知多	常滑	1
岐阜	岐阜	1
三重	菰野町	1
その他	京都府	1
	合計	18

A-3　出身高校

昭和38～41年卒

三河	刈谷	1
	安城農林	1
名古屋	惟信	1
	松蔭	1
	瑞陵	1
	名古屋市立菊里	1
	東邦	1
	名古屋第一	1
	名古屋女子	1
尾張・知多	津島	1
	小牧	1
	木曽川	1
	一宮商業	1
	常滑	1
岐阜県	長良	1
三重県	暁	1
その他	日吉ヶ丘（京都）	1
	未回答	1
	合計	18

A-9・10　授業料・生活費の工面

※回答者のみ集計、複数回答あり

	授業料	生活費
1. 親から	16	17
2. 親戚・縁	0	0
3. 奨学金か	5	1
4. アルバイ	2	3
5. ほか	0	0
合計	23	21

表 4 系

A-5　本学を知った理由

※回答者のみ集計、複数回答あり	
	人数
大学案内、進学資料	2
先輩	1
友人	1
親	1
親戚	1
中学・高校教員	5
地元	1
新聞	2
入試時	1
愛大に素晴らしい先生がいると聞いた	1
愛大の体育授業が高校グランドで行われていた	1

A-7　入学理由

※回答者のみ集計、複数回答あり

	人数
自宅通学が可能、通学に便利	2
他私大より学費が安い	1
大学受験の失敗、学力不足	1
法律に興味	1
希望する学科があったから	1
私大の中では法学関係が優れている	1
自分に適していた	1
経済的理由	1
高校教員のすすめ	2
先生の魅力	1
小岩井先生が学長だから	1
旧制・同文書院の雰囲気が残る	1
知識を仕事に活かすため	2
特別にない	1

表 4 系

B-1　学業の位置

	人数
学業が主	8
どちらかといえば学業	4
学業はまずまず	4
学業は従	2

B-2　興味　※複数回答

	人数
ゼミ（前田）	3
ゼミ（本間）	2
ゼミ（木田）	1
ゼミ（黒木）	1
ゼミ（夏目）	1

法律全般	2
民法（山中、浜田）	3
法社会学（黒木）	2
商法（本間、脇坂）	2
国際法（神谷）	2
政治学（柳沢）	2
政治史	1
法制史	1
憲法（酒井）	1
経営学（大石）	1
経済政策	1

哲学（高桑）	2

中国語	3
ドイツ語	1

B-8　在学中の満足度

	人数
大いに満足	1
まずまず満足	11
まあまあ	5
あまり満足していない	1

B-3　印象に残った先生　※複数回答

	人数
黒木	3
前田	3
鈴木拓郎	3
本間喜一	2
鈴木正四	2
酒井	2
高桑	2
柳沢	2
山中	2
今泉	1
今村（中国語）	1
大石	1
神谷	1
木田	1
胡麻本	1
張	1
夏目	1
浜田	1
細迫	1
脇坂	1

B-4　ゼミ

	人数
黒木（法社会学、民法、家族法）	4
前田（民法）	3
夏目（刑法）	3
鈴木正四（近代政治史）	2
本間喜一（商法、憲法）	2
木田（刑法）	1
酒井（憲法）	1
柳沢（政治学）	1

B-9　学業の成果が人生に与えた影響

	人数
大いに影響	4
まずまず	6
まあまあ	4
あまり	3
まずまず、まあまあ	1

表 4 系

C-2　　クラブ・サークル活動の参加

	人数
よく参加した	4
まずまず	2
あまり参加しなかった	6
よく参加した・まずまず	1
無回答	5

C-4　　クラブ・サークル活動の影響

	人数
大いにあった	4
まずまず	3
まあまあ	1
あまりなかった	3
無回答	7

C-1　　参加していたクラブ・サークル名

※複数回答あり

	人数
新聞部	1
雄弁会	1

ラグビー部	2
硬式テニス部	1

山岳部	1
ワンダーフォーゲル部	1

写真部	1
放送研究会	1

中国研究会	2
中国語研究会	1
憲法研究会	1
愛法会	1

当時の名大文科系は県体育館の場所にあった。愛法会は司法試験を目指していた。

スポーツ系では、ワンゲルが近隣の山登り、ラグビー部は一部で上位に君臨し、愛知学芸大（愛知教育大）に次ぐ実績。ただし、女子学生が少なく、女子のクラブはあまり活動できなかった。

このクラブ活動で、多くの先輩後輩を含む友人を得たことが大きかったし、他人の考えもよく分かったとしている。また新聞界、自治会活動では、自由が保障されていることが大きかったと。そして「忍耐力」が付き、もちろん多くの友人ができ、交流も進み、自主自立の精神が養われ、自分の頭で考える力がついた。また、理論的に考えることが次の職場で役に立った。活動は学外にもおよび、「名古屋学生放送文化研究会」で番組作りやアナウンスにも取り組んだ。社会参加もあり、その時も大学の基本理念が影響していた。卒業後、大学からの誘いもあって、中国グプチ砂漠の植林活動を行った。

D. 就職と人生

では卒業後の就職とそのごの人生は同だったのか。時代状況は前述の学科で説明したのでここでは省き、回答者の回答を中心にみてゆく。

表４－D-1 は、卒業時の就職活動について問うた結果である。これによると、全体として積極的ではなく「普通」が最多の回答である。これは、前述したように、この時代の就職は多くはコネによるもので、会社側の統一入社試験もなければ、大学側の就職案内、指導もまだ少数であったし、大学側の PR も不足していた。公務員や教員試験あたりが公的な就職試験で、民間企業のほとんどは縁者によるコネの世界であった。「積極的実施」という回答がゼロであるのはそれを端的に示している。表４－D-2 の「就職環境がかなり厳しい」というのは、当初の経済不況はあったもののそういう意味であって、今日とはかなり異なっていた。表４－D-3 にみられる「就職で世話になった人」を見ると、愛大就職課はたった 1 人であり、あとは、自力もあるが、ほとんど親類とか先輩、知人らのコネで決定していることがわかる。したがって表４－D-4 に示されるように、「希望した職種」比率は高くない。それが就職問題でもあり、再就職にもつながった。前述したように、卒業時には学業やクラブの方に力が入っており、就職意識がそんなに高くなく、コネも職種が思い通りにはいかなかったからである。今から見れば、大学のよさが学生を引き付けていたのであり、学生の方に余裕があり、のんびりしていた面もあった。

こうして決定した就職先は表４－D-5、8、9 である。教員や公務員のほか、それなりの民間企業に就職できている。同時に転職も見られる。これは前述の不本意な就職先からの転職だといえ、コネ就職の問題点でもあり、それを解決した表れでもあった。定年後も働く卒業生も多くみられたこともわかる。

以上を通じて、就職した職場での「愛大評価」については、それらを意識していないとする回答者がある程度見られる一方、民間調査会社に就職した卒業生は、「関東、関西では有名私立大学の存在感の大きさを感じた」とし、他の回答者は「この地方では愛大が南山外語に先行されていた」とも。また、「愛大には東亜同文書院の伝統があり、そ

表 4 系

D-1　　卒業時の就職活動

	人数
かなり積極的	0
やや積極的	3
普通に	8
あまりしない	2
全くしない	4
無回答	1

D-2　　卒業時の就職環境

	人数
かなり厳しい	4
やや厳しい	5
普通	6
あまり厳しくない	0
全く厳しくない	0
無回答	3

D-4　　希望した分野への就職

	人数
はい	7
なんとか	4
意識せず	0
意に反して	3
無回答	4

D-6　　就職でお世話になった人

※複数回答あり

	人数
大学就職課	1
愛大卒業生	2
知人、友人	2
自力	6
就職先	1
ほか（親類、縁故など）	5
無回答	2

D-7　　愛大卒業生の経歴を意識

	人数
はい	6
少し	3
特になし	7
無回答	2

表 4 系

D-5

就職先　(1/2)

名称	所在地	（人）
兼松	大阪	1
日軽アルミニウム	東京	1
食品会社		1

水野建設	名古屋市	1
六合建設	名古屋市	1

文溪堂	岐阜市→羽島市ほか	1
オックスフォード大学出版局	東京	1
笹徳印刷（株）	豊明市？	1

就職先　(2/2)

名称	所在地	（人）
愛知県庁	愛知県	1
一宮市役所	一宮市	1
名古屋港湾管理組合	名古屋市	1

愛知県教員		2
西春日井郡新川町立小学校	新川町	1
岐阜県立公立学校	笠原町	1

東海ラジオ放送	名古屋市	1
岐阜新聞	岐阜市	1

D-8

転職（各1）

名称	業種	所在地
帝国データバンク	民間調査会社	名古屋市
北村土地	不動産業	名古屋市
ニッケ不動産	建設業	一宮市

愛知県公立学校	教育	愛知県
土岐自動車高専	教育	土岐市
中部大学	事務	春日井市

D-9

再就職　　（各1）

名称	業種	所在地
帝国データバンク	民間調査会社	（本社：東京）
白月工業	電気設備業	名古屋市
名古屋コンテナ埠頭	港湾施設運営	名古屋市
ニューライトサービス	物品販売	名古屋市
□□サービス	ビルメンテナンス	岐阜市
南通生光化工有限公司	顧問	中国江蘇省

一宮市の外部団体	受付等の事務	一宮市
一宮市	放課後児童保育	一宮市
東濃福祉会	障害者施設	岐阜県

れをもっとアピールすべき」、など。また「愛大生の特徴」については、新聞社の報道部長になった回答者は、「14～15 人ほど同窓生が社内にいて、みなよく頑張っていた。後輩には編集局長になったものもいて、熱意のある者が多かった」、「堅実」（多数）、「真面目、コツコツ型」、「バイタリティ」、「現実重視の協調型」、「中国関係に強み」などのアクティブな評価の一方、「愛大の PR 不足のため, 大企業で出世した先輩たちは愛大での恩恵にふれてない」、「愛大卒をこれまで多く採用してきたが、近年魅力ある人物が少なくなってきた」、「力はあるのに卑下している」、などの評価も回答されている。色々個人差の見解ではあるが、傾向はある。

E.　愛知大学卒業生として

（1）愛知大学設立趣意書とのかかわり

1963 年

「生き方の根本理念は忘れなかったように思う」。「十分意識したわけではないが、学ぶ環境に満足していた」。「地味、いいカッコしないところがよい」。

1964 年

「個人の友人関係を重視した」。「地域社会への貢献が身についた」。「中国語に関心を持ちいくつかを翻訳（後掲）」（1964 年）。「卒業後、設立要旨を一貫して考え続け、自分の生き方の指針であった」。「教材会社に勤め、子供たちの知を育成、地域社会文化への貢献も」。「異文化共生を予見したもので、愛大のあるべき姿が示されている」。「グローバル社会においてはぴったりだ」

1966 年

「「世界平和」、「知を愛する」、常に気にかけている」。「人生を全うに生きること」。「「人類のたぐいなき知を愛する者よ」に建学の精神の尊さを感じていた」。

（2）書院の認知

その認知状況は表４－E-2 に示す。ほとんどは多少の差はあれ知っていることがわかる。その具体的認知は以下の通り。

1963 年

「新聞雑誌から」、「歴史書から」、「先輩から」、「本間学長から」。

1964 年

「同窓会、会報から」、「学校案内」、「教授や先輩から」、「書院卒業生」、「學校沿革史」、「中国語の履修から」、「入学前に知人から」。

1965 年

「先輩、大学文書から」、「先輩から」、「書院卒生から」。

1966 年

「書院から来た先生から」、「愛大誕生に興味関心」、「在学中、先生や先輩からいつも」、「大学の講義やイベントで」。

（3）愛大事件をめぐって

事件の経過などについては前述したのでここでは、これについての回答を紹介する。その認知は表４－E-3 に示す。これもほとんどは多少でも知っていることがわかる。

1963 年　「愛大の伝統的気骨に通じる」。

「本間先生の学生を思う心や不法に対する怒りに感心した」。「大学とは、、、という意味ですごいと思った」。

1964 年

「学問の自由、自治が侵されたこと。本間喜一、脇坂雄治という最高裁事務総

長と名古屋高裁長官経験者が、学生の弁護人になったことは、まさしく愛大精神そのものだと感じた」。「この事件で左翼系大学とみなされたようだが、気にしなかった。」「東京本社在職中、他大学卒業の同僚から中傷されたことがある」。

1965 年

「教職員、学生一致して学問の自由を守られたことに深く敬意を表します。特にこの国の政府の許しがたい反動政治、米国の属国化を見る時、改めて強く感じます」。「国家権力による大学の自治、学問の自由を蹂躙、権力の乱用」。「警察による思想、学問、研究の自由への介入に憤慨した」。

1966 年

「自治会の問題くらいに思っていたが、国務院試験の建設省関係の面接で、ゼミの先生のことを聞かれ、事件との関係は知らないというと、試験管は先生の家庭のことをくどく話した。不快であり、信じられなかった」。「人の命は地球より重い」。「発刊された冊子で読んだ。学生と先生の信頼の強さに心揺さぶれるところがあった」。

以上から、法学を学ぶ学生たちにとって最大の関心事であったことが伝わってくる。学生たちの愛大への信頼関係は最高であった。

（4）母校への関心

この件についてのまとめは、表４－D-4 に示す。多くの回答者が関心を持っていることがわかる。

1963 年

「ニュースが出るたびに注目」、「親子 2 代愛大生です」、「みんなで作った大学で、宗教とか金持ちが作った学校ではない」、「経済と法の両方を卒業し、自分の心の支えになっている。これをベースに第二の職場に就職し、名大大学院博士課程に入学できた」。

1964 年

「県外へも知名度を」、「母校の発展を強く願う」、「やはり大学の評価だ」、「愛大として健全な中国関係を続けてほしい」。

1965 年

「建学の精神、設立の趣旨が、今危機的状況に陥っているのではないか。それを思うにつけ、、、」、「母校であることと、他大学の活躍が最近目立って来ていること、、、」、「愛大には他大学には類を見ない創設の経緯があるから」、「自分の周りの同窓生は精一杯頑張っている。後輩も愛大精神を見つけてほしい」。

1966 年

「時代の変化もあるが、今の大学はあまりにも遠いものに感じます」。「同窓会支部で大学の現状説明を受けています」。

（5）大学情報の入手

これについての情報源は表４－E-5 に示す。その最多の情報源は「愛大新聞」と「愛大通信」、次いで「同窓生」であることがわかる。大学のホームページは少ない。回答者の高齢化のためと思われる。しかし、大学情報への期待は大きい。

1963 年

「大学の発展情報を」、「出来事や行事

を知りたい。そして新聞テレビでの発信を」、「卒業生が活躍している現状を機会あるごとに発信を。学生も卒業生も刺激を受けるでしょう」。

1964 年

「卒業生が自信を持てるようにマスコミへの PR を」、「大学の発展する様子、研究者、学生の活躍の様子を」（多数）、「先生方の社会的発言を」、「他大学に比べ情報発信が少なすぎる。その理由は何か」。

1966 年

「世界に通じる情報を」、「大学と地域社会とのつながりを」。

（６）同窓会への参加

表４－E-7 は、同窓会への参加状況についての回答である。大きくは 3 グループに分かれている。1 つは積極派、2 つは非積極派、3 つは中間派でその数は少なく、その点では積極派と非積極派の 2 グループに分かれるといえる。その理由は、「先輩も多く亡くなり、同級生も一人ずつ亡くなってゆく」（1963 年）、「かつては名古屋支部長で活躍しました」（1964 年）などが高齢化した回答者の現実であろう。問題は、そのような状況下で、後輩たちに継承されているかということである。それはこの問からはわからないが、「在学中はラグビー部で、現在も部活の会には出席している」（1965 年）、「自治 OB 会に出席」（1965 年）、「知多支部総会に時々」（1963 年）、「上海支部で後輩の活躍を見ています」（1964 年）、「同窓生との定期的交流あり」（同）など、総会や部会が継承されている事もわかる。

その「魅力」については、「大学の農林分野進出の後押しを」（1963 年）、「建学の精神を広げたい」（1966 年）、「先輩と自分の子が結婚できた」（1964 年）。併せて「今後の在り方」として、「体育系が中心となった同窓会も多いが、文科系の発信もしていきたい」（1963 年）、「地方と学校のつながりを」（1964 年）、「会合やサークル活動を増やしたい」（同）、「同窓生が気軽に集まる部屋があるといい」（1963 年）、「ホームカミングデイのような行事を年 1 度開けないか」（1965 年）。「若い人や女子を含めた「青年部会」を作れないか」（1965 年）。

（７）大学への要望

「人口減少下、焦らず魅力ある大学を」、「寄付講座も」、「公務関係が多いが企業とのつながりも」、「大学教授も含め、全国版へ」、「国際交流の強化を」、「豊橋校舎に理系学部を（数学、化学、地球物理学、地震・火山研究）」、「マスコミへのパワフルな発信を。名城に負けている（外部クリエーターの導入も）」、「知名度を上げてほしい。プレゼンスを」、「愛大はなぜ 6 大学に入らなかったのか」、「当地域の社会に役立つ学生を」。

（８）後輩に伝えたいこと

「希望を持つ」、「真面目、熱心」、「単位のためだけでなく、自分で勉強を」、「失敗があっても、志を貫け」、「就職課の活動を活発に」、「全国に伝わるレベルの活動を」、「常に視野を世界へ」、「資格の取得」、「社会的見識があり、人格的に優れた人を見つけよ（大学はチャンス多し）」、「名古屋校舎の利便性など優れた点を有効に利用し、人生に活用を」、「世界の愛知大学としての発信を」、「胸を張って社会に貢献してほしい」、「生

涯一度の学生生活を悔いのないように頑張れ」。

（９）愛大から得たもの

1963 年

「探求と好奇心」、「至誠努力」、「自分で勉強」、「多面的に物事をみる」、「継続は力」。

1964 年

「他人に対する愛情」、「悔いのない人生を送れたこと」、「戦略的思考」、「真実一路」、「学長に愛大出身者が少ないせいか、愛大愛、誇りに思っている学生の方が少ない」。

1965 年

「自由の力」、「自由の精神」、「一期一会」、「良い友人」、「楕円形は人生の縮図。中、高、大と 10 年間、ラガーマンとして活躍した」。

1966 年

「色々な先生の話を聞けたのがよかった。教育原論で「困っている子に目を向けて」が印象深い。」、「出会いは人生の宝物」、「自分の考えを持ち、流されないように」、「真に努力」、「日日是好日」「初心　無し不可忘」。

（１０）刊行物

1963 年　『諷意茶譚』(2017)、『日本今は昔はなし』(2019)、『七コロ八起』(2021)。

「NPO 法人のコーポガバナンスと組織健全性（社会関連会計、Vol.22、2010）

1964 年　古代歴史について」、『中国南通 39 年の回想』（自費出版）。」

瓊瑶『恋恋神話』、早稲田出版。

1965 年　NHK、角川の短歌大会入賞。朝日新聞にも。

（１１）在学時代の思い出

1963 年

「ワンゲルで山で道に迷い野宿したこと」、「都庁で同ゼミの中山君という努力家を見習った」、「安保闘争でよく頑張った」。

「山の家のゼミで先輩とも交流。名鉄名古屋から豊橋に行って、走ってスクールバスに乗ったこと」。

1964 年

「1 年次安保騒動、2 年次薬師岳遭難」、「薬師岳遭難事故」（多数）、「柳沢ゼミへの参加」、「2 年間、中国語を勉強したこと」、「安保反対デモと体育」。

1965 年

「名古屋車道校舎でしたが、一度だけ豊橋校舎学園祭で演劇を上演したこと」、「安保騒動に参加したこと」。

1966 年

「1 年生の語学クラスで大勢集まり、遠足に出かけたこと。ゼミで現地調査に出かけたこと。上級性の話が参考になったこと」。「愛大車道校舎 3 番教室、“高桑先生の静かなかたり”」。「1 年生の時、薬師岳遭難の大きな事故があったこと」。「自由でのびやかな中、勉学にはげむことができました」。

（１２）人生の満足度と愛大卒業生としての満足度－終わりに寄せて

最後に再度①人生をふりかえったときの満足度と②愛大卒業生としての満足度について問うた。①の回答は表４－E-11 に示し

た。それによると「まずまず満足」以上は60％以上を示し、「不満」との回答者はいない。ほぼ満足であったといえるだろう。また②の「愛知大学との関係」はやはり、ほぼ60％が関係があったとしており、一方、「無関係」とする回答が20％あり、自力による人生を切り開いたと考える卒業生たちである。全体としてみれば愛知大学で学んだことはそれなりに有効であったといえる。そして個別の今回の 70 歳代後半以降の卒業生の回答から見ると、卒業後の人生の豊かさの共通項には、卒業した学部学科を超えて、いかに大学時代に友人を得たか、お互いの人間としてのつながりを持っているかによって決まりそうだということもうかがわれた。今回の愛大卒業生アンケートから得た貴重な宝物だといえる。

表 4 系

E-2　東亜同文書院

	人数
よく知っている	7
少し知っている	9
知らない	0
よく・少し知っている	1
無回答	1

E-3　愛大事件

	人数
よく知っている	7
少し知っている	8
知らない	2
無回答	1

E-4　母校・愛知大学への関心

	人数
大変関心	7
多少関心	7
普通	2
あまり関心ない	1
無回答	1

E-5　愛知大学の情報

※複数回答あり

	人数
1. テレビ、新聞	8
2. 大学のホームページ	3
3. 「愛大通信」	7
4. さまざまな会合	3
5. 受験雑誌	0
6. 同窓生	6
7. 愛大新聞	10
8. ほか	0
無回答	1

E-7　同窓会（支部活動も）参加

	人数
はい	6
よく	0
時々	3
いいえ	8
無回答	1

E-11　人生をふりかえって

	人数
大いに満足	3
まずまず満足	8
普通	6
少し不満	0
大変不満足	0
無回答	1

E-12　満足度と愛大卒業生との関係

	人数
大いに関係	4
多少関係	6
普通	3
あまり関係ない	4
全くない	0
無回答	1

第５章　「文学部」卒業生の場合

はじめに

愛知大学文学部は 1949 年の新制大学制度への改編によって誕生した。従来の法経学部に加わることで愛知大学は人文社会学系の総合大学として発展することになった。文学部に誕生した最初の学科は社会学科で、単独の社会学科は全国の大学で初めてであった。社会学は戦前には少なく、それも数少ない哲学科の中に置かれていた。そのため、愛知大学の社会学科は京城帝大からの引揚げ教授の今日でいう文化人類学の秋葉隆教授や都市農村関係研究の鈴木栄太郎教授（当初）らが中心になって学科を構成した。「目新しい分野であったので」興味を持った入学生が集まった。また、文学科も続き、その中に国文学専攻、英文学専攻、ドイツ文学専攻、中国文学専攻、一般文学専攻（のち仏文学専攻）へと広がった。さらに史学科も国史や東洋史の各専攻が設置され、哲学科も設置された。

調査は他学部と同様に記入式のアンケート調査を行った。専攻数は多いが専攻別入学者数はこの当初の時期は少なく、また、高齢化などの影響もあり、回答者数は全体で 19 人にとどまった。

その専攻別の回答者は、社会学 7、文学 10、史学 1、哲学 1 の計 19 人で、設置の早かった社会学と文学が中心となった。

A. 生年、入学年、出身校など

（１）生年、入学年、出身校

表５－A-1 は卒業生の回答者の生年、入学年、出身校などを示した。入学者の生年は昭和 11 年から同 19 年に広がっている。入学年は昭和 35 年から同 41 年である。出身校は、表５－A-3 に示した。新制大学文学部の設置は当時としては珍しく、地元三河が最も多いとはいえ、かなり広域に広がっている。約半数が愛知県外からの入学であり、各専攻分野に高い関心があったと思われる。学費や生活費の出どころをみると、表５－A9、10 のようにまとめられる。基本的には親からの援助であるが、生活費についてはアルバイトからの補充も見られる。

（２）愛知大学の認知と志望動機

愛知大学を知った理由を見ると、表５－A-5 に示される。進学資料や、雑誌が多く、先輩、そして前身校である東亜同文書院からの歴史や細迫先生の存在、兄が東亜同文書院卒生であった（2 件）など書院関係がそれに次ぐ。そのほかはそれぞれの専攻への興味であり、学問への興味が強いことがうかがわれる。そして愛知大学への入学理由については、表５－A-6 に示した。それによると、学費の安さという経済的理由は大きい。また自宅通学の便のよさもあげられ、便宜的な面もある。その一方、いろいろなか方からの推薦、作家志望など自分の願いがかなりあり、かなり目的がはっきりして入学していることがわかる。また、60 年安保の刺激を挙げた回答もあった。

B. 学業生活と満足度

（１）学業の位置

上記についての回答者のまとめは表５－B-1 に示す。全体としては、学業中心が約 60％以上を示し、かなり、勉学専念指向の強

表５系

A-1　文学部

	S35 1960	S36 1961	S37 1962	S38 1963	S39 1964	S40 1965	S41 1966
昭和11年						1	
昭和12年	2		1				
昭和13年			1				
昭和14年			1				
昭和15年			1	2	2		
昭和16年				2			
昭和17年						1	1
昭和18年							1
昭和19年							3
昭和20年							
未回答							
計	2	0	4	4	2	2	5

A-9・10　授業料・生活費の工面

※回答者のみ集計、複数回答あり

	授業料	生活費
1. 親から	19	19
2. 親戚・縁	0	0
3. 奨学金か	2	1
4. アルバイ	6	11
5. 給料から	0	0
6. ほか	0	0
合計	27	31

A-2　出身地

昭和35～41年卒

三河	豊橋	1
	豊川	1
	田原町	1
	安城	1
	豊田	1
	小原村	1
	下山村	1
尾張	一宮	1
静岡県	浜松	3
	三ヶ日町	1
三重	桑名	1
その他	福井県	1
	長野県	1
	山口県	1
	香川県	1
	高知県	1
	鹿児島県	1
	合計	19

A-3　出身高校　昭和35～41年卒

三河	時習館	2
	豊橋商業	1
	成章	1
	岩津	1
	安城学園女子短大附属	1
名古屋	瑞陵	1
	名古屋工業	1
尾張	稲沢	1
静岡県	浜松西	1
	浜松商業	1
	浜名	1
その他	武生（福井）	1
	上田（松尾）（長野）	1
	宇部工業（山口）	1
	高松第一（香川）	1
	高岡（高知）	1
	大口（鹿児島）	1
	未回答	1
	合計	19

かったことがわかる。もちろんバイトもうまくこなし、勉学に中心をおいている。また何人かは教員免許を目指している。

興味ある分野では、「考古学で合宿調査も」。「やはりゼミがよかった」。「哲学」。「現代詩論（丸山薫）」。「社会調査で志摩国崎や湖西神坐地区調査」。「社会学」（複数）。「国文学以外に図書館学、中国哲学も学べたこと」。「英語学と独文法」。「社会科学と哲学」。「ロシア語」、などの勉学した対象があげられており（表５－B-2）、文学部学生の勉学好きが伝わってくる。

（２）印象に残った先生たち

その回答をまとめたのが表５－B-3 である。「牧野先生宅に泊まり込んだし、スポーツも、川越、島本先生は父や兄のようにやさしかった」。「中田実先生からは個別指導を受け開眼」。「丸山薫先生は授業内容がよかった」。「久曾神、津之地先生も」。「歌川先生はいつも明るく指導」。「胡麻本先生にはロシア語４年間、就職もお世話になった」。「学究派の久曽神、毅然派の長澤、泰然の若山の各先生」。「英語の池田、独語の板倉両先生は、思いやりと教え方に熱意」。「英文学の荒川、池田教授」。「同郷の細迫教授から論理、哲学、マル経までご指導いただき、卒業後も続いた」。「愛知大学を開学した本間喜一先生は、心に残る」。ほか。

（３）ゼミ

ゼミについては、表５-B-4 に示した。回答によれば、「久曽神先生は万葉集研究と古今和歌集研究」、「史学科では冬にはストーブを囲んで授業」。「哲学科ゼミででは田辺重三先生の「ライプニッツの単子論」、湯本先生には「ハイデッカーの存在と時間」、「荒川竜彦先生の「エリオット論」」、「社会学科では当初少人数ゆえ、先生単位のゼミという形をとらず、「ゼミは一つで自分が選んだテーマの研究発表と先生方からの助言が中心であった」という。

（４）卒論

日本史では、「近代地主経営の研究」で、元庄屋宅の古文書から小作料の変遷調査。歌川先生には自宅へ泊まっていただき、元庄屋宅へ出かけ指導を受けた。卒論は文学会賞を受けた。社会学科では、「現代宗教の社会学的分析」で新興宗教分析。「学級集団の社会心理学的人間関係」。「地方都市の人間関係」。国文学では「山東京伝の洒落本研究―江戸文学の粋―」。「方言の研究」。「二葉亭四迷論－くたばってしめえー、厭世観」。英文学では、「スタインバックの「怒りのぶどう」研究」。「ロバート・ルイ・　ステイ―ブイワンについて」。「イギリス人作家、ジョージ・キングの研究」。「英語の諺の文法面からの研究」。中国文学では、「毛沢東「文芸講話」の研究」。哲学では、「唯物論の哲学で美学は語れるか、現代美学の「疎外と芸術」。「ライプニッツにおける動的多元論とその形而上学的価値」。結構、卒論は記憶のなかに生きていたようで、今日においても興味深い。いずれも各学問の基礎構築にかかわっていたからであろう。

（５）先生との交流

「何かにつけて歌川先生とは奥様も一緒に飲み会と会食あり」。「ハイキングや学園祭には先生たちも参加」。「牧野先生とは飲み会あり。日本社会学会へも仲間と参加」。

「若いころは英文学研究会に参加」。「諸先生と学生で茶話会、酒席、旅行へ」。「生活指導、英文法指導など色々な助言をいただいた」。「先生方はフレンドリーでスポーツや飲み会、先生宅での宿泊も」。社会学科は校舎内とその南側の庭でレクレーション」。「牧野元学長はゼミと一緒にスポーツも」。「東京の古本屋から本をとりよせることをご教示いただいた」。

（6）図書館利用

大きく 2 派にわかれる。よく利用した派は 8 人、「毎日通い、政、経、社、文の各分野で 1000 冊ほどの本に目を通し、記録した」。「文献研究に利用」。「卒論の資料集めに」。「空き時間に利用」。「よく利用した」。「専門書と新聞」。「大事な本は本屋で、関係本は市内の古本屋で求めた」。「読書好きだったのでよく借りた」。一方、利用しない派は、3 人の回答。全体としては、文学部だけあって他学部よりもよく利用していたことがわかる。

（7）学業の満足度

以上のような環境状況の中で育った卒業生は、学業面についてはどのような満足度を示したのであろうか。表５－B-8 はそれを示した。それによると、「大いに満足」と「まずまず満足」で 90%を示し、満足度は極めて高かったことがわかる。その理由を見ると、その多くが勉学にかかわるきわめて「自由」な環境を上げている。「自由が我々を守ってくれた」。「勉学に専念でき、自分でテーマを見つけることができ」、「他県も踏まえ友人たちと知り合え、そこからも多くの刺激を受けた」。「英米文学ではすべての学生と交流ができた」。そして「学問とは何かを知りえた」。そのようなことが「当時の苦しい生活下でそれなりに生活できた」、などである。

（8）人生への影響

以上の学業がその後の人生に与えた影響の大きさを示したのが、表５－B-8 である。これも「まずまず以上」の割合はほぼ 80%であり、高い比率を示している。

その理由については、「社会へ出て取得した資格については、「哲学」を学んだことによる「根本の追求」ができていたからだ」。「レポートや論文の書き方など、社会へ出てから大いに役立った」。「ものの言いかた、行動のとり方を学ばせてもらった」。「卒業後もロシア語を毎日 2～3 時間とりくんでいる」。「大学依頼の友人との付き合いが継続している」。「印刷屋に勤め、皆から認められた」。そして「社会科学、哲学、歴史をまなび、人生観、世界観が統一的に理解できたので、自信をもって人生を歩め、教育にかかわる住民運動、視聴覚教材の政策、700 回以上の講演」という人生への最高の影響を受けたといえる回答も見られた。そのほかの多くの影響を受けたという回答は、教職に就職したことによる影響の実感である。その基礎、下地になったのは愛大での学業であったとし、教職に就職した卒業生が多いことから気づく実感である。そして、今なお教職現場で頑張っているという回答もいくつか見られる。

表 5 系

B-1　学業の位置

	人数
学業が主	12
どちらかといえば学業	0
学業はまずまず	6
学業は従	0
無回答	1

B-4　ゼミ

	人数
田辺重三（ライプニッツの単子論）	1
湯本和男（ハイデッカーの存在と時間）	
川越ほか（地域社会学）	1
歌川学（日本史）	1
久曽神昇（万葉集研究、古今和歌）	2
荒川龍彦（エリオット論）	1
池田正（英語学）	1
鈴木拓郎（中国語）	1

B-8　在学中の満足度

	人数
大いに満足	8
まずまず満足	9
まあまあ	2
あまり満足していない	0

B-9　学業の成果が人生に与えた影響

	人数
大いに影響	7
まずまず	8
まあまあ	1
あまり	3

B-2　興味　※複数回答

	人数
ゼミ（久曽神）	1

社会調査	3
社会学科の授業	2
現代詩論（丸山）	2
現代文学論（丸山）	1
久曽神先生の授業	1
図書館学（長澤）	1
中国哲学（若山）	1
考古学	1
史学科の授業	1
英語学（英文法）	1
ドイツ語（独文法）	1
中国語	1
ロシア語	1

哲学（一般教養）	1
倫理学（細迫）	1

B-3　印象に残った先生　※複数回答

	人数
牧野由朗	5
池田正	3
川越淳二	3
久曽神昇	3
島本彦次郎	2
丸山薫	2
阿関吉男	1
荒川龍彦	1
板倉鞆音	1
今泉潤太郎	1
井森（甲南大学）	1
歌川学	1
尾坂徳司	1
胡麻本蔦一	1
酒井栄吉	1
鈴木拓郎	1
津之地直一	1
長澤規矩也	1
細迫朝夫	1
本間喜一	1
中田實	1
若山尚	1

C. クラブ、サークル活動

次はクラブ、サークル活動である。表５－C-2 は、それへの参加状況を示した。それによると、積極的な参加者は 7 名程度で、無回答も含めると積極的でない方が多い。具体的な参加クラブ、サークルは表５－C-1 に示した。スポーツ系よりも文科系の方が多く、その種類も多い。

その内容をみると、スポーツ系では、「4 年間仲間と楽しく過ごせた（剣道）」。「1 回出場したが（空手）、初歩から教えてもらい試合にも出た（卓球）」。

文化系では、「古文書の解読。大学院の森さんの指導を受ける。徹夜でガリを切り、自分たちで出版」（史学研究会）、「ハングル会話」（朝鮮研究会）、授業前有志の勉強会（中国語研究会）。「語劇公演」（中国語分研究会）。「独立採算制の広告取り、他大学との交流、全学連大会取材（新聞部）、「中田島砂丘、出雲崎写真個展」（写真研究会）及び「男声合唱団第 1 回、第 2 回定期演奏会」。「文学部では、これらのクラブに代わるのは研究、卒論のゼミナールだったといえます」。

その効果は、「現職中に中学生の部活指導で、九州大会、全国大会へ数回出場」（剣道）、「友情交流がつづいた。学年学部を超え、女子短大ともチームを組み楽しかった」（卓球部）。「文章の書き方が速くなり、広告取で度胸がついた」（新聞部）。多くの同窓生、友人を得た。教師になってその経験が役立った」。（写真、男声合唱）。「色々な分野の学生と知り合った」（多数）。

人生への影響は、「人間交流が深まった。生涯の友人を得、仲間意識が続いている」が多い、また、日本の政治、経済に一貫して関心」。「写真、映画製作はプロ並み、と評価され、音楽では高知交響楽団の事務局を 15 年務めた。また学校では、生徒を指導してスライド 3 本、8 ミリ映画 5 本、高知県教育委員会企画で 16 ミリ映画 2 本、高知市教育委員会企画のビデオ 7 本の計 17 本製作した」。「竹を割ったような性格になることを目指した」。「ガリ版経験はその後の学校で大いに役立った」。「現在も地域の仲間たちと卓球を楽しみ、健康つくりに役立てている」。

D. 就職と人生

就職状況の時代的背景については、他の学部学科などで述べており、ここではそれを省き、就職関連の実態とその後の人生との関係についてみてみる。

まず、アンケートの回答から見てみる。表５－D-1 は「全体として卒業時の就職活動のレベル」を見るとかなりばらつきがあり、全体としてはあまり就職活動に積極的ではない。これは、前述したように、この時期の他学部でも同様な傾向があり、表５－D-6 や表５－D-2 に示すように、就職環境も個人個人の問題となり、大学の就職課のウェイトは低く、親や知人などのコネクションの時代であったことと関係する。それが就職の難易度にばらつきをもたらしていたといえる。しかし、表５－D-4 によれば、そのような環境の中でもほぼ希望した分野へ就職している。一般試験でのベビーブーム化や高校急増期の中での教員や公務員への就職希望とそこでの就職確保が見られたことも、この結果に影響しているものと思われる。無回答が 3 人いるが、「意に反した就職」は 1 人だけである。

その就職先を示したのが」表５の D-5、8、9 で、うち D-5 が卒業時の就職先である。

表 5 系

C-2　　クラブ・サークル活動の参加

	人数
よく参加した	6
まずまず	1
あまり参加しなかった	3
無回答	9

C-4　　クラブ・サークル活動の影響

	人数
大いにあった	5
まずまず	3
まあまあ	0
あまりなかった	2
無回答	9

C-1　　参加していたクラブ・サークル名

※複数回答あり

	人数
学生自治会	1
新聞会	1

空手部	1
剣道部	1

卓球部	1

自動車部	1

写真研究会	1
演劇部	1
男声合唱団	1

史学研究会	1
安保問題研究会	1
朝鮮研究会	1
中国語研究会	1
中国語文研究会	1

それによると、回答者の半分は教職に就職しており、文学部らしさが出ている。就職先も出身県である九州、四国、長野など遠隔地も見られ、当時の文学部が全国型であったことの表れである。残る半分は企業で、公務員も 1 人いる。ほとんどの企業は地元東海地方であり、地元出身者の就職先である。

うち D-8 は転職者の就職先で、これも教員と企業に二分される。またうち D-9 は退職後の再就職先である。これも教員と企業教員とに分かれる。教員は異動もあるが、定年後もほぼ教職に連動し、企業は定年後就職は半減している。

このような就職過程で出身校愛大への意識はどうであったかという点である。それについて、「私の母校は三流の私立工業高校でしたから、生徒たちは激しい劣等感を持っていたので、愛大での体験を語り、進学意欲を高めた」という教育効果への愛大体験の価値を評価したケースの紹介、「愛大が名門校とは言えなかったので、その分愛大の存在を意識した」とか、「職場の上司が先輩だった」、「企業に先輩がいた」り、またある職場は「愛大卒生がトップで、愛大卒の組織もあり、組織間の連携もスムーズだった」として、それぞれに気にしていたようすがわかる。遠隔地でも地元の名簿に何人か先輩がいた」かは関心を持ったが、どの県に何人の先輩がいるかをチェックするところまではいってなかった。

また、各職場での愛大生の評価については、「地元大学ゆえの連帯感があった」、「人間性が豊か」、「自由を愛する卒業生が多かった」。「それぞれの分野で活躍していた」。などの回答のほか、「比較すること自体考えていなかっでたのでわからない」（複数）。「本人次第」という回答も。

では職場や社会人の中での「愛大卒業生の特徴」はあるのかについての回答は、「同窓生を大切にし、交流が続く」、「おもねらない」、「出身校を誇ったりしない」、「少なくとも私の仲間たちは、フレンドリーで、群れやすく、今でもよい交流をしている」。また、「自分の考え方を持っている卒業生が多い」、「自主自立の精神を持つ卒業生たちだと感じている」。「市議会議員として活躍する卒業生も」、との回答から、長い人生から得た愛大感が伝わってくる。一方、「わからない」、「特にない」とする二人の回答もあった。このあたりの感想については、愛大卒生以外の社会人の人たちが、愛大卒生をきちんと認識して、その存在感を多くの社会人が共有しているかという問題の広がりと、例えば愛大というような特定の学校を卒業した卒業生が、その大学にカラーがあって、それゆえのカラーに染まるのかどうかという基本的な問題の解明にもつながることになる。

E. 愛知大学卒業生として（文学部）

（1）愛知大学設立趣意書とのかかわり

「自由受難の鐘は、岡崎支部新聞のタイトル背景で、大切な言葉だと思っている」、「趣意書の精神に基づき、学生時代同様まじめに教職を全うした」（以上 1960）、「根幹として常にある」、「小岩井学長宅で安保の勉強会。先生の葬儀には、数多くの学生が参加」、「理念は自然に身に付き、現在に至っている」、「意識せず」（以上 1962）、「兄弟や甥姪もみな愛大生だ」、「新しい時代の知識人としての自覚」、社会の在り方や正義の状況については、大学時代に培った多くの情報

表 5 系

D-1　卒業時の就職活動

	人数
かなり積極的	3
やや積極的	2
普通に	6
あまりしない	5
全くしない	2
無回答	1

D-2　卒業時の就職環境

	人数
かなり厳しい	5
やや厳しい	0
普通	7
あまり厳しくない	2
全く厳しくない	4
無回答	1

D-4　希望した分野への就職

	人数
はい	7
なんとか	6
意識せず	2
意に反して	1
無回答	3

D-6　就職でお世話になった人

	人数
大学就職課	1
愛大卒業生	0
知人、友人	3
自力	5
就職先	0
ほか（親、親の友人、先生）	5
なし	2
無回答	3

D-7　愛大卒業生の経歴を意識

	人数
はい	5
少し	4
特になし	7
無回答	3

表 5 系

D-5 **就職先（Ⅰ）**

名称	所在地	（人）
義傘	名古屋市	1
ナウカ	名古屋市	1
西山金物店	浜松市	1
日本化工機	四日市市	1
福井漁網	豊橋市	1
文溪堂	岐阜県	1

岡崎市役所	岡崎市	1

就職先（Ⅱ）

名称	所在地	（人）
名古屋工業高校	名古屋市	1
静岡県教育委員会	静岡市	1
浜名中学校	浜松市	1
誠心高校	浜松市	1
長野県立高校	長野県	1
高知県立高校	高知県	1
佐多町立佐多中学校	鹿児島県	1

D-8 **転職**　　（各1）

名称	業種	所在地
宇奈月グランドホテル	渉外営業	富山県
全国商工団体連合会	中小企業団体	名古屋市
東海共石運輸	トラック輸送	豊橋市
日建産業	商社、総務部人事課	大阪市
ミウラ化学	工事会社、電力部	山口県

桜ヶ丘高等学校	教員	豊橋市
三ヶ日高校	教員	三ヶ日町
学校法人桜花学園	大学事務職員	豊明市
愛知工業専門学校	英会話講師	春日井市
朝日カルチャーセンター	英会話講師	名古屋市

D-9 **再就職**　　（各1）

名称	業種	所在地
末長工業	送電工事	山口県
中野鉄筋	土木	長久手市

岡崎市営施設管理協会	理事長	岡崎市

東海学園	教職センター	名古屋市
静岡県立高校	常勤講師	森町
誠心高校	講師（1年）	浜松市
長野県外語カレッジ	校長	上田市
高知大学　「人権・同和教育論」	高知市	高知県

からと自分の判断で」（以上 1963）、「結構よい。素晴らしい歴史によるもの」（1964）、「そういう生きかたをしてほしいと先生たちから卒業時に。そう生きてきた」（1965）、「大いに関係」、「私自身「心理の探究」と「地域社会文化への貢」でした。そこで、高校進学率の低い地域で、高校新設運動と文化活動を実践した」、「社員教育で 自由な精神を心掛けてきた」（以上 1966）。

（２）書院の認知について

「寮の先輩から」（複数）、「先生方の話」、「全国から選抜された難関大学だと先輩から」（1962）、「入学時」、「愛大パンフから」、「大学案内、大学新聞、卒業生の談話から」（1964）、「国民学校初等科のころから、東亜同文書院大学が、東大など帝国大学級と双璧を成していたことを親からも教えられていた。また」県費生で県から 1 人余りしか入学できないことも承知していた。終戦直後 GHQ からの関係もあって大学名をつかえなかったことも」、「先生方や先輩から」（1965）、「大学の発行する冊子から」、「受験勉強で」、「先生から」、「愛大設立認可は高知県出身の吉田茂総理がかかわったと知りました、」「ゼミで陸軍跡地に設立されたこと、愛知は知を愛すの意味だと」（以上 1966）。

（３）愛大事件への認知

「関係者に地元人も」（1960）、「記入するスペース狭すぎる」、「北門での事件のいきさつを先輩から」、「学長以下諸先輩が愛大の理念を理解していたと思う」（1962）、「大変すばらしい学長で誇りに思っている」、「権力による事実の歪曲、自由受難」（1963）、「大学にはそれぞれ事情があるでしょうから問題視していない」（1964）、「大学自治は尊重されるべき。社会環境の変化の中で、自治本来の理念を再認識する現状にきている」。「新聞界に入部した後、現場検証を取材し、権力の怖さを知りました」。（1965）、「困難なことによく対応してくださった」。「愛大事件は唐代ポポロ事件とともに高校『政治経済史料』に紹介された。これ以降、1969 年の東大事件までは「大学の自治」が重んじられたと考えます」（1966）。

（４）母校への関心

「マスコミにグッドなニュースで記事が出ることを望んでいる」。「悪くもなく良くもない自分を育ててくれた」。「出身校として誇りを持ちたい。ただし不都合な出来事には気になる」。「最終学歴の母校であるから」（多数）。「地元の大学だから」。「小学校の友人が愛大教授になっている」。「哲学科のゼミ室でかつての自分の卒論を探そうとしたら、雑然としていて愕然とした」。「良い先生や友人と巡り合えた」。「自分の生き方に丁寧に対応してくれた」。「愛大男声、女声合唱団に開催で、自分の『中田島砂丘写真集』が認められるようになった」。関心度をまとめた表５－E-4 をみてもわかるように、全体に母校愛大への強い思いと愛情が伝わってくる。

（５）愛大情報の入手

これについては、表５－E-5 に示した。それによると入手先は「愛大新聞」と「愛大通信」が多く、一方、高齢化に伴うためか大学のホームページは少ない点で、他の学部と同様な傾向にある。

それらの情報に対して、「期待する情報」

としては、「学生や教授の活躍をマスコミから発信を」。「しっかりした存在感あるソースを」「各分野で活躍人たちの紹介を」。「中国の政治経済文化の情報を」。「今日置かれている状況とそれへの対応情報を」。「インターネットに大学の新旧情報を載せてほしい」、などがあげられ、一方、「「同窓会報」の店の PR を筆頭に一律化された凡庸な内容に辟易した」との感想も寄せられた。

（6）同窓会への参加状況

表５－E-7 はそれをまとめて示した。熱心な方 3 人と時々参加の 3 人を加えて 6 人、30％の参加率である。当時の文学部卒業生は同窓会に距離があったようだ。その理由は「高齢化」のほかに、「通知が来ない」、「途中から来なくなった」が目立つ。文学部の卒業生は全国にも広がっており、「大学から来会してほしい」、「数年に 1 度でいいから」などの要望は、他学部学科での要望と同じである。それだけ大学や各支部の活動状況などの情報を渇望していることがわかる。なんらかの工夫が必要であろう。

一方、社会学科の卒業生は同科の同窓会には参加していることから、同窓会とのネットワークの工夫も必要であろう。英文学会や国文学会についても同様である。

また、同窓会に出席して先輩や後輩に会える楽しみも多いという。例えば、大先輩の元宇部市収入役で、東亜同文書院卒の時山氏とは知己の関係になったとも。

（7）大学への要望

大学にはかなり関心があるだけに、大学への要望も多い。特に「良い方向に発展している」、「よく頑張っている。それを地元の問題解決に生かしてほしい」、という要望意見もある一方、「在学当時の愛大は親中国大学のトップだったのに、最近は他の大学の後塵を拝していないか」。「著名な教授がいないのではないか」。「偏差値が低下し、二流三流大学になっていないか」。「理系学部も増設した方がよいのでは」。「前述した哲学の学生ゼミ室で卒論が雑然と放置されていることは、多面的欠如であり、最高学府が疑われるのでは」。「地方にも大学関係の情報を」、など、大学への心配が多く寄せられており、ほかの学部からの心配と共通する。それを裏返せば、卒業生からの心を込めた大学への強い要望となっている。それをどう受け止めるかである。

（8）後輩たちへの伝言

「自分たちの史学科ができたころは、先生がたと楽しくやれたが、今はそういうゆとりがあるか心配している」。「若気をいつまでも。年齢で年を取るな」。「自分たちのころは、全国から学生が集まってきた。寮という安心できる場の存在が大きかったと思う」。「母校に誇りを、それなりの歴史がある」（複数）。「自由受難」。「最近の愛大生の事件。けしからん、畜生、冒涜の限りだ」。「自分に忠実で自由であれ」。「現実とその問題解決の実力を」。「若い時に哲学を」。

以上、この卒業生からの後輩への言葉である。後輩思いの先輩にあふれている。後輩としてはうれしいことであろう。ただし、直近で現役生が起した事件は、卒業生を仰天させるほどのショックを与えた。それを思いきり表現した卒業生もいるが、多くはそれを包み込んだ表現で配慮したように思われる。

（９）愛大から得たもの

「先生たちとの楽しい生活。しかし、今はそれがないと」。「定年後 20 年、愛大卒でよかったと」。「情けは他のためならず」。「さまざまな分野を学べた」。「中国語」。「自分の理性と感性歳をみがいて真理、真実を知る努力を続ける」。「大学は建物ではない」。「なにごとも努力」。「英語だけでなくドイツ語も学び、教員免許取得」。「今 84 歳、戦時中、終戦、戦後の貧困の名状上し難い辛酸を経験した私は、この紙に尽くせません。それゆえ愛大だけに絞って書けません」。「友人たち」、「自由であれ、それにはまず生活の安定を」。「自由に考え、自由の行動、しかし、慎重に」。「大学は、学生が自由に学ぶ環境を大切にしてほしい」。「大学記念館のパンフを読み、その歴史の重み、そこで学んだこと、多くの人との出会い、私の人格を形成してくれた学生時代から 60 年近くたった今、深い感動を覚えます」。

（１０）出版物

「古文書研究会での例会史料の発行」。

『英語解釈』、学書房。

「人権教育、同和教育に関連する機関誌、雑誌、新聞記事多数、高知大学講義資料 3500 部以上発行」。

（１１）大学での思い出

1960 年

「歌川先生がなくなられた時、「白馬の山に逝きし師の優しき笑顔今日も忘れず」と詠みました」。「学生アルバイトで映画「二等兵物語」の愛大校舎でのエキストラに何度もでました」。

1961 年

「1960 年安保の戦いの日々」。

1963 年

「薬師岳遭難、本間学長「大学はつぶれても学生を救え」（複数）。

「鈴木択郎先生、張沢禄先生のお二人から受けた中国文学購読講義」。

「酷暑と零下の教室」。「第 1 次安保闘争」。

1964 年

「良い友達に会えたこと」。

1965 年

「山岳遭難。友人 2 人がなくなった」

1966 年

「志摩漁村社会調査への参加したこと」。「授業、合宿などすべてが今の自分を作った」。

表 5 系

E-2　東亜同文書院

	人数
よく知っている	8
少し知っている	8
知らない	3

E-3　愛大事件

	人数
よく知っている	6
少し知っている	10
知らない	3

E-4　母校・愛知大学への関心

	人数
大変関心	10
多少関心	7
普通	2
あまり関心ない	0

E-5　愛知大学の情報

※複数回答あり

	人数
1. テレビ、新聞	4
2. 大学のホームページ	2
3. 「愛大通信」	8
4. さまざまな会合	0
5. 受験雑誌	2
6. 同窓生	4
7. 愛大新聞	13
8. ほか（記念センター）	1

E-7　同窓会（支部活動も）参加

	人数
はい	3
よく	0
時々	3
いいえ	11
無回答	2

E-11　人生をふりかえって

	人数
大いに満足	9
まずまず満足	7
普通	2
少し不満	0
大変不満足	1

E-12　満足度と愛大卒業生との関係

	人数
大いに関係	3
多少関係	5
普通	4
あまり関係ない	3
全くない	3
無回答	1

第 6 章　「愛知大学大学院生・専攻生」卒業生の場合

はじめに

愛知大学の大学院は、愛知大学が旧制大学としてスタートした学部が 1949 年に新制学部へされると合わせて、旧制の研究中心から、カリキュラムを持った教育制度として、1950 年に大学院設置基準が設けられ、アメリカ型の修士（2 年）、博士（5 年）の両方課程が新制大学院として設けられることになった。愛大では 1952 年に豊橋校舎に大学院設置を決め、翌 1953 年に大学院修士課程法学研究科公法学専攻と経済学研究科経済学専攻が設けられた。定員は両修士課程で 80 名であった。1957 年には私法学研究科も定員 30 名が設置され、のちには経営学研究科、さらには博士課程の設置、そしてその後には文学研究科（日本文化、欧米文化、地域社会システム各研究科）、中国研究科、の修士、続いて博士の両課程も設置された。一方、文学部の国文科には専攻科が置かれ、のちの日本文化研究科へ展開した。

特に当初の法経の大学院は、すでに学部レベルで優れた研究者がそろっており、スムーズに設置された。そして早くから学内卒の研究生を中心に院生教育が行われ、やがて本学出身の大学教員が次々と本学のみならず、他の大学の教員としても誕生し、各大学で活躍した。しかし、その時期の大学教員は、今日そのほとんどが定年を終えて第一線を退き、あるいは故人になられたりしている。いわば愛大大学院第一世代の法経系大学院卒の教員は、ほとんどその姿を消しており、残念ながら、今回のアンケート調査の対象にはならなかった。これも 10 年調査の実施が遅かったためである。その結果、残念ながら愛大のその後の最盛期にあたった年代で第一線の大学などの教育や実務に当たった愛大大学院修了の先生たちのアンケートによる証言による軌跡は追えなくなってしまったのである。そのような状況を知ったうえで、以下、みていく。

A. 生年、入学年、出身校など

そこで今回は、いわば第 2 世代の愛大大学院卒の方々が対象になったが、回答数は多くない。

（1）生年、入学年、出身校

表 6 －A-1 は生年（縦軸）と入学年（横軸）で回答者を示した。生年は昭和 7 年から昭和 11 年。入学は昭和 32 年から同 38 年、卒業は昭和 34 年から昭和 40 年の計 4 人である。専攻は大学院経済学 1 人、大学院法学 1 人。あと 2 人は文学専攻科生である。出身大学は表 6 －A-3 に示す。うち 2 人は愛大卒で、いずれも大学院卒。あとの二人は愛知学芸大学卒である。授業料は文学専攻生は就職先の給料からである。

愛大の認知は、愛大卒生は当然だが、愛知学芸大生は二人とも同大の教授からの紹介による。

入学理由は法学院生は「当時法学系の教授は中部地方で最高であったゆえ」、また経済学院生は「経済学、」「財政学」の研究のため」。

B. 学業生活

「勉学理由」は、院生はもっと勉強時間をとりたい」。専攻生は「日本上代文学を」「久曽神学長の新撰万葉集を学びたい」。

「指導教授」は、経済院生は、「小幡教授（学部以来）」、法学院生は「広い視点の黒木法社会学」で、それぞれゼミも同教授指導で、目的もはっきりしていた。

「卒論」は、院生は「婚約に関する研究」、専攻生は「万葉集の語法」、「新撰万葉集の研究」、「研究分野」は法学院生は、この後さらに名城大学大学院で経営学を学び、研究し、「税理士事務所を今日まで開設」、専攻生は「江戸国学者の万葉集研究」、同論文発表や図書刊行。各人は美夫君志会学会、日本児童文学会、日本私法学会、日本経営学会へ所属。

「満足度」については、専攻生は「教員の仕事と両立、恩師の指導のおかげ」、法学院生は「父を亡くした後、働き、そのたくわえで学べたのがうれしい」、経済学院生は「少人数教育に満足」。

「人生への影響」は、専攻生は著書を出版。大学の授業担当、卒業後も勉強ができた」。

C. クラブ、サークル活動

それぞれ学業と仕事があり、できなかった。

D. 就職活動

専攻生はすでに就職中。法学院生は、すでに学業で時間をとっており、一般の就職はできないとあきらめていた。しかし、時期的に女子の短大指向が強まってきたので女子短大の就職を目指した。

就職先は、専攻生の 1 人は愛知淑徳大学講師へ。法学院生は、享栄商業高校教諭、後名古屋文理大へ。経済学院生は愛知県立碧南高校へ、のち再就職も。

「愛大の評価」は、「誇りに思っています」、「地味な生き方だ」。

E. 愛大卒業生として

（1）設立趣意書について

専攻生は「2 年間非常に有意義でした」、「大学の授業担当で大変大きな力をもらいました」。経済院生は「自由の尊重」に。

（2）書院について

専攻生は「卒業生先輩から」、「恩師の話と文献から」存在を知った。

法学院生は「在学中に知っていた」。

（3）愛大事件

無記

（4）愛大への関心

専攻生は、「大変お世話になった」、「私の卒業は文学部で」と。

（5）同窓会

専攻生の同窓会のことであろうか、「前後の同窓生が死去し、欠けている。専攻科が 2 年では短い」。

「会報などで大学の様子、先生方のようすを知らせてほしい」。

（6）大学への要望

「発展していて素晴らしい」。「もう少し有名教授がいてもいいかな。受験生にも身近に感じられる」。

（7）後輩へ

「誇りをもって堂々と学んでください」。

（8）愛大から得たもの

専攻生は「学問の楽しさと厳しさなどを先生から教えていただいた」。「学問のすばらしさを」。

院生は「地道に生き抜く」。「人生には良いめぐり逢い＝幸運が必要だ」。

（９）刊行物

専攻生は、『加茂真淵門流の万葉集研究』、万葉書房、平成 26 年。

『「少年之玉」研究』、『日本児童文学論』ほか多数。

（１０）在学時の思い出

専攻生は「定時制勤務で入学した私を、先生方が非常に良くして下さったのが印象深いです」。「学問の楽しさ、深さを教わりました。感謝しています」。

院生は「愛大学部時代に助教授前田耕造先生に親見の御指導をいただきました。感謝しています」。

おわりに

以上、回答をよせてくれたのは、わずか 4 人であったが、専攻生、院生とも研究に強い志を持ち、懸命に学び、研究したことがわかる。1049 年、新制大学への改編時に誕生した文学部には、著名な教授たちが旧制大学の講座制そのままに次々と各専攻（専修）を開設したが、新制大学院制度下では教授枠の数の規定が厳しく、各専攻に大学院を設けることは困難であった。しかし、学生たちからのもっと学びたいという要求の生まれてくる中で、久曽神教授ほか著名な教授がそろっていた国文学科では、国文学専攻を開設し、専攻科として学生を募集した。ほかの大学にはこのような受け皿はなく、この国文学専攻科は人気となり、他大学の卒業生も含め、東海地方にその名を広め、実質大学院の代わりを務めた。高校国語教員一級も取れたため、修了生の多くは教員になったケースが多い。

なお、大学院が既存の法学、経済学両研究科だけでなく、文学研究科（日本文化、欧米文化、地域社会システム）。中国研究科へ拡充して全学に張り巡らされるのは 1990 年代からである。

なお、大学院のアンケートの回答分の集計部分は参考表とし示した。

表 6 系

A-1　大学院

	S34 1959	S35 1960	S36 1961	S37 1962	S38 1963	S39 1964	S40 1965	S41 1966
昭和7年	1							
昭和8年			1					
昭和9年								
昭和10年					1			
昭和11年							1	
未回答								
計	1	0	1	0	1	0	1	0

A-2　出身地

昭和34～41年卒

三河	碧南	1
尾張	名古屋市	3
	合計	4

A-3　出身大学

昭和34～41年卒

愛知	2
愛知学芸大学	2
合計	4

A-5　本学を知った理由

※回答者のみ集計

	人数
学部教員	2

A-7　入学理由

※回答者のみ集計

	人数
研究	1
優れた教員	1
定時制高校の勤務になったため	1

A-9・10　授業料・生活費の工面

※回答者のみ集計、複数回答あり

	授業料	生活費
1. 親から	1	
2. 親戚・縁者から		
3. 奨学金から		
4. アルバイトから	2	1
5. 給料から		3
6. ほか	1	
合計	4	4

表 6 系

B-2　興味

	人数
民法	1
財政学	1
日本上代文学	1
久曽神先生の授業	1

B-3　印象に残った先生　※複数回答

	人数
久曽神昇	2
津之地直一	1
小幡清金	1
黒木三郎	1

B-8　学会報告

	人数
積極的	1
不通	2
あまり	1

B-4　ゼミ

	人数
小幡（財政学）	1
久曽神（万葉集）	1
黒木（婚姻法）	1

C-1　参加していたクラブ・サークル名

回答なし

C-2　クラブ・サークル活動の参加

	人数
よく参加した	
まずまず	
あまり参加しなかった	2
無回答	2

C-4　クラブ・サークル活動の影響

	人数
大いにあった	
まずまず	
まあまあ	
あまりなかった	
無回答	4

表 6 系

D-1　卒業時の就職活動

	人数
かなり積極的	
やや積極的	
普通に	
あまりしない	2
全くしない	2
無回答	

D-2　卒業時の就職環境

	人数
かなり厳しい	
やや厳しい	1
普通	2
あまり厳しくない	
全く厳しくない	
無回答	1

D-4　希望した分野への就職

	人数
はい	1
なんとか	
意識せず	
意に反して	1
無回答	2

D-6　就職でお世話になった人

	人数
指導教授	1
大学就職課	1
愛大卒業生	
知人、友人	
自力	1
就職先	
ほか	
無回答	1

D-7　愛大卒業生の経歴を意識

	人数
はい	2
少し	
特になし	1
無回答	1

表 6 系

D-5

就職先　　（各1）

名称	所在地
愛知淑徳大学	長久手市
碧南高校	碧南市
享栄商業高校	名古屋市

D-8

転職　　（各1）

名称	業種	所在地
名古屋文理大学	教授	名古屋市（稲沢市）
静岡福祉大学	教授	焼津市

D-9

再就職　　（各1）

名称	業種	所在地
菊武学園本部	事務局長	名古屋市

表 6 系

E-2　東亜同文書院

	人数
よく知っている	2
少し知っている	2
知らない	

E-3　愛大事件

	人数
よく知っている	
少し知っている	4
知らない	

E-4　学園紛争

	人数
よく知っている	1
少し知っている	3
知らない	

E-5　母校・愛知大学への関心

	人数
大変関心	1
多少関心	2
普通	1
あまり関心ない	

E-6　愛知大学の情報

	人数
1. テレビ、新聞	1
2. 大学のホームページ	
3. 「愛大通信」	
4. さまざまな会合	1
5. 受験雑誌	
6. 同窓生	
7. 同窓会報	2
8. 愛大新聞	
9. ほか	

E-8　同窓会（支部活動も）参加

	人数
はい	
よく	
時々	1
いいえ	3

E-13　人生をふりかえって

	人数
大いに満足	3
まずまず満足	1
普通	
少し不満	
大変不満足	

E-14　満足度と愛大卒業生との関係

	人数
大いに関係	3
多少関係	1
普通	
あまり関係ない	
全くない	
無回答	

【愛知大学卒業生アンケート調査報告特集（3）
「愛知大学 1960 年代前半期（1960～1966）における法経学部（豊橋校舎、名古屋校舎）、
文学部の卒業生と大学院修了生の在学状況とその後の軌跡」】

4．おわりに

愛知大学名誉教授（地理学）、愛知大学東亜同文書院大学記念センター元センター長　**藤田　佳久**

以上、愛知大学卒業生のアンケートの第3回目として、1960 年から 1966 年の間の卒業生に対するアンケートの結果について紹介してきた。法経学部はもちろんだが、文学部も全専攻はまだそろわないが、各学科が揃うようになった。

この時期の前には 13 号台風や伊勢湾台風があり、その被害は大学にも及び、休校措置の影響があった。そして 1960 年「安保」は全国の学生だけでなく社会人まで参加するデモまで行われ、学生たちも新たな対応を経験した。この安保改定と反政府運動で岸内閣は退陣し、新たに誕生した池田内閣は、分断された国論をケインズ理論の導入による高度経済成長政策で誘導統一し、1960 年代は少しずつその軌道に乗った。1960 年の開始時はまだ貧しい日本であったが、1966 年にはその成果が出始めていた。全体的には就職もスムーズであった。しかし、愛知大学はその出花を 1963 年、薬師岳の遭難でくじかれ、本間学長の計画した理工系学部などの設置が幻となった。ただし、本間学長は、以前の愛大事件への対応と同じく、この遭難事件への対応に全力で立ち向かい、愛知大学の社会的な信用を盛り上げ、学生たちからの強い支持も受けた。愛知大学にとっては、次々に降りかかる難題を学生ともども乗り越えたといえる。

このような経過の中で、学生も教員も自信をもって勉学に、クラブに活躍した時期となった。教員も学術会議に 5～6 人も当選するなど、優れており、学生の自慢でもあった。アンケートによれば、学生たちによる自主ゼミ活動は活発に行なわれ、同活動は他大学での発表会、愛大での全国学生研究大会の開催なども次々と経験した。それを支えた条件の一つには、学生たちの研究に「自由」が「自由な校風」として確保されていたことがあり、この愛大の持つ「自由さ」を多くの回答が支持し、共感していることからもわかる。

そして、このような中で得られた「友人」について、多くの回答者がその価値を十二分に認めていることである。学生時代だけでなく、卒業後も友人関係が続いており、人生を豊かに築き上げてきたことがわかる。これも愛大で得られたよき宝物であったといえる。

そしてもう一つは、学生と教員が、学校で、教員宅で、公館あるいは寮、さらには野外で積極的に交流し、「ともに学ぶスタンス」が出来ていたことである。回答からはそれが当たり前のように記されており、学生と教員両者の熱い信頼関係が醸成されていた

ことが伝わってくる。以前の愛大事件やこの時の山岳遭難事件での本間学長を中心とした大学側の努力が、学生のみならず、社会の愛大への信頼度を高め、大学というか学園の基礎を固めることになり、教員と学生一体化しつつ高められたといえそうである。学生の満足度の高さを見ると、文句なしの愛大への高い評価の多さは驚くほどである。「学びは建物ではない」という主張はそれを裏付けている。

そしてそのベースには、もう 1 点、愛大の東亜同文書院を原点にした歴史への誇りがあった。書院生を中心に外地からの編入生との接触は多く、彼らの持つスケールの大きさは刺激的で、書院生は愛大生のモデルになっており、そのモデルを継承しようとした学生も多かったのである。他大学では味わえない愛大のオリジナリティを生んだといえる。それがこの時期にはまだ継承され生きていた。この書院生などの編入生は、ほとんど構内の寮で生活しており、地元や全国からの入学生は、その寮生活で様々な経験、思考、行動を身に着けたといえる。その意味では、寮は愛大の宝物であり、色々な面からも愛大をまとめる発信源であり、力であったといえそうである。こうしてみると、この 1960～1966 年の愛大は、山岳遭難事件への対応も踏まえ、創設期以来初の「黄金時代」とでもいうべき時期であったように思われる。

このように回答者の 60 年ほどまえの愛大学生時代は、各人にとって歴史時代に近い。しかし、今回のアンケート調査で、高齢化の中でも、しっかりとその歴史を記憶し、その流れをたどれる回答内容を示していただけたことは、大変感激することであり、うれしいことであった。それは同時に長い時間の中で、愛大の動きに関心を持ち、注視して来られたことでもあり、ありがたいことでもある。今回も、このような形で卒業生として外からの目を大学に注いでいただいた回答項目もあり、その意見も提示していただけたたことは、内側しか見ていない大学人にとって耳が痛くとも感謝すべきであろう。もちろん、大学の発展を評価していただく声も多くあるが、愛大を愛するが故と理解させていただきつつも、遠慮がちも含め、厳しい声がかなりあることもわかった。それは、簡潔に言えば、近年の愛大は委縮している、じれったさを感じるという指摘で、当時の卒業生から見れば、俺たちは精一杯頑張ってきたのに、どうなっているのかという声である。つまり、卒業生という外部評価の厳しい声が多く投げかけられていることである。

確かに、今回の調査対象の回答は、当時まだ貧しい時代、大学に施設もまだ不十分な時代ではあったが、卒業生の眼から見て描かれた当時の愛大は学生はもちろん、教師も含め、活動的で生き生きとしていたことは十分にうかがわれる。このような時期の存在を「温故知新」として知り学び、卒業生たちからの厳しい意見に対して、現状への評価を受け止め、対応策を検討する良いチャンスになれば幸いである。

最後に、突然のお願いにもかかわらず、多くのご回答をご丁寧にお寄せいただいた卒業生各位には、心より厚くお礼申し上げる。ありがとうございました。今後とも愛大を見守っていただきたい。